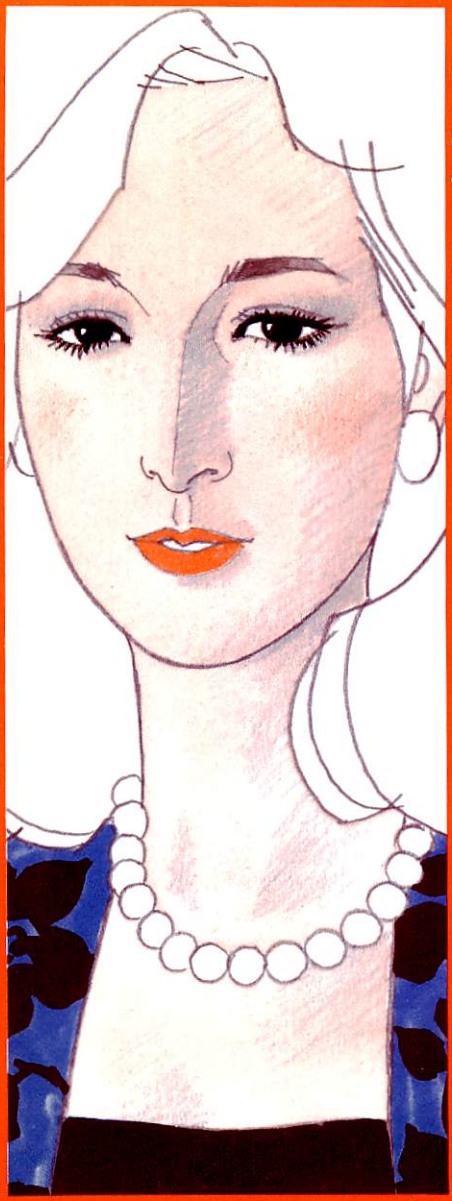
山村美紗

不倫家族殺人事件



MISA YAMAMURA

不倫家族殺人事件



山村美紗

集英社

MISA YAMAMURA

第一章　行方不明の娘　7
第二章　手がかり　23
第三章　容疑者たち　39
第四章　謎のキーホルダー　55
第五章　血液型の疑惑　71
第六章　不倫の家　79
第七章　密室殺人？　87
第八章　子供の父親　103

第九章　不倫の相手　119
第十章　甘い夜　127
第十一章　埋められた死体　136
第十二章　指紋の謎　152
第十三章　通夜　168
第十四章　密室の謎　176
第十五章　アリバイトリック　184
第十六章　密室トリックの解明　200

装画　深井　国

装丁　荒川じんぺい

不倫家族殺人事件

第一章　行方不明の娘

1

水原ミキは、大学から家に帰って来ると、いつもの習慣で、郵便ポストをちらっと横目で見た。
平凡な生活の中で、たとえダイレクトメイルでも、手紙が来ることは楽しみだった。
「あ、何か来てる！」
急いでとり出してみると、それは、東京の大学へ行っている夏川麻里からの手紙だった。
「うれしいっ！　麻里からだわ」
麻里は、生まれてからずっと、京都で育ち、ミキと同じ高校を出た親友である。
ミキは、自分の部屋に駈け込むと、すぐに封を破って中を見た。
ミッキー、元気？
京都は、もう紅葉の季節でしょうね。
私は、なんとなく、体の調子がわるくて、大学を休んでいます。
夏休みに京都に帰ったとき、ミッキーには、言わなかったけど、今、恋をしてるの。ナンチャッテ♡♡♡……
本当よ。でも、色々悩みがあるの。このことは、うちのママにはいわないでね。お正月には、多分帰れないけど、また、手紙出します。では、

ジョージ君と仲良くね。

麻里より

手紙は、いつもの通り、ワープロできれいに打たれていた。ハートのマークだけが赤いボールペンでかかれている。

ミキは、夏休みに、麻里と会ったときのことを思い出した。

彼女は、高校時代から、美人で男子学生からさわがれていたが、東京へ行って、一段と大人っぽく、きれいになっていた。

しかし、そのときは何故か元気がなく、悩みごとがある様子だった。

「どうしたの麻里、なにかあるの？」

ミキは、敏感に察して言った。

「え？　いえ、何もないわ」

「水くさいやないの、高校の時には、何でも話してくれたのに」

「ごめんね、ミキ。どうしてもいえないことだってあるわ。それより、ジョージ君は元気？」

ジョージというのは杉譲二といって、高校時代からのミキのボーイフレンドである。

「ええ、元気よ。でも、彼、アルバイトで忙しいし、クラブの練習もあるから、最近あんまり会えないの」

「そう」

麻里は、にこやかにいったが、心はうわの空みたいだった。

〈麻里は、何を悩んでるのかしら？〉

ミキは、手紙を前に考え込んだ。

麻里も、東京の大学へ行ってから、何人かのボーイフレンドとつき合っている。

「T大の学園祭へ行ったとき、四年生の石田という人と知り合ったの。ハンサムで、なかなかいい人よ」

と、手紙でいってきたときもあるし、

「同じ大学の野田くんに、映画に誘われて行って来たの、楽しかったわ」

と、公衆電話でかけて来たこともある。
教授が素敵だといっていたときもあるし、家庭教師先の高校生のお兄さんがイカすと書いて来た時もある。〈それなのに、今度だけは、どうして、私に言えなくて、悩んでいるのかしら？〉
ポテトチップスをとってきて、かじりながら、ミキは、考えた。
そのうちに、はっと気がついた。
〈そうだわ、きっと、今はやりの不倫の恋なんだわ〉
それでも、私にだったら教えてくれてもいいのにと、ミキは、残念だった。
〈東京へ行ってしまうと、いくら親友でも、変ってしまうのだろうか？〉
ミキのような安サラリーマンの家の子とは違って、麻里は、いい家の娘である。
父親は、大手商社員で、今は、アフリカに単身赴任している。京都の大きな家には、数年前まで祖母がいて、
「ママも、大変なのよ」
と、麻里がいっていたが、二年ほど前に、亡くなっている。
麻里は、一人娘で育って、小さいときからピアノや英語を習いに行っていたし、服装なども高価で、センスのいいものを着ていた。
ミキも、東京の大学へ行きたかったけど、家の経済状態が許さなかった。それでも、内緒で、麻里と同じ大学を受けてみたが、落ちてしまったのだ。
東京までは、長距離で、電話料が高くなるので、めったに、電話はかけないようにしているが、ミキは、急に、麻里と話したくなって、電話をかけてみた。
しかし、外出しているらしく、出なかった。

2

ミキが、次に、麻里から手紙を受け取ったのは、十二月に入ってからだった。

ミッキー、どうしてるの？
お手紙有難う。色々心配してくれてうれしかったけど、不倫の恋なんて、笑っちゃいました。あの件は、もう終ったの。今は、元気です。とうとうママが東京へやって来て、知られてしまったの。それでジ・エンド。
ママは、しばらく東京にいて、お正月も、一緒に過すことになりそうです。
あの件は、忘れて下さい。それが友情よ。三月には、帰ります。

麻里

その日も、ミキは、何度か電話したが、とうとうつながらないままだった。
〈手紙には、笑っちゃいますなんて書いてあったけど、やっぱり不倫の恋をしていたんだわ。そして、親が上京してきて、やめさせたのに違いないわ〉
ミキは、考えた。
〈でも、一ことぐらい教えてくれてもいいのに〉
そう思ったが、あまり立ち入らない方がいいのかも知れないと思って、その年は、年賀状だけ出しておいた。
お正月がすぎて、ミキは、買物の途中で、麻里の家の前を通った。
中から、赤ん坊の声がしたので、びっくりしてベランダを見ると、おしめが干してある。
〈どうしたのかしら？〉
ミキは、チャイムを押してみた。
出て来たのは、麻里の母親の陽子だった。
「あら、ミキさん、久しぶりね。まあ、入って頂戴」
陽子は、にこにこしていた。
昔、女優をしていたこともあっただけに、麻里に負けず、美しい。
「あの……、赤ん坊の声がしたけど、どうしたんですか？」

ミキは、突っ立ったままできいた。
「ああ、赤ん坊が生まれたの。みてくれはります？」
ミキは、びっくりして陽子の顔をみつめた。
「誰の赤ちゃんですか？」
「何いってるの。私の子供よ、麻里の妹が出来たの、さあ、入って」
ミキは、すすめられるままに、部屋に入った。
小さなベビーベッドがおいてあって、赤ん坊が眠っている。
「可愛いでしょう？」
「はい。でも……」
「でも、何？　びっくりしたみたいな顔をして。私、まだ、三十八歳よ。赤ん坊が出来たって、おかしくないでしょう？」
「はい。あの、麻里はこのこと知ってるんですか？」
ミキは、堅い声できいた。
「もちろん、知ってますわ、三月に帰って来たときに見たいって」
「そうですか」
ミキは、めまぐるしく考えた。
〈この赤ん坊は、本当に、麻里の妹なのだろうか？　イヤ、ちがう。麻里の子供だわ。それでは、外聞が悪いから、両親の子供ということにしたんだわ〉
「どうしたの？　果物むきましょうか？　それとも、ケーキがいい？」
陽子は、ミキの顔をのぞき込んだ。
「可愛い赤ちゃんですね。麻里に似てるわ」
ミキがいうと、陽子は、ぎくっとしたように、体をひいた。
「あら、そうかしら？　私に似てるって、ご近所の方はおっしゃるのよ」
それは、強い口調だった。しかし、すぐに、陽子は、言葉を柔らげた。
「麻里から、最近、たよりがありますか？」
「いえ。十二月に来たきりです。年賀状は来ませんでした」

「そう、あの人も忙しくしてるからだわ。主人も、二月には、帰って来ますし、三月には、麻里が帰ってくるので、また、遊びに来てね」
「はい」
ミキは、早々に、夏川家を辞去した。
はじめて、麻里の悩みがわかったと思った。
〈彼女は、東京で不倫の恋をして、妊娠してしまったのだわ。それを知ったお母さんが、なんとかしようと思ったが、もう、堕せない、仕方なく、子供を生ませて、自分たちの子供として、育てることにしたんだわ〉
年賀状も来ず、お正月には帰れないといったことから、生まれたのは、その頃だろう。
〈とすると、夏休みに会ったときには、もう六カ月くらいになっていたんだわ。お母さんが気がついたのが、七カ月だとすると、もうどうしようもない〉
ミキは、暗い気持になった。

3

ミキは、色々考えた末、麻里が、三月に帰って来たときには、このことは、気づかなかったことにしようと思った。折角、本人も、親も隠しているのに、親友の自分が、あばくことはないと思ったのだ。
やがて、麻里は、立ち直り、何くわぬ顔で、新しい恋人を作り、結婚するだろう。それでいいのだ。
それにしても、麻里は、いい親を持って幸せだと思った。
麻里と陽子は、本当に、仲のいい親子だった。
〈うちの親だったら、自分の子供にしてまで育ててくれないわ、大体年だって四十五歳で、その母親が生んだといっても、近所の人が信じないけど〉
今、ミキも、麻里も二十歳だった。
陽子が三十八歳と若いのは、後妻だからである。麻里の母親は、彼女が八歳のときに亡くなり、母親の妹

だった陽子と、陽子の母親、つまり、麻里の祖母が引きとって育てていた。麻里の父親が、仕事柄、出張が多く、育てることが出来なかったからである。

そして、二年ほどたって、陽子が、麻里の父親と再婚して、正式に、麻里の母親になった。

だから、後妻といっても、前妻と血のつながりがあり、十年も育てていることもあって、本当の親子以上に、仲が良かった。

二人は、まるで、姉妹のように、どこへでも一緒に行き、何でも話し合っていて、親友のミキが、

「あなたたち、レズじゃないのォ」

と、嫉妬を焼く位だった。

でも、今、麻里が大人の世界に入ってしまったことがわかって、ミキは、急速に、麻里のことに関心がなくなってしまった。

そして、反動のように、ボーイフレンドの杉に、夢中になって行った。

ジョージとみんなが呼んでいる杉とは、ミキは、まだ、キスもしていない。

ボーイフレンドは、彼だけでなく、他にも、何人かいたし、大人の世界に入るのが怖かったこともある。

〈でも私は、絶対嘘は許さないわ、麻里みたいになったら困るもの〉

でも、いつまでも、ボーイフレンドの一人ではつまらない。

〈一体、彼は、私のこと何と思っているのかしら？キスぐらい迫って来たらいいのに〉

ミキは、そう思うようになった。

二月のある日、二人は、喫茶店にいた。

ジョージなどと混血児のような呼び方をされているが、もちろん、両親は日本人だし、勉強もよく出来て、東京のT大に匹敵するK大工学部に在学している。

それに、長身で、ハンサムだ。

ジョージと呼ばれるのは、名前が、譲二であることもあるが、その長身と、彫りの深い顔から来ているようだった。

「ねえ、ジョージ、あなた、彼女いるの？」
コーヒーを飲みながら、ミキは切り出した。
「どうして？　いるわけないじゃない」
「女の子から、色々言ってくるでしょう？」
「関係ないよ、急に、どうしてそんなこときくの？　今日のミッキーはおかしいよ」
彼は、コーヒーを飲みながら、窓の外を見た。仕方なく、ミキは、
「麻里から手紙が来たんだけど、恋人が出来たんだって」
と、いった。
「本当？　彼女みたいにきれいな人に、今までいなかったのが不思議なくらいだよ」
杉は、関心なさそうにいった。
「それでね、麻里が、あなたは、恋人いないのってきくから、いるって答えたわ」
「へえ、誰？」
「ジョージ。あなたよ」
「そんな……困っちゃうな」
杉は、あわててコーヒーにむせた。
「どうして困るの、私じゃ困るの？　美人じゃないから？」
「そんなことないけど……。僕たち何もないのに、彼女が本気にしちゃうよ」
「じゃあ、私は、あなたの何なの？　単なるガールフレンドなの？　それだったらはっきり言ってよ。今、恋人になってくれっていう人がいて、迷ってるの」
ミキは、恰好つけていった。
「へえ、ミッキーが、そんなこと言うと思わなかったなあ。……さあ、何だろう？　女友だちかな？」
「ジョージのバカ！　もっとうまいこといえないのォ」
ミキは、彼をにらんだ。

4

ミキは、楽しい毎日を送っていた。

喫茶店で、アタックしてから、杉譲二（ジョージ）も、次第に、ミキを意識するようになり、最近では、恋人同士のようないいムードになってきたからである。

その日も、ミキは、譲二とデートの約束があって、うきうきしながら、一旦、家に帰って来た。彼女の家は、大学とは、目と鼻の先である。母親は、パートに出ていて留守なので、洋服を着がえて、約束の喫茶店に行くつもりだった。

ところが、家の前まで帰ってくると、夏川麻里の母親陽子が待っていた。

「こんにちは。どうしはったんですか？」

ミキは、明るくいった。そして、すぐに、はっとした。

陽子の顔が蒼く、やつれた様子だったからだ。

「あ、ミキさん、お待ちしてたの。麻里のことで、相談に乗って頂きたくて……」

「あ、そうですか。困ったわ、どうしよう？」

ミキは腕時計を見た。高校の時、麻里とお揃いで買ったものである。

「どこかへお出掛け？」

「ええ。ちょっと。でも、いいですわ。どうぞ」

ミキは、陽子を玄関へ招じ入れた。

「麻里が、どうかしたんですか？」

ミキは、時間がないこともあって、早口できいた。

「ええ。そうなんです。麻里が、行方不明になったんです」

陽子は、暗い顔でいった。

「えっ、麻里が？　いつからですか？」

ミキは、驚いて陽子をみつめた。

「ここずっと、連絡がつかないし、東京の部屋まで行ってみたんですけど、ずっといないというんです。あなた、何か知りませんか？」

「全然。でも……」
ミキは、あとの言葉をのみ込んだ。
内心では、もし、麻里が家出をしたとしたら、不倫の恋の末、赤ん坊を生んだことにあると思っていた。でも、その件については、陽子が自分たちの子供として処理し、ミキには何にもいわなかったのに、と不満があった。
「でも、何ですか？　何か知っているんだったら教えて下さい。まさか、ここにいるんじゃないでしょうね？」
陽子は、ミキの心も知らずに、せき込んできいた。
「いません。前にもいったように麻里からは、年賀状も来ませんでした。去年の秋頃から、麻里はおかしかったけど、何があったんですか？　お母さん、知ってるんでしょう？　隠さないで教えて下さい」
ミキは、頬をふくらませていった。
「おかしいって、どんなにですか？」
〈ああ、イヤだ。大人って、シラばくれて〉
ミキは、心の中で呟いた。そこで、
「麻里って、不倫の恋をして、赤ちゃん生んだんでしょう？　私、知ってます。麻里からきいたんです」
と、いってしまった。
「え？　そんな……」
陽子は、絶句した。
「どうして隠すんですか？　麻里がいなくなったのなら、きっと、そのことが原因です。麻里は、きっと、その相手の人が好きだったんだわ。それなのに、その人と別れさせられて、赤ん坊まで取りあげられたから、淋しくなってどこかへ行ってしまったんだわ」
ミキは、激しい口調でいった。
〈何もかも隠しておいて、今さら相談に来たって知らないわ〉
という怒りもあったが、麻里が、そんなに悲しんでいたのかと思うと、何もしてやれなかった自分が、はがゆかったのだ。
うつむいていた陽子は、顔をあげて、

「ミキさん、麻里は、赤ん坊なんか生んでいません。あれは、私の子です。それだけは、誤解しないで下さい、お願いです。そんなことを言われたら、あの子が、お嫁に行くときに、さしつかえます。でも、あの子が、恋愛問題で悩んでいたのは本当ですし、それをやめさせたのも、私です。多分、それが原因だと思っているんですけど、相手の人の名前と住所がわからないんです。もし、知っていたら教えて頂けないかしら？　その人のところへ行ってみたいのです。麻里は、そこにいるのかも知れないし……」

といった。

「え？　相手の人の名前と住所わからないんですか？　麻里の手紙には、お母さんが、上京されて、相手の人と一緒にいるところをみつかってやめさせられたというように、書いてあったんですけど」

ミキは、譲二が喫茶店で待っていることも忘れて、つめ寄った。

「いえ、相手の方には会ってません。ただ、男の人の服や、煙草、それに、男物の傘や靴まであったので、男の人と一緒にいることがわかったんです。東京へやったのは、大学へやって勉強させるためなのに、こんなことをしているなんてと思って、最初は怒りました。でも……、でも、どうしても別れられないところまでいっているというので、それなら、仕方がないから結婚しなさいって言ったんです。学生結婚している人もいる世の中ですよって」

「それで、麻里は、何ていったんですか」

5

「結婚は出来ない人だというんです。それで、相手の人の名前と住所をきいたんですけど、どうしても言わないのです。お母さんが乗り込んでいったら、相手の人に迷惑になるからって。でも、こんなことにまでなっているのにって、責めたんですけど、とうとう言いませんでした。ミキさんも、ご存知のように、あの子

は、普段おとなしいのに、自分がこうと思ったら、きかない芯の強いとこがありましたから」

陽子は、涙を流した。

ミキも、話をきいているうちに、陽子に同情してきた。

おとなしい麻里に芯の強いところがあるのは、ミキもよく知っている。

「私、A型なの。占いの本読んでたら、A型って、こと思ったことは、絶対通すという強情なところがあるんやって」

と、麻里もいっていたことがある。

「ミッキーは、B型でしょう？　だから、あまり、ものごとにこだわらず明るいんだわ」

ともいっていた。

陽子の話をきいていると、やっぱり、麻里は妊娠していたんだと確信を持つことが出来た。

〈でも、どうしても別れられないところまでいってるというので……〉

〈こんなことにまでなっているのにって〉

と、陽子は、いっている。

相手の名前も言わない、妊娠していて、もうおろせない、そういうとき、親としては、生まれる子を、自分の子にして育てるより外に方法はないじゃないかと考えると、急に、陽子が気の毒になってきた。

それで、今度は、少し、口調を柔らかくして、

「相手の人は、私も知らないんです。すみません」

と、いった。

「そうですか。本当に、あなたにもいってないとしたら、困りましたわ。どこを探したらいいのかわからなくて。実は、明日、父親が帰って来るのです」

「父親？　ああ、麻里のお父さんのことですか。アフリカに行っておられるという」

ミキは、それで、母親の陽子が、こんなにあわててるのだと思った。

「ええ。明日五時、大阪空港着の飛行機で帰ってくるんです。それで……」

と、いいかけたとき、チャイムが鳴った。
ドアをあけてみると、杉だった。
「あ、ジョージ。ごめんなさい。実は、麻里のお母さんが来はったので、出られへんかったの」
「それならよかったけど、どうしたのかと思って。じゃ、僕、帰るから」
「待ってよ、待って」
ミキは、あわてて引きとめた。
「おばさん、すみません、出掛けていいですか？　麻里のこと心配ですけど、そのうち、連絡があると思います。きっと、その男の人のところに行っているんですわ」
ミキは、陽子にそういうと、
「ジョージ、表で待ってて、用意してくるわ」
と、立ち上った。
「あの、それで、お願いなんですけど、明日、大阪空港まで一緒に行っていただけないでしょうか？　久しぶりに帰ってくる主人に、どういったらいいかわからなくて。一生に一度だけ、私を助けて下さい。お願い、ミキさん」
陽子は、急いでいった。
「えっ？　空港へですか。いいですけど、ジョージ君と一緒にでもいいですか？　彼は、車持ってるから、乗せて行って貰いたいんですけど」
譲二がどういうかわからないが、このあと説得しようと思った。彼とは、土曜日の明日、ドライブする予定だった。
「ジョージ君って、今の方、ええ、いいですわ、お願いします。……本当に、羨やましいわ。麻里も、あなたのように、若い男性を恋人にしてくれていたら、どんなにかうれしかったでしょうに」
陽子は、麻里のことを考えたらしく、また涙を流した。

6

翌日の午後四時、ミキは、譲二と、車で大阪国際空港にむかっていた。

前日、彼と会ったとき、ミキは、麻里のことをすべて話した。それでないと、こうして、デートの時間をさいて、空港へ行く理由が説明できないからだった。

「でも、ミッキー、昨日の話だけど、麻里のお父さんは、事情を全部知ってるんだろう？　でないと、自分たちの子供として、籍を入れたり、育てることできないよね」

譲二が、巧みにハンドルをさばきながらいった。

「もちろんだと思うわ。だけど、赤ちゃんは、今度はじめて見るわけよね。今回も、一時帰国で、四日くらいしか日本にいられないという話だったけど、麻里が行方不明だなんて驚くでしょうね」

「でも、いないといっても、時々は、自分の部屋に帰って来てるんじゃないかな。まさか、母親がたずねてくると思わずに、彼と一緒にいるんだと思うけど」

譲二は、行方不明だといっても、本当は、彼とマンションでも借りて東京で住んでるんじゃないかと思っているようだった。

「自分の部屋で一緒に住んでたら、前のように、突然、お母さんが来て困るからだと私も思うわ。でも、その場所さえわかれば、心配しないですむのに、どうして、私にでも教えてくれないのかしら」

「ミッキーにいったら、親にわかってしまうと思ったんだろうね。でも、相手の男って悪い男だね。どうして、彼女のような頭のいい女性が、そんな男にひっかかったんだろう？　残念だな」

二人は、ずっと、麻里のことを話しながら空港についた。

陽子の方は、先に来て待っている筈だった。

「国際線は、手前の方だったね」

「そうよ、空港の左のはし、駐車場があるかしら？」

ミキの思った通り、駐車場は混んでいて、なかなか駐車出来なかった。まわりをぐるぐるまわってやっと駐車できた。

二人が走って空港入口に行くと、陽子が立って、手を振っていた。

「あ、すみません。遅くなって」

「中々、駐車できなかったでしょう？　ぐるぐるまわってるの見えてましたわ」

三人は、到着ロビーで、飛行機を待った。三十分も遅れて、飛行機が着き、やがて、夏川良介が、姿をあらわした。

「おかえりなさい。ミキさんたちも、来て下さってるのよ」

「それは、どうも有難う」

「おかえりなさい」

ミキは、ぴょこんと頭をさげた。久しぶりに見る良介は、日焼けして、男っぽく、精悍な感じだった。

〈麻里の相手は、あんな感じの中年の男かもしれないわ。麻里の家は、お父さんがいつも不在だったから、彼女にファザーコンプレックスがあったのかも……〉

そんなことを考えているとは夢にも知らず、良介は、愛想よくいった。

「大きくなったね。そして、きれいになったなあ。しばらく見ないうちに」

ミキは、譲二を紹介し、挨拶がすむと、良介は、三人を、空港にある喫茶室へ連れて行った。

その席で、陽子は、娘の麻里と連絡がとれないということを、夫に話した。

「そうか。困ったな」

良介は、ちらりと、ミキたちの方を見た。

二人が、どれだけ事情を知っているのかわからないので、何といったらいいかと迷っているらしい。その気配を察した陽子が、

「お二人とも、麻里のことは、知っていらっしゃるのよ。秋頃から心配して下さっていたんですよ」

と、いった。

良介は、うなずいて、煙草を吸っていたが、「東京のマンションへ電話してみよう。今日、日本へ帰ることは、手紙でいっておいたから、戻ってるかもしれない」

といって、立ち上った。

みんなも立とうとしたが、その時、注文したものが来たので、良介は、みんなを残し、一人で、出て行った。

なにげなく、その後姿を見送っていたミキは、はっとした。

良介が喫茶室の入口に座っていた若い女性の方をちらっと見たあと、その女性がすぐに立って、後に続いたからだった。

〈あの女の人は、ゲートからおじさんが出て来る時、うしろにいた人だわ。知っている人なのかしら？　なんだか、おじさんが合図をして、彼女が出たみたい〉

気になり出すと、確かめなくては気のすまない性格のミキは、ぱっと立ち上った。

「私も、電話かけてくるわ」

ミキは、公衆電話のあるところまで走っていったが、少し手前で、「あっ」といって、足をとめた。

良介とあの女性がひそひそと話をしていたからだった。

第二章　手がかり

1

〈やっぱり、あの女の人と、麻里のお父さんは、秘密の関係にあるんだわ〉

秘密の間柄でなければ、みんなの前で、話をすればいい。こうして、こそこそする必要はないのだ。

ミキは、そっと、喫茶室に引き返した。

やがて、良介が、何喰わぬ顔で戻って来た。

「電話は、通じなかった。家に帰ってから、またかけてみよう。では、帰ろうか」

良介は、一刻も早く家に帰りたい様子だった。

「日本は、一年ぶりだなあ」

外へ出て歩きながら、良介は、きょろきょろあたりを見まわしている。

〈麻里のことは、あまり気にしていないみたい。それとも、私たちがいるから、感情をあらわさないのだろうか？〉

ミキは、じっと、良介を観察した。

空港玄関までくると、陽子夫人はタクシーの列に並び、譲二は、駐車場へ車を出しに行った。

「麻里もいろいろあったけど、これからも仲良くしてやって下さい」

良介が、はじめて、父親らしい顔でいった。

「はい」

そのとき、良介の横を、例の女性が、すり抜けて行

った。良介と彼女は、一瞬みつめ合い、やがて、良介は、こちらに視線を戻した。
「あの……、私たち、ここで失礼します。折角、大阪まで来たので、これから、市内で、買物したり、食事したいと思って」
「ああ、それなら行っていらっしゃい。今日は、どうも有難う。また、遊びに来て下さい」
そこへ、まず譲二が、そして陽子が、タクシーに乗って来た。
「では、おばさん、ここで失礼します」
「あら、うちに来てくれはったらいいのに。ささやかやけど、食事の仕度がしてあるの」
陽子は、車の窓から首を出していった。
「また、伺います。今日は、おじさんと、ゆっくりお話をして下さい」
ミキは、そういうと、譲二の車に乗り込んだ。
「どこへ行くの？　京都へ帰る？」
譲二がきいた。
「大阪で、食事するといったから、一応、外へ出て。それから、そっと、あの人をつけて欲しいの」
ミキは、陽子と良介にわからないように、右の方を指さした。
さっきの女性が、タクシー乗場に立っている。列は長くて、彼女の番がくるまでには時間がかかるようだった。
「どうして？」
「あとで話すわ。まず、ここから出て一周してから戻って来て欲しいの」
譲二は、車をスタートさせた。陽子たちの乗った車も、すぐあとに続く。
「ねえ、どうしたの？」
ミキは、良介と話していた女性のことを喋った。
「きっと、おじさんは、外国で、あの女の人と知り合ったんだわ。だから、一体、どこに住んでいる人なのか、つきとめたいの」
「やれやれ」

それでも、譲二は、ミキの言った通り、空港を出たところで、陽子たちの車と右左に別れ、しばらく走ってから、空港に戻ってくれた。

タクシー乗場を見ると、丁度、あの女が車に乗り込むところだった。

「この手前で待っていて、やり過してから尾けよう」

「有難う」

やがて、ミキたちの車は、タクシーのあとに続いて走り出した。

「あれ、京都の方に行くなあ」

「外国で知り合って、同じ京都だというので、仲良くなったんじゃないかしら」

ミキは、好奇心にあふれた顔でいった。

「でも、ただ、知り合いというだけじゃないかなあ、飛行機の中で、隣だったとか」

譲二は、二人が話している現場を見てないので、信じられないようだった。

「絶対あやしいわ。だって、女のカンなんだから」

「また、それだ。いつも、最後は、女のカンなんだよなあ」

譲二は、苦笑した。

前の車は、高速道路を京都の南インターでおり、伏見の方に走って行く。

「どこへ行くんだろう?」

「きっと観月橋までの間だわ。でなければ、大阪から、天満橋の方をまわる筈だから」

車は、桃山城に近い高級住宅街の中の、一軒のマンションの前でとまった。

彼女は、荷物を持つと、すたすたと中へ入って行った。

2

二人は、それから三十分後、京都駅の地下街で、食事をしていた。

「住んでいるところは突きとめたけど、名前はわから

なかったわ」
　ミキが、ハンバーグを食べながらいった。
「でも、住んでいるところさえわかれば、そのうち、名前もわかると思うけど」
「そうね。でも、麻里のお父さんだって、四日しか日本にいないのよ。あの女の人も、すぐにまた、外国へ行くんじゃないかしら？」
「麻里のお父さんは、これからもずっと、アフリカにいるのかな？」
「おばさんの話では、あと半年ぐらいで、日本勤務になるはずだってきいたわ」
「単身赴任って、問題なんだよね」
　譲二が、大人びた口をきいた。
　男が一年以上も、単身赴任してたら、女が出来ても仕方がないと思っているようだった。
「だから、現地の人を、恋人にするのだったらいいのよ。でも、日本人で、同じ京都に住んでいるとなると、あと引くと思わない？」
「さあ、わからない。それに、あの女の人が、彼女ときまったわけじゃないし」
　譲二は、折角デートしようと思っていたのに、振りまわされて、疲れた様子だった。
「それより、麻里は、どこへ行ったのかな？　その方が、大変だと思うけど」
「ジョージったら、麻里が好きだったんじゃないの？」
「ちょっとだけね」
「えっ、そんな……。でもいいわ。彼女の方には、恋人がいるんだもの」
　食事を終えると、二人は、また、別の店に入って、コーヒーを飲んだ。
「麻里のお父さん、今度はじめて、自分の子供を見るのね」
「本当は、孫だけど」
「おじさんに、もし、恋人がいるのだったら、麻里に強いことえない筈だわ」

「でも、ちょっとした浮気をするのと、子供まで生んじゃうのとでは、違うよ」
譲二は、強く主張した。
〈やっぱり、彼は、男なんだわ〉
ミキは、彼の顔をみつめた。
「ねえ、ジョージ、春休みに、東京に行かない？　麻里のところへも行きたいし」
「えっ、一緒に？　困っちゃうな。でも、麻里は、三月になったら帰って来るっていったんだろう？」
「ええ。でも、私、なんだか彼女は帰って来ないような気がするの、帰ってくるぐらいだったら、今日、連絡がつく筈だわ。麻里は、きっと、親を捨てたんだわ。赤ん坊と一緒に」
思いつめたような顔でミキがいった。
「さあ、そうかなあ。三月になったら、けろっとして帰ってくるような気がするんだけどなあ。今日のとこは父親に、合わせる顔がないと思って、逃げてるんだと思うけど」
「女の直感よ」
「また！　すぐカンなんだから」
杉譲二は、ミキを家の近くまで送ると、次のデートを約束して、別れた。別れるとき、ミキは、彼にいった。
「ジョージ、今日は有難う。折角のデートをつぶしちゃってごめんなさい」
「いいんだよ。君と一緒にドライブ出来て楽しかったよ」
「本当？　うれしい！」
〈ここで、キスしてくれたら、最高なんだけど〉
と思ったが、彼は、「じゃ」と手をあげて、行ってしまった。

3

家に帰ると、もう父も母も家にいた。
「夕食は？」

母親の和子がいった。
「もうすましたわ。今日、麻里のお父さんが、アフリカから帰って来たので、ご馳走になったの」
「あ、そう。それはよかったね」
「じゃ、おやすみ」
ミキが、二階に上ろうとすると、和子は、
「そうそう、麻里さんから、手紙が来てたわ」
と、封筒を渡してくれた。
「あら、麻里から」
ミキは、二階に上ると、急いで、封筒をあけた。

ミッキー、
テストは、もう終った？
私は、体の調子がよくなくて、単位を落してしまったので、一年留年します。
色々と、ふっ切りたいこともあるので、アメリカに、半年ほど行って来ようと思っているの。
家から仕送りして貰っていたのに、こちらへ来て、アルバイトをしてたから、お金はためているし、母がいざというときのために、持たせてくれていた貯金通帳もあるので、当分はやっていけると思います。
心配しないでね。
半年ぐらいして会うときには、きっと、もとの麻里に戻っていると思います。
では、お元気で。

麻里より

ミキは、手紙を前にして、ため息をついた。なにか、麻里が、遠くにいってしまった感じだった。
〈麻里は、本当にアメリカに行くのだろうか？　探されたくないため、嘘をいってるのじゃないかしら？〉
と考えたが、麻里が、親友の自分にまで、そんな嘘をいうようには、思えなかった。
しかし、これまでの麻里だったら、事情を電話で話して、「親には、アメリカへ行くといってあるから、黙っててね」と、たのむはずだと思った。

〈それとも、相手の男の人が、こういう手紙を出すように、麻里にいいつけたのだろうか？〉

相手の男は、多分、妻子持ちに違いなかった。それで、両親に知れると困るので、アメリカへ行くと、手紙を書かせたのではないだろうか。

そして、友だちにも、同じように書けといったのかもしれない。

ミキは、一生懸命、考え続けた。

麻里は、母親には相手の男とは、手を切ることを約束したが、あきらめ切れなかった。

相手の方も、結婚する気はないが、麻里の若い軀に未練があった。

それで、密かに、二人は会っていた。

男は、麻里が、妊娠しておろせないとわかったときには、あわてただろう。しかし、母親が引きとって、自分の子供として、育ててくれるとわかって、ほっとしたに違いない。

赤ん坊を生むまでは、男は、遠ざかって姿をみせないようにしていたが、麻里の母親が、子供をひきとって、京都に帰ると、別に、マンションでも借りて、一緒に住むようにしたのではないか。

でも、いつも、連絡がとれないのでは、また母親が上京して探しにくるおそれがある。

父親が帰国したときには、一緒に探しにくるかもしれない。

それで、アメリカへ行くといって、探させないようにしたのだ。

多分、麻里は、ずっと大学にも出てない筈だった。大きなお腹をして、大学には出られない。

〈どうして、麻里のような賢い女性が、そんなつまらない男のいいなりになっているのだろう〉

ミキは、くやしかった。

「もう、私と麻里は、親友じゃないわ。勝手にしたらいいじゃない」

と呟いて立ち上って、また急に、不安になって、座り直した。

〈ひょっとしたら、麻里は、その男に殺されるかも知れない。

最初のうちこそ、麻里に未練のあった相手の男も、次第に、麻里に飽きてくる。反対に、麻里の方は、一層、男にのめり込んで行く。しまいには、奥さんに言いに行くと脅す。

もてあました男は、麻里を殺して、密かに、どこかへ埋めてしまう。

誰も、相手の男を知らないのだし、彼女は、アメリカへ行っていることになっているから、あやしまない。半年か、一年たって、アメリカから帰って来ないとさわぎ出しても、なんの痕跡も残っていない……〉

そう考えて、ミキは、ぞっとした。

よくみると、麻里の手紙は、何となく、よそよそしい。東京へ行ってから大人になったといっても、いつもの麻里の調子ではないのだ。

ミキは、麻里が高校時代にくれた手紙を出して眺めた。

Tウ　Mikiちゃん
今日　どーする？
クラブ　早く帰って、
レコードやさんに行きたいな。
そして、マクドナルドで
コーヒーと、バーガーか何か
買うのもいいナアーと思う。
Fロム　麻里ちゃん

〈全然ちがうわ。これから二年たっているからといっても、あまりに変りすぎるわ。それに第一、最近のは横書きじゃないわ。私たちって、いつも横書きなのに〉

大学のノートも、手紙も、ミキは、横書きである。

〈これは、ワープロで相手の男が書いたのではないだろうか？　そうだわ。中年の男だったら、縦書きに慣

れているわ。麻里の名前を使って、別の人物が書いているとしたら、麻里は、どうしているのかしら？〉

ミキは、興奮してきた。

それで、部屋のコーナーボックスから、今までに、麻里から来た手紙をとり出して、もう一度、眺めた。

ペンの横書きの手紙

鉛筆の横書きの手紙

ワープロの横書きの手紙

そして、ワープロの縦書きの手紙の四つに分けられる。

ミキは、それを、年月日順に並べた。

4

麻里から、ワープロ書きの手紙が、はじめて来たとき、ミキは、羨やましくて仕方がなかったのを覚えている。

麻里は、近況を書いたあと、

……
……
こんど　このワープロ買ってもらったの。
まだうまく打てないけど一番はじめにミッキーにてがみ、を書くことにします
……

と、書いている、横書きだった。

確かに、その手紙は、ところどころ、字がくっついていたり、漢字が間違っているところがあった。

でも、次からは、ずっとうまくなっている。縦書きのワープロの手紙が来たのは、夏休みに入る前だった。

今度、縦書きにもできるワープロを買ったの。

レポートなど、縦書きでないと駄目だというフルーイ教授もいるからなの。
前のワープロ、よかったら、ミッキーにあげる、乞返事！

しかし、ワープロのような高いものを貰うのは悪いような気がして、返事を出さないでいたら、ある日、宅配便で、ワープロを送って来たのである。
さすがに、うれしくて、そのワープロで、返事を出したあと、入れちがいに、麻里が帰省してきた。
〈あんなに、やさしい麻里なのに、一体どうしているのかしら？〉
ミキは、考え込んだ。
翌日、麻里の母親陽子が、ミキを訪ねて来た。
「昨日は、有難うミキさん。ところで、麻里から、何か言って来ませんでした？」
陽子は、心労でやつれた顔でいった。
「ええ。昨日帰ったら、手紙が来てましたけど……」
「えっ、手紙が来たんですか？　見せて下さい、お願いします」
陽子は、せき込んでいった。
ミキが、手紙を見せると、陽子は、
「やっぱり、あなたにも、アメリカへ行くといって来たんですね。実は、うちにも、同じことをいって来たんです」
と、がっかりしたようにいった。
「ねえ、ミキさん、麻里は、本当に、アメリカへ行くんでしょうか？　東京で、別のところに住んでいるんじゃないかという気がするんですけど」
陽子は、ミキの顔をのぞき込んだ。
「私は知りません。心配だったら、警察に探してもらったらどうですか？」
ミキは、わざと突き放したようにいった。
肝心のことは隠して、相談に来る陽子に、反撥する気持があった、それに、麻里も麻里だ。
「警察にいったりしたら、大げさになってしまって、

あの子が戻るに戻れなくなります。もう、今となっては、連れて帰ろうとは思いません。でも、住んでいるところだけは知りたいのです。住んでいるところがわかって、無事でいる姿さえ見れば……」

陽子は、涙を流した。

それを見ている間に、ミキも、彼女に同情してきた。〈母親としたら、娘の行方がわからないというのは、心配に違いない。名前もわからない男にだまされていると思うと、気が気ではないだろう。うちの親だって、私がいなくなったら、半狂乱になると思うわ〉

そこで、ミキは、急にやさしい口調になっていった。

「おばさん、私も、一度、東京へ行って、麻里を探そうと思っているんです。もうすぐ、試験が終るから、そしたら、東京へ行ってみます」

「有難う。でも、私も行って、色々調べたけど、何もわからなかったのよ。大学へもいって、お友だちにも会ったけど、麻里は、去年の秋から、ずっと休んでいるというだけなの。あまりきいても、麻里があとで困るだろうと思って、詳しくはきけなかったけど……」

「そうですか……。でも、私、行ってみます。何かわかったら、お知らせしますから」

「本当に有難う。よろしくね。そのとき、私も一緒にいきたいわ、電話してくれる？」

「はい」

ミキはそういったが、内心では、一人でいくつもりだった。

5

試験が終った翌日、ミキは、東京へ行くため、新幹線に乗った。

譲二を誘いたかったが、別の大学へ行っている彼は、今が試験の真っ最中だった。一人で、ミキは渋谷区初台にある麻里のマンションへ行ってみることにした。

ローズハイツという白いマンションは、甲州街道に面していて、駅のすぐそばだった。

管理人室へ行って、事情を話し、部屋をあけてくれるように頼んだが、管理人は、なかなか承知しない。

「お母さんとか、はっきり身内ということがわかっている人なら、あけますけど、友だちというだけではどうもね」

そういわれれば、確かにそうだった。

自分が留守をしている間に、友人と称する人物が部屋をあけさせて入ったりしたら嫌だ。そこで、ミキは、作戦を変え、麻里と写した写真や、手紙などを管理人室で見せ、話し込んだ。

管理人も、だんだん話に乗って来た。

「夏川麻里さんのことは、私も気になっていたんですよ。何しろ、去年の秋頃から、急に姿が見えなくなりましたからね。夏休みに京都へ帰ってからあと、九月十七日に土産を持って来てくれたんですが、その時、私は、いなくて、ここに、おいてあったんです。礼を言おうと思っていたのですが、十月になっても、姿が見えないので、近くの部屋の人にきいたんですが、最近見ないということでした。新聞や郵便物が、時々まとめてとってありましたから、夜の間にでも、ちょこちょこ帰って来たんだと思います。でも、お正月前からは、ばったり帰って来なくなって、それからずっと見ません。管理費や、電気、水道代などは、預金通帳からの引きおとしになっているし、マンションも、賃貸マンションで、家賃は引きおとしになっているということなので、こっちは、何もいうことはないんですが、やっぱり気になりましてね。お母さんが、何度か来られたときも、その話をして、部屋を調べてみたんですが、別に、異常はありませんでした。新聞は、十一月頃に、電話でとめてくれるよう連絡があったみたいです」

ミキは、麻里の母親からも頼まれて、探しに来たのだといった。

「それなら、京都のお宅に電話してみましょう。お母さんが開けてくれといわれたら開けますから」

管理人は、そういって、壁に貼ってあった番号をみ

ながら、ダイヤルをまわした。
ミキは、黙って来てしまったので、母親に言われるのはまずいと思ったが、それより外に方法がないので、仕方がなかった。
管理人は、電話口で、
「……ああ、そうですか、開けていいんですね、……はい、はい、……わかりました。ちょっと待って下さい」
といって、ミキに代った。
ミキは、思い立って急に来てしまったといい、念のため、中を見てみるとことわった。電話のあと、管理人は、ドアをあけてくれた。
和室の六畳二つとダイニングのきれいな部屋だった。本箱や、机、ぬいぐるみ、ベッドなど、そのままおいてある。
机の引出しをあけて、手紙がないか調べたが、ほとんどない。日記のようなものもなかった。
アルバムが一冊あったので、ひらいてみた。楽しそうな大学生活の写真が、たくさん貼ってある。
〈男性と二人で写した写真はないかしら?〉
と探したが、一枚もない。
「あらっ、おかしいわ」
アルバムの中で、三カ所はがされたところがあった。
〈ここに、都合の悪い人物の写真があったのだろうか?〉
管理人は、
「この前、お母さんが来られたときも、そこに何がはってあったのだろうかと気にしておられました。夏川さんには、恋人が出来たんですか?」
と、きいた。
「えっ、どうして? お母さんが、そんなこといわれたんですか?」
ミキがきいた。
「いや、誰か男の人が出入りしていなかったかと、熱心にきかれるので、そう思ったのです。夏ぐらいまでは、男の人は、部屋に来ませんでしたけどね」

「でも、お母さんは、男性の衣類とか、靴が部屋にあったというてはりましたわ。男の人が、一緒に住んでたんでしょう？」
「さあ、わかりませんね。ここは、一階ですから、ベランダの方から入ったら人に見られないし、夜だったら、私もいませんからね」
いくら調べてみても、手がかりになるようなものはなかった。
もちろん、男性の衣類も靴もない。
ミキは、大学の名簿とアルバムを借りて、部屋を出た。

6

ミキは、その足で、麻里の友人を訪ねた。アルバムにも一緒に写っていた矢野晴子という女性である。
手紙も、二通ほどあったし、比較的親しいと思われたからである。
矢野晴子は、文京区音羽のマンションに、両親と一緒に住んでいた。
ミキが、名前をいうと、すぐに、晴子は、
「ああ、名前、麻里ちゃんからきいてました。高校時代、仲が良かったんですってね」
といった。
二人は、すぐに、意気投合した。
晴子も、麻里のことは、心配していたのだという。
「だって、秋から、全然、大学に出て来ないのですもの。マンションに電話してもいないし、一体どうしたのかと思って」
ミキは、麻里の母親も心配していることを話し、恋人がいるのだったら、名前を教えて欲しいといった。
「それが、私もわからないの。ボーイフレンドは、たくさんいたけど、特定の人はいなかったみたいだし」
「では、学校方面ではなく、大学外の人で心当りありません？」
ミキは一生懸命だった。

「麻里は、外国旅行するために、アルバイトしてたから、その関係かしら？　家庭教師もしてたわ」
晴子と話していると、彼女の母親がコーヒーとケーキを出してくれた。
ミキは、こんなやさしい友人がいるのに、どうして麻里は、何の連絡もしないのだろうかと不思議に思った。
「麻里ちゃんからは、体を悪くしたから、京都に帰って静養するという手紙が来ただけなの。それで、京都に電話しても、お母さんらしい人が、とりついでくれないし……」
晴子は、心配そうにいった。
「京都には帰っていません。多分、東京で、あまり私たちには言うことの出来ない男性と生活しているのだと思うわ」
「言うことが出来ないというと、どんな人？」
晴子は、見当がつかないというようにいった。
「たとえば、妻子のある男性です」
「あ、そうか、不倫の関係ね。でも、私たちに会わないのはおかしいと思うわ。あなたの方は、京都だから、遠いとしても、私は都内だし、電話ぐらいかけて来てもいいのにね。……まさか麻里ちゃん、死んだんじゃないでしょうね？」
晴子は、急に、そういって、恐ろしそうな顔をした。
「えっ、麻里が死んでる？　……そうかも知れないわ。だって、お正月まではとにかく、今だったら、大学にも出られるし、友だちにだって会ってもいいのに……」
ミキは、思わずいってしまった。
妊娠して、大きなお腹をしていたら、人前には出られないけど、子供を生んでしまったあとなら、誰にもわからない筈である。まして、子供は、京都へ引きとられている。
「ねえ、それ、どういうこと？　教えて。私、本当に心配で、警察に届けようかと思っているくらいなの」
晴子が、真剣にいった。ミキと同じ、いやそれ以上

に、麻里のことを思っているのがよくわかったので、ミキは、自分の勝手な推理だけどと断って、彼女は、不倫の子を生んだのではないかと、自分の考えたことを話した。

「そんなー、そんなことあるかしら？」

晴子は、さすが驚いた様子だったが、それなら、話はわかるといった。

「そんなことがあったのだとしたら、ショックで、学校へ行きたくない気持も、彼女が、私たちに会いたくないのもわかるわ。でも、どうして、親にも、居所を言わないのかしら？」

晴子は、ため息をついた。そして、

「でも、変だわ。季節だって変るのに、洋服もとりに来ないのでしょう？　その相手の男って悪い人ね」

と、憤慨した。ミキは、じっと考えていたが、

「私、今、話をしていて、ふと思いついたの。相手の人は、妻子がある人だとばかり思ってたけど、ひょっとして、同じ学生なんじゃないかしら？　親がかりの学生だったら、結婚が許されないかもしれないわ。それで、その人が、大学を卒業して、就職するまで、秘密にしているのでは。あなたに会えば、どうしても、喋らずにはいられないことを知って、相手の学生が、とめているのかもしれないわ」

と、いった。

晴子も、大きくうなずいた。

「麻里は、どこかで働いているのかもしれないわ。そして、相手と二人で、マンションでも借りて住んでいるんだわ」

「相手の人、見当つきませんか？　何人かボーイフレンドがいるといわれたけど、一人一人尾けてみたら、麻里の居所、わかるんじゃないでしょうか？」

ミキは、アルバムに写っている男子学生の顔を一人一人みた。

「そうだわ、じゃあ、名前、三人いうから、控えてくれる？　麻里ちゃんが、仲のよかった人たちよ」

晴子が、いった。

第三章　容疑者たち

1

「まず、大瀬教授」
晴子は、ゆっくりと言った。
「えっ、教授ですか？」
ミキは、びっくりして晴子の顔を見た。
「そうよ。麻里があこがれていた教授なの。研究室に押しかけて行ったり、家にも遊びに行ったりしてたから、もしかってことがあるわ」
ミキは、うなずいた。
麻里の手紙には、教授がすてきだと書いて来たことがあるからだった。
「それから、同じ学部の野田一郎くん。麻里は、彼と仲がよくて、よく映画に行ったりしてたから、彼が麻里といるか、何かを知っている可能性があるわ」
晴子が、考えながらいった。
「野田一郎くん……ね」
ミキは、手帳に書いた。
「それから、家庭教師に行っていた先で、何かおこったのかもしれないわ」
「それは、何という家ですか？」
「えーと、家は京王線笹塚近くだときいたけど、新宿のビルにある山川不動産の社長の山川という人の家よ」
「山川不動産ね。電話帳で調べてみます。それ以外に

は？」

「さあ、麻里は、とってもモテてたから、ボーイフレンドは一杯いたわ。でも、彼女が好意を持っていたのは、その三人ぐらいじゃないかしら？」

晴子は、本当に、麻里のことを心配しているようだった。

「ところで、大瀬教授というのは、お宅はどちらでしょうか？　訪ねてみたいのですけど」

ミキは、今きいたうちでは、大瀬教授が一番あやしいと思った。

大学生同士なら、不倫の関係ということもなく、人に、それほど秘密にしなければならないとも思えない。その点、麻里の行っている大学の教授と、恋愛関係になったら大変だ。

教授が、教え子と不倫の関係になり、子供まで生ませたとしたら、大問題になる。

いくら、子供は引きとられたとしても、教授が、その秘密を守るために、必死になるのは当然だった。

〈まず、この教授から調べよう〉

ミキは、考えた。

晴子も、ミキと同意見だった。

「でも、困るのは、教授が関係なかった場合だわ。その場合、麻里のことが、大学側に知られてしまうわ。どうする？」

「本当ね。麻里が、男性と恋愛関係になって、行方がわからないといったら、警察に届けるようにいわれるだろうし、大学も退学処分になってしまうかもしれないわ」

でも、何も言わないでは、教授から探り出すことは出来ないし、ミキが、大瀬教授に会う口実もない。

二人は、しばらく考え込んだ。

「教授を尾けてみたらどうかしら？　あなただったら、教授も顔を知らないし、一週間も尾ければ、きっと、どこに秘密のマンションがあるかわかると思うわ。もちろん、教授が麻里の恋人だとしたらの話だけど」

晴子が、言った。

「でも、私、一週間も東京にいられないの。親も心配するし、試験のなかった科目のレポートも書かないといけないから。それに……」

ホテルに泊ったら費用もいるからといおうとすると、晴子は、それを察したように、

「うちに泊ったらいいわ、何日でも。私も麻里のことは心配なのだから何かしたいのよ」

といった。ミキは感激した。

「有難う。今度来たときは、是非おねがいします。……それで、今日、出来れば、教授に会わして貰えないかしら？　顔も知らないでは、尾けることも出来ないし、会ってみると、色々とわかることもあるんじゃないかと思うんです」

ミキは、晴子に気をつかいながら、一生懸命にいった。晴子は、うなずいてきいていたが、

「そうね。じゃあ、これから教授の家へ行きましょうか？　麻里は、病気で京都に帰っているということにしましょう」

と、いった。

2

教授の家は、成城にあり、門がまえの大きな屋敷だった。

門についたベルを鳴らすと、インターホンで女の声がし、晴子が名前をいうと、やがて、門が自動的に開いた。

そして、敷石を伝って、四十歳くらいの女の人が出て来た。

「夫人よ」

晴子が、ささやいた。

「いらっしゃい。さあ、どうぞ」

夫人は、にこやかに、二人を、家に案内した。玄関には、ギリシャ神話に出てくるような大理石のトルソーが置かれ、バラの花もいけられている。

「どうぞ、応接間の方に」

玄関からすぐの洋室に通され、二人は、しばらく待った。

二十畳くらいの広さに、暖炉があり、白いピアノもおかれている。

「随分豪華な暮しだわ。私の行っている大学の教授で、こんな大きな家にいる人はいないわ」

まわりをきょろきょろみまわしながら、ミキが驚いたようにいうと、晴子は、笑いながら、小声で、

「教授はムコ養子で、奥さんのお父さんが、金持らしいの。だから、教授は、奥さんに頭が上らないのよ」

と、いった。

そこへ、足音がして、教授が入ってきた。

ミキは、緊張して、背すじをのばして、ドアの方をみた。

教授は、五十歳くらいの端整な顔立ちの男だった。

〈フランスの映画俳優に、よく似た感じの人がいるわ〉

ミキは、心の中で呟いた。知的なふんいきがあって、麻里が夢中になるのもわかるような気がした。

「やあ、どうも」

「先生、突然お邪魔してすみません」

晴子は、頭をさげた。

「今日は、久しぶりに家にいたから、よかった。まあ、楽にしなさい」

教授は、ミキたちとむき合って座ると、

「ところで、夏川麻里くんは、どうしている？　元気になったかな」

と、きいてきた。

「はい、そのことなんですけど、彼女は軀を悪くして京都に帰っていたんですけど、急にいなくなってしまったんです。それで、東京に帰ったのだと思って、お友だちのこのミキさんが探しに来たのですけど、東京のマンションには帰ってないんです。それで、心配して、先生にご相談に来たんです」

晴子は、そういうと、ミキの手をぎゅっと握りしめた。

〈このくらいいわないと仕方がないわ、いいでしょう？〉

という意味である、ミキも、手を握りかえした。

「ほう、それは、心配だね。本当に東京に来てるのかな？」

教授は眼鏡の奥から、心配そうな眼をむけていった。

「麻里は、東京に恋人がいるんじゃないかって、麻里のママがいってました。それで、東京に帰ったんじゃないかって」

ミキがいった。

「恋人ねえ……。それは誰なんだ？　うちの大学の学生なの？」

教授は、晴子にきいた。

「それがわからないのです。ただ、彼女は、教授にあこがれていたから、先生が、恋人なんじゃないかって、このミキさんがいうものですから、連れて来たんです」

晴子は、わざと冗談ぽくいった。

「僕？　まさか。僕には妻もいるし、第一、年が親子ほども違うよ。そんなうわさが立つと困るね」

教授も、笑いながらいったが、顔はひきつっていた。それが、痛いところをつかれたためなのか、本当に知らなくて、怒っているのかは、若い二人にはわからなかった。

そのとき、ドアのところでコトンと音がして、夫人が、コーヒーを運んで来た。

〈夫人は、たちぎきしていたのではないだろうか……〉

ミキは、ふとそう思った。

「それで、警察には届けたの？」

コーヒーを一口飲むと、教授がいった。

「いいえ。届けてません。麻里のママも、気ばらしに旅行に行ったのかもしれないし、誰か恋人と一緒だったら、さわぎたてたくないといわれるので」

ミキは、無邪気そうにいった。

「そうだね、警察にとどけて何もなかったら、嫁入り

前の娘に傷がつくからね。……でも心配だね。どこに行っているのかな」

教授は、二人の顔を交互にみながらいった。

「あなた、麻里さんというのは、うちに、二、三度見えられた娘さんですよね？」

夫人が、教授にむかって、突然いった。

「ああ、そうだ。美しくて明るいいい学生だが」

教授は、そういって、コーヒーをまた一口飲んだ。

晴子とミキは、そのあと三十分ほど、教授と雑談して屋敷を後にした。

3

外へ出ると、すぐに晴子がミキにきいた。

「どうだった？　教授をあやしいと思った？」

「さあ、どうかしら？　でも、もし、麻里が、教授を好きになったとしたら、わかる気がするわ。素敵な中年ですもの。そして、そういうことになったら、教授が必死でそのことを隠そうとするだろうということは、見当がつきますわ。夫人と別れて、あの生活を捨てることは出来ないと思うから……」

ミキは、今会ってきたばかりの教授の顔を思い浮かべながらいった。

外は、もう、夕ぐれがせまっていた。

「お食事でもしましょうか？」

晴子が時計をみながらいった。

「ええ。私、今日は、最終で帰るつもりだったけど、一泊することにします。そして、食事のあと、出来れば、彼女が家庭教師をしていた家の人に会ってみたいんですけど」

ミキは、晴子に悪いと思いながらたのんだ。

「いいわ。でも、何といって訪ねるの？　ここで家庭教師をしていた麻里を知りませんか、とはいえないでしょう？」

晴子は、考えながらいった。

「そうね。じゃあ、それは、なんといって会うか、一

晩考えることにして、ボーイフレンドの野田一郎くんには、会えないかしら？」
「さあ、彼、いるかな？　ちょっと待って。電話して、いたら、呼び出すことにするわ」
晴子は、うなずき、公衆電話をさがした。
幸い、彼は、家にいた。
「ねえ、野田くん、食事でもしない？　出て来てよ」
晴子は、事情を話さず、デートのようにいって、彼をカフェバーまで呼び出した。
すぐに、彼は、待ち合わせの場所にやって来た。彼は、にこにこしながら、入って来たが、晴子と一緒にミキがいるのを見て、ちょっと驚いたような顔をした。
「紹介しまーす。この人ミキさん、こちらは野田くん」
晴子は、ミキが、どこの大学へ行っていて、晴子とどういう関係なのか、一切いわずに紹介した。
「あ、そう。僕、野田です。今日は、一体どうしたの？」
野田は、晴子と二人で食事するつもりだったらしく、がっかりしたようだった。
「いいじゃないの、なんでも。それより、何か食べながら話しましょう」
晴子は、さっさとメニューを見て、クレープや、おつまみを注文した。
野田も、仕方なく、椅子に座り、ピラフを注文した。
やっと、落着くと、晴子は、麻里がいなくなったので探していると話した。
「えっ、麻里がいなくなった？　やっぱりね」
「やっぱりって、どうして？」
晴子がきく。
「だって、いくら電話しても通じないし、大学も休学してしまっただろう？　一体、どうなったんだろうって、みんなと話してたんだ。京都の家にも電話したんだよ」
野田は、ちょっと憤慨したようにいった。
「仲が良かった野田くんも知らないのォ。私、きっと、

麻里は、野田くんと同棲してるんだと思ったわ。それで、そのことが知れたら、引きはなされると思って隠してるんだって」

晴子の言葉に、野田は大きく首をふった。

「冗談じゃないよ。そんなことになったら大よろこびで、みんなにふれまわっちゃうよ。どうして隠すの」

「二人はよくっても、お互いの両親が反対するんじゃない？　まだ若いって。だから内緒にしとこうと……」

晴子がいうと、野田は、

「そんな場合でも、友だちにはいうし、第一、大学を休んだりしないよ。それにうちの親は、麻里だったら反対しないよ」

「私だったら？」

晴子が笑いながらいう。

「反対するかもしれないね」

「失礼しちゃうわ。……でも、本当に、麻里の居所知らないのね？」

「知らないよ。それに、僕のアパートには、友だちがしょっちゅう来るんだよ、マージャンしに来たり。麻里がかくれていたら一ぺんにわかるよ」

「そうね。でも、別のアパートかマンション借りてたらわからないわよ」

「そんな金ないよ。今のアパートの家賃払うので精一杯だよ」

そういうと、野田は、丁度ウエイトレスが持って来たピラフの皿を手前に引き寄せた。

「じゃ、誰か、他に、麻里と恋愛して、彼女を隠している様な人知らない？」

晴子が、野田にきいた。

「僕の友だちだったら、そんなことすぐわかるし、隠したりしないと思うけどね。あ、そうだ。大瀬教授があやしいよ。麻里は、教授にあこがれていたから」

野田も、考えることは同じだった。

晴子は、教授のところには行って来たが、何もわからなかったといった。

「そう。でも、いくら考えてもおかしいな。僕たちが麻里の姿みたのは、あれはいつだったかなあ、夏頃だったよ。彼女は、どこへ行ってるのかなあ」
野田は、ピラフを食べる手をとめて、考え込んだ。

4

ミキは、野田一郎と話していて、
〈この人は、麻里を隠したりしていない〉
と、心の中で思った。
野田は、若者らしくあっさりしていたし、本音で喋り、隠しごとをするような性格には見えなかったのである。
そこで、野田にきいてみた。
「麻里は、家庭教師に行っていたそうですけど、その家のことを話してませんでしたか？」
「ああ、山川不動産の社長の家でしょう？　あの家には、子供が二人いて、上は、大学を出て、テレビ局のアナウンサーをしていて、妹が高校三年生で、その子の家庭教師をしているってきました。勉強は夜六時からで、食事を出してくれるって、喜んでましたね」
「その兄さんが、素敵だといっていたこともあるわ」
ミキがいった。
「そうなんだよなあ、僕にもいっていたことがありますよ。野田くんも、テレビ局に勤めたらいいのにって」
野田は、苦笑しながらいった。
「その山川家の主人って、どんな人だったのかしら？」
ミキが、なにげなくいうと、野田は、急に、不愉快そうな顔になった。
「社長のことは、エッチな中年だっていってたなあ。めったに家にいないけど、家にいるときは、勉強が終ったあと、上等のブランデーの貰いものがあるから飲んでいきなさいといって引きとめたり、いつか街の中で会ったときには、強引に銀座のクラブへ誘ったって。

そんなとこ危険だからやめた方がいいって言ったんだけど、週二回で月謝を七万円もくれるところないし、女の子がなついているからってやめなかったけど」

「七万円も月謝貰ってたの？　それだったら私だってやめないわ。普通、一カ月四万か五万までよ。三万五千円のところだってあるわ。それから考えたら、倍だもの」

晴子が、驚いたようにいった。

「まさか、その社長に何かされたんじゃないでしょうね？　それで子供が出来てしまったので仕方なく恋人になっているというような……。その社長さんだったら、お金持だし、別にマンションを買うなり、借りるなり出来ると思うわ」

ミキは、不安そうにいった。

晴子は、

「麻里ちゃんが、そんなことするなんて思えないけど。どうかしら野田くん」

と、野田にきいた。野田は、腕を組んで考えていたが、

「女ってわからないからなあ。女子大生で、お金のために、デートガールや、マントルに行っている人もいるからねえ。でも、彼女だけは、そんなことしないと思ってたんだけど……」

と、いった。

ミキもうなずいた。あの上品で、潔癖な麻里が、結婚しないで赤ん坊を生んだらしいと思うようになったときから、麻里のことがわからなくなっていた。

「明日、その山川さんの家を訪ねてみますわ。日曜日だし、家族みんながいるかも知れないから。晴子さん、一緒に行ってくれませんか？」

ミキがいうと、

「いいわ、私もだんだん心配になってきたから、一緒に行くわ」

と、晴子は、力強くいった。

「結果がわかったら知らせてくれる？　僕も行ってもいいけど、男だからむこうが警戒すると思うんだよ

ね」

野田がいった。

「そうよ。あまり何人もで行くより、麻里の友だちということで女二人が行った方がいいと思うわ」

晴子がいった。

「すぐに何かわかるとは思わないけど、とにかく行った結果は、晴子さんから知らせて貰いますわ」

ミキが、野田に約束した。

5

その夜は、晴子のすすめで、彼女の家に泊めて貰った。

二人は昔からの友だちのように、夜遅くまで、喋り合った。

ミキは、麻里の高校時代のことや、彼女の家庭のことなどを話し、晴子は、麻里の東京での生活を話してくれたので、お互いに、麻里についての知らない部分がわかってきた。

そして、すべてを総合してみても、やっぱり、麻里が、これだけ姿を見せないのはおかしいという結論になった。

「麻里ちゃんが、どんなに恋に狂っていたとしても、私に電話もかけて来ないというのは考えられないわ。だって、何でも話していたんですもの」

晴子が、パジャマ姿でねそべりながら、首をかしげた。それは、ミキも同じだった。

「私だって、麻里とは東京と京都と離れていても、半年も話をしなかったってことはないわ。来るのは、ワープロの手紙だけで……」

そこまでいって、ミキは、じっと晴子を見た。晴子も、同じことを考えたようだった。

「ワープロで打ったら、麻里ちゃんでなくても、手紙はかけるわ。ひょっとしたら、彼女、もう死んでいて、犯人が、ワープロで、手紙を打ち、生きているように見せかけたんじゃないかしら？」

晴子が蒼ざめた顔で座り直した。
「そうね。考えられることだわ。じゃ、麻里は、いつ死んだの？」
「赤ん坊を生んで、彼女のお母さんが連れて帰ったあとじゃない？　その時点で、彼女のお母さんは、相手の男が誰か知らなかったのでしょう？　でも、そのうちに、麻里ちゃんが白状するかもしれない。すると、彼女の両親は黙っていないでしょうし、男の家族や勤め先に知れてしまうかもしれない。そう思って、相手の男が、麻里ちゃんを消してしまったんじゃないかしら？　アメリカへ行くなんて、おかしいと思わない？」
晴子は、熱っぽくいった。
「私も、アメリカへ行くという手紙を受けとった時には、変だと思ったの。彼女だって、自分の生んだ赤ん坊は可愛い筈だし、アメリカに行く前に、必ず見に来ると思うの。
それに、休学したんだから、アメリカへ一人で行くくらいなら、京都へ帰って来て、自分の子供と一緒に暮してもいいわけよね。やっぱり、彼女は、殺されてしまったのかしら？」
ミキは、信じたくないという顔をした。
「相手の男は、絶対、妻子持ちね？　でないと、彼女を殺しまでしないと思うわ。最初は、軽い浮気のつもりだったけど、麻里ちゃんがのめり込んで来て、子供まで生んだので、男の方は、重荷になって来たのね。幸い赤ん坊は、親が引きとっていったし、麻里も、今のところは、男との約束を守って、名前を言わないでいるけど、子供が大きくなって来ると、問題が出てくる。麻里も、奥さんと離婚して自分と結婚してといってたのかもしれないわね。それで困り果てた男が、麻里を殺し、海にでも沈めるか、土の中に埋めてしまったんじゃないかしら？　そうすれば、秘密は永久に保てるし、妻子にも、世間にも知られないですむ……きっと、そういうことなんだと思うわ。ミキさん、警察に届けましょうか？」

晴子は、思いつめたようにいった。
「ええ。私も、その方がいいと思うけど、麻里のご両親が秘密にしていて絶対届けないのに、こっちが、勝手に届けることは出来ないと思うわ。警察が調べたら、当然、麻里が赤ん坊を生んだことがわかってしまうでしょう？　麻里は、生きている可能性もあるし、今のところは、私たちで調べるしかないと思うの」
ミキが、考えながらいうと、晴子もうなずいた。
「そうね、それが正解ね。でも、麻里ちゃんと関係のあった男って許せないわ。一体誰なのかしら？」
「不倫の関係だとしたら、大瀬教授か、山川不動産社長の二人のうちどちらかだと思うわ。それ以外にいるかしら？」
「私たちだって、麻里ちゃんの生活をみんな知っていたわけじゃないから、今のところは、その二人しかわからないわ」
晴子は、そういうと、また、ベッドにもぐり込んだ。

6

翌朝、十時に家を出て、二人は、山川家に向った。
山川邸は、赤いレンガの三階建てで、広い庭には、外車が三台とまっていた。
「随分、金持の家なのね？　成金という感じがしないでもないけど」
ミキは、晴子にささやいた。
鉄の大きな門にとりつけられたチャイムを押した途端に、ブルドッグがものすごい勢いで走って来て、吠えはじめた。
「きゃっ！　怖い」
ミキは、晴子にしがみついた。
晴子も恐ろしそうに、後ずさりした。
そのとき、遠くから、犬を呼ぶ声がして、若い男が、門のところにやって来た。彼は鎖で、犬をつなぐと、
「どなたでしょうか？」

と、こちらをむいた。
タレントのようなスマートな男で、高い鼻をしている。
「あの……、ここに家庭教師に来ていた麻里の友だちですが……」
晴子が、まだ、犬の方をみながらいうと、男は、
「ああ、夏川麻里さんのお友だちですか。どうぞ」
と、門のかんぬきをあけてくれた。
男は、二人が入ると、門をしめてから、先に立って、敷石を歩き出した。犬も、おとなしく、尾いていく。
玄関に着くと、ドアをあけ、ミキたちを中に入れてから、男は、犬を庭につなぎに行った。
「あの人がきっとテレビ局に勤めている息子さんよ」
晴子がささやいた。
「そうね、彼なら麻里が夢中になったとしても納得できるわ」
ミキも、ささやいた。
そのとき、突然、玄関に、五十歳くらいの婦人があらわれた。この家の主婦らしい。
「いらっしゃい。私が、鮎子の母ですが、何かご用でしょうか？」
「はい。あの……」
こういう風に改まってきかれるとは思わなかったので、ミキは、晴子と顔を見合わせた。
「夏川麻里さんは、去年の夏までで、うちをおやめになりました。突然のことなので、びっくりしましたが、仕方なく、別の方に来て頂いています。ですから、もし、家庭教師のことでしたら、残念ながら、今は、結構です」
夫人は、二人が、麻里の代りに家庭教師を志願して来たと思ったらしい。
「いえ、違うのです。私たち、麻里を探しに来たのです。麻里は、今年のお正月からあと、行方不明になってしまったのです」
ミキは、一生懸命いった。山川家には、或る程度本当のことをいってもいいだろうと考えた。

「行方不明？　どういうことですか？」
冷たい感じだった夫人が、急に、興味を持ったようにきいた。
「よくわからないのですが、麻里は、誰かと不倫の恋をして、そのことを、ご両親に言えなくて、家出してしまったらしいのです。それで、麻里ちゃんが、つき合っていた人たちをたずね歩いているのです」
晴子がいった。ミキは、随分思いきったことを言うと思って、びっくりした。
それをきくと夫人の顔色が変った。
「不倫の恋というと、うちの主人と何かあったというんですか？」
「いいえ。そういう事ではないのですけど、麻里ちゃんは、街でお宅のご主人に会ってクラブに誘われたということもいってましたから、もしかと思って……」
晴子の言葉が終らないうちに、夫人は、立って奥へひっこみ、やがて、五十すぎの男を連れて来た。
「あなた、麻里さんをクラブに飲みに連れて行ったりしたんですか？　お友だちの方が、麻里さんと不倫の関係にあるのではないかとおっしゃってるんですよ」
夫人は、夫に詰問するようにいった。
「なにを馬鹿なことをいってるんだ。不倫の関係？　冗談じゃないよ。今の大学生は怖いね。子供が世話になっているからと思って、愛想よくしたら、すぐ、そういういいがかりをつけるんだから」
山川は、困惑したようにいった。
「クラブに連れて行ったって本当ですか？」
夫人が重ねてきいた。
〈ヒステリックな女性だわ〉
ミキは、心の中で呟いた。
「街で会ったから、一度だけ、一緒に行ったことがあるけど、それだけだよ。それが、どうかしたのかね」
山川は、ミキたちの方にむいていった。
「彼女が、いなくなってしまったんです」
ミキは、思い切って、麻里は、不倫の恋をして妊娠したらしく、悩んだ末、いなくなったのだと、赤ん坊

のことを仄めかした。
「妊娠？」
さすがに、山川の顔がひきつった。
「いいがかりをつけるな！　あの子とは何でもない。……そんな子だとは知らなかった」
「本当にあなた、麻里さんとは、何でもないんですね？」
「もちろんだ」
「主人がそういってますから、お帰り下さい。うちとは、一切関係ございません」
夫人は、そういうと、玄関のドアをあけた。
「すみませんでした。私たちは、ただ、麻里を探しているだけなんです。もし、なにかで、麻里ちゃんから連絡があったら、知らせて下さい」
ミキは、そういうと、あらかじめ用意しておいた自分の電話番号を書いた紙を、下駄箱の上において外へ出た。
しばらく歩いてから、二人は、うしろを振り返ったが、山川家は、門がしっかりしまったままだった。
「ねえ、どう思う？」
ミキが、きいた。
「そうね。もし、あのご主人が、麻里と深い仲になったとしたら、大さわぎになると思うわ。彼なら、麻里を殺すかもしれないわ」
晴子は、大瀬教授より、山川の方を疑っているようだった。

第四章　謎のキーホルダー

1

ミキは、京都に帰って来た。

結局、誰が麻里を隠しているのかということはわからなかったが、収穫はたくさんあった。

妻子のいる大瀬教授や、山川不動産社長にも会えたし、晴子や、野田一郎のようないい友だちも出来た。

「あとは、大瀬教授や、山川社長が、どう動くか待ってみるわ。もし、二人のうちのどちらかが、麻里ちゃんを隠しているのなら、自分が疑われないように、麻里が出て来て、私たちに何か言うか、電話があるんじゃないかしら？」

と、晴子も別れ際にいっていた。

ミキは、ボーイフレンドの譲二に、東京へ行った結果を報告しようと、電話をかけた。

彼は期末テストの最中だといっていたが、明日の午後なら会えるといったので、場所を打ち合わせて電話を切った。

〈野田くんも素敵だけど、やっぱり、ジョージの方がハンサムだし、好きだわ。晴子さんは、野田くんが好きなのかしら？〉

などと考えていると、電話が鳴った。

夕方まで間があるので、家の中には誰もいない。ミキは、受話器をとった。

「もしもし。あ、帰ってたんですか？　私、麻里の母

です。今から、そちらへお話を伺いに行っていいかしら？」

それは、陽子だった。

「ええ、でも、もうすぐ、母たちが帰って来ますから、明日にしていただけませんか？　東京へは行って来ましたけど、何もわからなかったんです。明日の午後にジョージ……くんとも会って、その話をすることになっているので、その時にして下さい。今帰って来たばかりで疲れているんです」

ミキは、そういって、明日、彼と会う待ち合わせの場所をいった。

陽子は、それでも、一刻も早く話をききたいような様子だったが、ミキが応じなかったので、仕方なく電話を切った。

ミキは、陽子があまり好きではなかった。

もともと、自分の母親も含めて、中年の女というのが嫌いだった。

〈中年の女って、羞恥心がなくて、おしゃべりで、うるさくて、自分勝手で嫌い。その上、自分のことは棚にあげて、若いものにお説教なんかするんだから〉

といつも思っていた。

しかし、陽子の場合はちょっと違う意味で嫌いだった。

彼女は、普通のおばさんみたいに太ってもいず、美人で、オシャレで、女として魅力があったし、麻里とも姉妹のように仲がよかった。出しゃばることもないし、お説教するということもきいたことがなかった。

ただ、麻里のことで、自分が知っていることを、ひたかくしにして、ミキには、全面協力を求めてくるところが、いやだった。

〈子供を引きとることだって、麻里からたのんだことではないに違いないわ。麻里は、自分の子供だし、愛する人の子なのだから、大学をやめても、自分の手もとで育てたかったのじゃないかしら？　子供の顔をみていれば、相手の男も、情が移って、彼女と会い続けたかもしれないのに、陽子さんが、強引に、自分の子

供として籍に入れ、引きとって行ってしまったので、麻里は、ショックを受けてしまった。相手の男も、邪魔ものがなくなったことで、ほっとして、彼女から遠ざかってしまった。それで、心に穴のあいてしまった麻里はなにもかもイヤになって、人ぎらいになったのかも知れない〉

ミキは、じっと考え込んだ。

2

翌日の午後二時、ミキは、喫茶店で、陽子と譲二を前に、東京で麻里について調べた結果を報告していた。

話し終ると陽子が、

「本当に有難うございました。私では、とてもそこまで調べることが出来なかったのに、色々な方にきいていただいて」

と、いい、涙を拭いた。そして、

「本当に、麻里はどうしているのかしら？　電話でもいいからかけてくれればいいのに」

と、いった。

それを見ているうちに、ミキも、陽子が気の毒になって来た。

彼女は、若いときから麻里を育て、後妻に入ってからも、実の親子以上に仲が良かった。それなのに、麻里は、勝手に子供を生んで姿を消し、陽子は、赤ん坊を自分の籍に入れてまで育てているのだ。

陽子の立場に立ってみると、陽子に同情したくなるし、不思議なものだとミキは思った。

「赤ちゃん、元気ですか？」

ミキがいうと、陽子は、はじめてにっこりして、

「ええ、元気です。とても可愛くなって、一度、あの子に見せたいと思います」

と、いった。

〈やっぱり、麻里の子供なんだわ〉

ミキは、改めて確認した思いだった。

「ところで、麻里は、アメリカへ行くといってました

が、貯金なんかは引き出されているんでしょうか？」
　ミキがたずねると、陽子はうなずいた。
「ええ。問い合わせたところ、ほとんど引き出されています。警察にいえば、海外に出たかどうか確かめることが出来ると思うんですけど、今の段階では、主人も、警察にはいうなといっておりますし……」
「でも、僕は、そろそろ、警察に届ける方がいいと思うんですよね。だって、どう考えてみても、犯罪の匂いがするもの」
　今まで黙っていた譲二が、突然口をはさんだ。
　ミキもびっくりして彼の顔をみつめた。
「犯罪って、例えばどんなことですか？」
　陽子が、きっとした目をあげていった。
「たとえば、麻里くんが誰かに殺されたということは考えられませんか？　だって、これだけ姿を見せないなんておかしいですよ」
　譲二がいうと、ミキも、横からいった。
「いくら手紙が来ても、ワープロじゃあ誰が書いたかわかりませんわ。東京のお友だちだっておかしいっていっています」
「そうですか……。そういわれたらそうですねえ。でも、私は、今日にでも、あの子が帰って来るような気がするんです。そのとき、あまりさわぎ立てていると、あの子が、帰れなくなりそうで心配なんです。とにかく、主人の方針ですので、もう少し、様子を見てみます」
　陽子は、うつむいていった。
「そうですね、そのうち、何かわかるかもしれません。アメリカから手紙がくるかもしれないし……」
　ミキは、そういうと、立ち上った。
「じゃあ、私たち、これからデートして来ますから。ジョージも試験中で忙しいんです」
「すみません。本当に有難う。私は、あの子を信じて一年でも二年でも待ちます。あの子も大人なんですから」
　陽子は、言葉の最後を自分にいいきかせるようにい

った。
ミキは、譲二の車に乗って走り出した。
「ごめんね。過激なことをいって」
譲二が、ミキにあやまった。
「いいえ。よくいってくれたと思うわ。だって本当におかしいんですもの」
二人の車は、いつか桃山まで来ていた。
しばらく黙って窓の外を見ていたミキは、突然、大きな声を立てた。
「ちょっと、ジョージ！　ほら、あそこ、見て」
「何？　どこ」
といった譲二は、急に、ブレーキをかけて停った。
「ほんとだ。麻里くんのお父さんだ」
二人はじっと、マンションをみつめた。
麻里の父親が、車で、やって来て、その車をおいたまま、マンションに入って行ったのだ。
「おかしいわ。だって、麻里のお父さんは、あのとき、四日しか日本にいられないっていってたわ。もうとっくにアフリカに帰ってるはずなのに」
ミキが、今度は、小声でいった。
「陽子さんには、アフリカへ帰ると嘘をいって、愛人と日本で、休暇を過しているのかな？」
譲二も、首をかしげた。
やがて、麻里の父良介は、あの女性と一緒に表に出て来た。
「どこへ行くのかな？」
「食事にでも行くんじゃない？」
「尾ける？」
「ええ」
譲二は、巧みに彼等の車を尾けて行く。
車は、京都駅近くのホテルの駐車場に入った。
車を乗り捨てた二人は、ホテルの中に入って行った。
「部屋をとってるのかな？　それとも、食事でもするのかな」
譲二が、二人を見送りながらいった。
「食事だと思うわ。だって、桃山に彼女の部屋がある

のに、わざわざホテルに泊ったりしないと思うわ」
「それはわからないよ。彼女の部屋だと、同じマンションの人たちのうわさになるから、ホテルでゆっくりするのかもしれないし。……どうする僕たち」
「そうね。これ以上尾けても仕方がないわ。二人が恋愛関係なのは、はっきりしたけど、私たちに関係ないことだから」
ミキが、そういって、さっさと車に乗ると、譲二が珍しく、それをさえぎった。
「折角、ここまで来たんだから、僕たちもレストランで食事して行かない？」
「だってェ、ホテルのレストランなんて高いのよォ」
「大丈夫だよ。今日、アルバイトの金が入ったんだ。これで、ミッキーと食事しようと思ってたんだよ」
「本当？　わっ、うれしい、でも、今日こんな服装だけどいいかしら？」
ミキが困ったようにいうと、譲二が、笑いながら、
「平気、平気、さあ行こう」
と、いった。

3

ホテルには、レストランはいくつもあったが、色々迷った末、二人は、『都』というところへ入った。
ボーイが出て来て、二人を席へ案内する。
白いクロスのかかったテーブルに着いてまわりを見まわすと、ミキは、「あっ」といった。
「あの二人が来てるわ」
「どこ」
二人の視線を感じたのか、良介が、こっちを見て、ぎくっとしたように顔色を変え、横の女を突っついた。
ミキは、すました顔をして立って挨拶に行った。
「おじさん。この間はどうも。まだ、日本にいらしたんですか？　私、もうとっくにアフリカに行かれたものだとばかり思っていましたわ」
「ああ、その筈だったんだけど、急に、会社の都合で

延びたんだよ」
「今さっきまで、陽子おばさんとお話ししてたんです。麻里のことで」
「あ、そう。……あの、折角だから、今日の食事はおじさんがおごってあげるから、何でも食べなさい」
良介は、機嫌をとるようにいった。
「有難うございます。でも、今日は、ジョージがおごってくれることになっているんです」
「ああ、ジョージ君ね」
彼が、譲二の方を見た。譲二がぴょこんと頭をさげた。
ミキは、じっと、良介の傍の女性をみつめた。
「ああ、この人はね、むこうで知り合った人なんだ。仕事関係でね」
良介がいったとき、ボーイが、オードブルを運んで来た。
「では、おじさん。失礼します」
ミキは、自分のテーブルに戻った。
譲二は、良介たちと同じものを注文したので、二つのテーブルは、ほとんど同じ進行状態だった。
わずかに早く、良介の方が終ると、つかつかとミキのテーブルにやって来た。
「ミキくん、ちょっと」
「はあ」
ミキが立っていくと、良介は小声で、
「すまないけど、僕が、まだ、日本にいること、陽子に黙っておいてくれないか。実は、会社の秘密の会議があって、もうアフリカに帰ったことにして、日本で密かに、毎日、対策を練っているんだ。これがわかると困るから、頼む」
といって、封筒を出した。
「これで、今晩二人で楽しく過しなさい。では」
といって、足早に立ち去ってしまった。
「何かしら？　これ」
あけてみると、十万円入っていた。
「口止め料だわ。どうしよう」

ミキは、入口を見たが、もう良介たちの姿はなかった。
「やっぱり愛人なんだね、あの人」
譲二が苦笑した。
「大人って嫌いだわ、何でも、お金で解決できると思って」
「じゃあ、それ、返して来たら」
「いいわ、貰っとくわ。どうせ、こんなお金貰わなくても、陽子さんにはいわないけど」
ミキは、何となく、沈んだ声でいった。
彼女は、デザートを食べたあと、譲二に送って貰って家まで帰って来た。
「今度、このお金で、どこかへ遊びに行かない。変なお金だから、ぱっと使ってしまいたいの」
「オーケー、試験が終ったらね」
家に入ると、丁度、これから夕食がはじまるところだった。
「どこへ行ってたの？」
「麻里さんのお母さんと喫茶店で話をして、そのあと、友だちのところ」
「食事は？」
「食べて来たからいらない」
ミキが、自分の部屋に入ったとき、電話が鳴った。
出てみると、東京の晴子だった。
「あ、この間は、色々有難う」
と、ミキがいうのをおさえて、晴子は、
「昨日、大発見したのよ」
と、いった。

4

「大発見って何？」
ミキは、眼を輝かせていった。
「あのね、昨日の夜、野田くんとディスコに行ったの。そしたら、山川不動産の息子が来ていたのよ」
なんだそんなことかと思いながら、

「あのテレビ局に勤めているっていう恰好いい男でしょう？　彼がどうかしたの。まさか麻里と来てたんじゃないでしょう？」
と、いった。
「女の子と来てたけど、名前を知らない人だったわ。でも、彼がテーブルにおいたキーホルダーを見てびっくりしたの。麻里のお父さんが、エジプトで買って来たといって私にくれたのと同じキーホルダーだったから」
「えっ、あのエジプト女王の顔のキーホルダー？」
ミキは、びっくりしてしまった。それは三つしかなくて、麻里がその一つをくれて、今でも使っているものだったからである。
「そうよ、三つしかなくて、一つを高校時代の親友にあげたといってたわ。多分、あなたのことだと思うけど。あとの一つを私にくれたの。そして、彼女自身が一つ愛用していたはずなの」
「同じものを、アフリカで買って来たということはないと思うわ。彼女の話では、手作りで、お父さんが、もっと買いたいといったけど、作る人が死んでしまったので、三つしかなかったといってたから」
「おかしいと思わない？　そんな大切なものを、彼女があの人にあげたとしたら、彼女は、あの人と恋愛関係にあったとしか思えないわ」
「麻里のには、確か、夏川麻里のイニシャルのM・Nが彫ってあった筈だけど」
ミキは、思い出しながらいった。
「そうだわ、今度、何とかあの人に会ってたしかめてみるわ。でも、あの人は、独身だから、麻里との仲をそんなに秘密にすることはないのにね」
晴子は、わからないというようにいった。
その夜、ミキが、眠っていると、電話が鳴った。出てみると、何もいわない。それが、二度続いた。
「いい加減にしてよ。こんなに遅く。迷惑だわ」
といってミキは受話器を叩きつけるように切った。
電話は、ダイニングルームと親子電話になっていて、

ベルが鳴ると、両親も起きてしまうからである。
三度目に鳴った時には、本当に腹が立った。
「あなた一体誰なの？」
すると、
「私よ、麻里。元気にしてるけど、帰れないの、ごめんなさい」
と、麻里の声がして、電話は切れた。
ミキは、一ぺんに眼がさめてしまった。電話の背景で電車の通るような音がきこえた。
〈どうして帰れないのか、何も喋らずに切ってしまうなんて〉
麻里の声は、暗くもなく、せっぱつまってるようでもなかった。どっちかというと、いつもの甘ったれた調子だった。
朝になるのを待ち兼ねて、ミキは、晴子に電話で、このことを知らせた。
「本当に、麻里の声だった？」
晴子は、信じられないようにいった。
「本当よ。でも、不思議なのは、彼女、いつも、最初に、ミッキー？　ときくの。そして、私よ、麻里。というのに、ミッキーといわなかったわ。どうしたのかしら？」
「彼女、誘拐されていて、暗号で喋ったんじゃない？　誘拐がはやっていたとき、彼女とそんな遊びをしたことがあるわ。『もしもし』と何度もいったら、世田谷区にいるという意味だとか、あの……といったら、これからあとの言葉は、みんな反対だとか」
「そうね、高校の時も、同じようなことした覚えがあるわ。でも、それは、横に犯人がいて、電話をかけさせている場合でしょう？　昨夜の電話は、内緒でかけて来たような気がするのよ。そんなときは、暗号でいうより、直接事情をいった方が早いと思うわ」
「そうね。とにかく、あのキーホルダーについて調べてみるわ」

5

ミキはその日、麻里の家へ出かけた。夜中にかかった電話のことを報告することもあったが、実は、夏川一家の血液型を調べてみようと思いたったからである。もし、血液型から、赤ん坊が良介と陽子の子供でないことがわかれば、その事実を突きつけて、陽子から本当のことがきけると思った。

そして、麻里と赤ん坊の血液型がわかれば、相手の男を割り出すことが出来るのではないかと思ったのである。

ミキが玄関のチャイムを鳴らすと、陽子が、赤ん坊を抱いてあらわれた。

「あら、ミキさん。あなたの方から来て下さるって珍しいわね。さあ、どうぞ」

陽子は、愛想よくミキを中に招じ入れた。

夫が留守でも、赤ん坊がいることで、気がまぎれているようだった。

〈あなたが、赤ん坊にかまけている間に、あなたのご主人は、別の女と浮気をしてるわよ〉

ミキは、そういいたいのをこらえた。

陽子は、赤ん坊をお手伝いの女性にあずけて、ジュースを運んでくると、

「何か麻里のことがわかったんですか？」

と、きいた。

ミキは昨夜の電話のことを話した。

「まあ、本当？　麻里は何ていってました」

陽子は、顔を輝かせてきいた。

「何も言いませんでした。元気だからといっただけです」

「私に何か伝えるようにいいませんでした？」

「いいえ。それより、なんのために、彼女は私に電話をかけたかわからないのです」

「それは、あなたがきっと心配していると思ったからじゃない？　あなたは、麻里の親友だから」

陽子は、自分もジュースを飲みながらいった。
「それだったら、私の声もききたいと思う筈ですわ。それを一方的に話して切ってしまうなんて、麻里らしくもないと思います」
「そうね、おかしいわね。そばに誰かいたのかしら？」
「私は、あれは、テープだったんじゃないかと思うんです。もう、麻里は死んでいるのに、生きているようにみせようとして、麻里が生きていたときの声をきかせたんじゃないかと」
「そんな縁起の悪いことを……」
陽子は、絶句した。
「ごめんなさい。私たちには、どうしても麻里が生きているようには思えないんです。生きていたら、きっと、電話もかけてくるし、姿もあらわす筈なんです」
考え込んでいた陽子が、顔をあげた。
「そうね。本当のことをいったら、私もそう思っているの。でも、ひょっこり帰ってくるような気もするし……。あの子も、東京へ行ってから、随分変ってしまったわ。あの子は京都にいた時には、私に何でも打ちあけてくれたわ。それなのに、こんな大事なことを、教えてくれないなんて。何もかも打ちあけてくれていたら、探す手がかりもあるのに」
陽子は、涙をうかべた。
ミキは、話題を変えようと、
「あの、東京の晴子さんにきいたんですけど」
と、キーホルダーのことを話した。
陽子の顔色が変った。
「あのキーホルダーは、あの子が、本当に大切にしていたものですわ。私も欲しかったのに、どうしてもくれなかったんですの。あのあと、主人に同じようなのを買って来て欲しいとたのんだのですけど、似たようなものもなかったんです。仕方なく、これで我慢しているんですけど」
陽子は、スフィンクスのキーホルダーを出してみせた。

「その山川という人に、是非、きいてみて下さい。あの子がキーホルダーをあげたのなら、きっと、好きになった男性ですわ」

陽子は、ミキのキーホルダーを見ながらいった。

ミキは、かばんから、占いの本を出した。それには、血液型占いも書いてある。

「おばさん。私、麻里が、今、どうしているか、どうなったのか占ってみたいのです。おばさん、おじさん、赤ちゃん、麻里の血液型を教えてくれませんか？」

陽子が、不審に思うことは充分承知で、ミキは切り出してみた。

「血液型から、そんなことがわかるのかしら？」

と、陽子は、ミキの顔をじっとみたが、意外にあっさりと、教えてくれた。

「私はO型です。麻里は、A型で、赤ん坊はO型です。えーと主人は、確か、A型だったと思います。ご存知のように、私と麻里は、義理の仲で、あの子は、姉の子ですが姉もA型でした。これでよろしいかしら」

ミキは、うなずいて、メモに書きとめた。

「それで、どんなことがわかりますの？」

ミキは考え込んだ。

「そうですね、ゆっくり占ってみないとわかりませんが、この家系ではB型が全然ありませんね。この家系に、B型の人が入って来たとき、不吉なことがおこるといわれています」

「B型の人がねえ……」

陽子は、何か思い当ることがあるのかショックを受けたような顔をした。

「B型の人を知っていらっしゃるんですか？　麻里とつき合っていたんですか」

ミキは、つめ寄った。

もちろん、彼女のいった占いは、口から出まかせだった。

「ええ、ちょっと気になることがあります。でも、まさかという気がしますので、ちょっと考えさせて下さい」

そのあと、いくらミキがきいても、陽子は、そのことについては話してくれなかった。

〈彼女に心あたりがあるというと、京都にいる人物なのだろうか？〉

ミキは、仕方なく、帰ることにした。

6

家に帰って、ミキは、メモと、にらめっこした。

夏川良介、つまり、麻里の父親がA型で、亡くなった母親がA型なら、麻里が、A型だということは、当然である。

次に、良介がA型で、陽子がO型なら、赤ん坊がO型というのは、何の支障もない。

〈偶然うまくいったのだわ。でも、麻里が、O型の人とむすばれたとしたら、その子供がO型でもおかしくない〉

と、考えてから、おやっと思った。

何故、陽子は、B型の人物に動揺したのだろう。

〈赤ん坊は、B型なのだろうか？　それを隠しているのかも知れない〉

もし隠しているとしたら、それは、赤ん坊がB型だということになったら、陽子と良介の子でないと、すぐにわかるからだろう。A型とO型からは、B型は出来ないからである。

〈麻里の相手は、B型かAB型に違いないわ〉

ミキは、確信した。

早速、ミキは、晴子に電話して、血液型の話をした。

「それで、出来れば、大瀬教授と、山川不動産の親子、それに、念のため、野田くんの血液型も知りたいのだけど」

「わかったわ、なんとか調べてみるわ」

と、晴子がいった。

試験休みなので、勉強する気もなく、ぼんやりしていると、電話がかかって来た。

「もしもし」

ミキが、電話に出ると、相手は、意外なことに、夏川良介だった。
「やあ、どうも。実は、今度こそ、本当にあちらに帰るので、その前に、君に会ってたのんでおきたいと思って。食事を一緒にしないか」
「別にいいです。あのことはいいませんから」
ミキは、そっけなく答えたが、良介が、しつこく誘うので、とうとう行くことにした。
この前とは違うホテルのロビーに行くと、良介が、この前の女性と一緒にいた。
〈なんだ。私と二人で食事をするのかと思ったのに、彼女と一緒なんだわ〉
ミキは、腹が立ったが、ここまで来てしまった以上は、帰るわけにもいかなかった。
あの女性も、今日は、馬鹿に愛想がいい。名前も、林千絵と名乗った。
「あれから、陽子に会った？」
良介は、テーブルにつくなりいった。
「はい、今日会って来ました」
「えっ、そんな君。僕たちのことをいいに行って来たのか？」
良介が、あわてていった。
「違います。昨日の夜、麻里から電話があったので、そのことを知らせに行ったのです」
「えっ、麻里から？　何といって」
ミキは、麻里の電話の話をし、あれはテープのように思うといった。良介は考え込んでいる。
食事がおわり、デザートになったとき、ミキは、ふと、思いついて、血液型占いの本を出した。
「今、これにこってるんです。おじさんと、お姉さんの血液型いって下さい。占ってみます」
すると、千絵が、うれしそうにいった。
「本当？　じゃ、私がB、良介さんはAB型」
「えっ、おじさんは、AB型なんですか？」
「どうしたの。本当だよ」
良介は、胸につけたペンダントを見せた。それには、

名前と血液型が書いてあった。
「外国にいるから、自動車事故に会ったりしたときのために、つけているんだ」
良介は、あっさりといった。
〈陽子さんは、嘘を教えたんだわ。AB型とO型の陽子さんからは、O型の赤ちゃんは出来ないからだわ〉
ミキは、すまして、二人の組合わせがいいこと、最後はむすばれるということをいった。千絵は、満足そうにうなずいてから、
「じゃあ、AB型とO型の人の占いをやって頂戴」
と、いった。
良介が苦い顔をした。彼と陽子のことだとわかったミキは、
「この組合わせは、あまりよくありません。両方が秘密を持ちます。二人は別れた方がいいのじゃないでしょうか」
といった。
千絵が上機嫌で良介の方を見た。
〈陽子さんのO型は間違いないわ〉
と、ミキは思った。

第五章　血液型の疑惑

1

ミキは、家に帰ってから、手帳に、もう一度、夏川家の血液型を書いてみた。

夏川良介　AB型
　陽子　O型
　麻里　A型
　赤ん坊　O型
麻里の実母　A型

〈AB型とO型の両親から、親と同じ、AB型とO型の子供が生まれないことは常識だわ。すると、やっぱり、赤ん坊のO型というのはおかしい。夏川夫婦の子供ではない〉

〈B型の人物が、夏川家に入って来ると、夏川家は、メチャメチャになるといったとき、どうして、陽子さんは、取り乱したのだろう？〉

それは、多分、良介の恋人の林千絵がB型なので、そのことを思いついたのだろうと、ミキは思った。

〈陽子さんは、夫に愛人が出来て、それが林千絵というB型の女性だということを知っているんだわ。いや、まだ、疑っている段階なのかも知れない。それで、ぎくっとしたのだ〉

これで、すべての謎が解けたと思った。

あとは、東京の晴子が、麻里とつき合いのあった男性の血液型を調べてくれるのを待つしかなかった。

「そこで……」
と、ミキは、呟いた。
陽子に、良介の血液型が、A型ではなく、AB型であることをいって、赤ん坊が、夫婦の子ではなく、麻里の子供であることを認めさせなければならない。そうすれば、彼女も、もう少し、打ち割った話をしてくれるだろう。
ミキは、陽子へ電話をかけた。
「あら、ミキさん、どうしたの？」
陽子は、いつも通り明るい声で電話口に出た。背後で赤ん坊の泣く声がした。
「あの……、私、昔の日記を読んでいて、発見したことがあるんです」
「何かしら？」
陽子の声が、不安そうにひびいた。
「麻里と、血液型占いをしたときのことが書いてあったんです。そしたら、おじさんの血液型は、AB型だって」
「え？　ああ、そうだったかも知れませんわ」
「それじゃあ、おかしなことになるんです。AB型のおじさんと、O型のおばさんからでは、O型の赤ん坊は出来ませんわ」
「……」
陽子は、黙ってしまった。
「赤ん坊は、麻里の子供なんでしょう？　それだったらわかるんです。私も晴子さんも、麻里が赤ん坊を生んだに違いないってことは、前から思ってるんです」
しばらく間をおいて、やっと沈んだ陽子の声がした。
「本当は、そうなの。もちろん、うちの主人も、そのことは承知しています。だって、一年以上も、帰って来てないのに、子供が生まれる筈ないんですもの。多分、そのことで、麻里は、心身ともにずたずたになったと思うの。赤ん坊は、主人と相談して、私たちの子供として届けました。でも、あの子のために、このことは、ミキさん、黙っていて欲しいの。お願い」
「わかりました。親友ですもの絶対言いません。私も

晴子さんも、そのことは、前から感じていたんです。ここまでわかったんですから、おばさん、麻里が子供を生んだ前後のことを、もう少し詳しく教えてくれませんか？　麻里を探す手がかりにしたいのです」

「そうね。……私が、そのことを知ったのは、夏休みに、うちへ帰っていて、もうすぐ東京へ戻るという時でした。あの子がお風呂へ入っている時に、男の人の声で電話が掛って来たんです。『麻里？』って。私の声と、麻里の声は似ているから間違ったんじゃないかと思います。でも、私が、『いいえ。母親です』というと、あわてて切ってしまったの。それがなんとなく変だったから、お風呂場まで言いに行ったんです。また、かかってくるかも知れないと思って。その時、あの子は、髪を洗っていたけど、ふと見ると、お腹のあたりがふくらんでいるの。女の直感で、妊娠しているんじゃないかと思いましたけど、そうも言えないので、黙っていました。でも、気になったので、あの子が、東京へ帰ってから、一カ月ほどして、私も東京へ行ったのです。あの子は、びっくりしていました。そして部屋に入ったら、男物がいろいろあって……」

陽子は、そこで、いいよどんだ。

2

「どんな男物でした？　若い人のですか？　それとも中年の？」

ミキは、それが、重要なポイントだと思ってきいた。

「わかりません。靴が一足と、男物の傘がありましたし、ネクタイと、靴下がありました。それから、歯ブラシの青いのが、あの子の赤いのと一緒にあったときには、ショックを受けました。それで、あの子に問いつめたけど、どうしても、相手のことをいいません。妊娠してるのかときいても黙ってました。

しまいには、泣いて、どうしても帰ってくれというので、一旦は、ホテルに戻りましたけど、心配で、翌日行ったときには男物は消えていましたの。あとで考

えると、あの日、男の人が帰ってくるので、私を追払ったんですわ。外で、見張っていればよかったんですけど、そこまで気がつきませんでした」

陽子は、しんみりといった。

「それからどうなったんですか？」

「十一月になってから、ある日突然、麻里から、『私、子供を生みます。許して下さい』と電話がかかって来たので、とんで行きましたが、留守でした。それから、色々あって、やっとあの子に会うことが出来ましたけど、その時は、もう大きなお腹をしてました。それで、今さら仕方がないので、私の子供として籍に入れるから、心配しないで生むようにいいました」

「そうですか……」

ミキも、話をきくと、陽子を悪く思っていた気持がとけて行った。いい母親だと思った。

〈うちの母だったら、そこまでしてくれるだろうか〉

「それで、相手の人のことをきいたけど、どうしてもいいませんでした。それ以上きくと、どこかへ姿を消してしまいそうで、仕方なく、ひき下りました。京都に帰ると、私が生んだという嘘がわかってしまうので、私も、東京にいて、むこうからの連絡を待ちました。あの子も、今までいたマンションには、夜のうちに時々帰るくらいで、ほとんど行かなかったのです。お腹が大きいのがわかると困るからです。あの子は、かつらをかぶり、眼鏡もかけて変装し、子供を生むときも、偽名をつかっていたみたいです。生んだ病院も教えてくれませんでした。私が子供を受けとったのは、産後十日ほど経ったときです。そのとき、もう一度、相手のことをきいたんですけど、興奮していて、そのことをきくのなら、子供を渡さないといったので、仕方なく、連れて帰りました。そのとき、あの子は、一カ月したら、全部話すといったので待っていましたけど、とうとう連絡はありませんでした。籍を入れるについては、父親にも、一こと、手紙を書いて頂戴といったら、手紙は、出したようです」

「おじさんは、どうおっしゃってました？」

ミキは、あの女性を連れた良介の顔を思い出しながらいった。
「はじめは、びっくりしたようでしたけど、仕方がないといってました。そして、私に、あまり、彼女を問いつめないようにって」
「麻里は、どうしてそのあと、帰って来ないのかしら？　もう、お腹は大きくないのだから、大学へ行っても誰にもわからないのに」
「大学へ行く気力はなくなったといってました。本人は、退学したいといったのですけど、私は、一年もしたら気が変るかもしれないと思って、休学ということにして貰ったのです」
陽子は、ため息をついた。
ミキは、陽子も気の毒な人だと思った。それだけ、なさぬ仲の娘にしてやって裏切られ、夫には、愛人がいるのだ。
「でも、私、あの赤ん坊が可愛くて仕方がないのです。赤ん坊には罪がないし、あの子が大きくなるのを楽しみに生きていきたいと思うんです。丁度、あの子の小さいときのことを思い出したりしていますの」
「麻里もきっと、いつか、わかるときがくると思います」
ミキは、そういうと、受話器をおいた。
愛というものが、楽しさ美しさだけでなく、苦しみも伴うものだということが、なんとなくわかったような気がした。
ぼんやりしているところへ、電話がかかって来た。それは譲二からだった。
「もしもし」
「あ、ジョージなの」
「そう。期末テストが終ったんだ。会いたいな。今日は、僕のところへ来ない？　レコードきかせるから」
「でも、男の人が住んでるところへ行くって……」
ミキは、いいながらも、内心ではうれしかった。ミキは、彼が好きだったけど、彼の方は、どう思っているのかよくわからなかった。

〈家へ行ったら、彼の気持がわかるかも知れない〉
という期待があった。
「いいじゃないか。外を歩くのは寒いんだよ。それに、今日は、誕生日だから、君と過したいなと思って」
「えっ、誕生日なの？　だったらいくわ」
口実ができたので行くことにした。
「それで、プレゼント何がいい？」
ミキは、息をつめた。
〈何もいらないよ。君の愛が欲しいなんて言わないかな。言わないにきまってるわ。もし、君の躯が欲しいなんて言ったらどうしよう？〉
そんなミキの心なんか全然気づかず、譲二は、しばらく考えてから、
「そうだなあ。キーホルダーがいいかな、それとも、万年筆かな。……なんでもいいよ」
と、いった。

3

結局、ミキは、街を歩きまわって、ペアの腕時計を買って来た。ファッション時計だから、二つで八千五百円だった。
彼の住んでいるのは、マンションというより、アパートに近い部屋だった。六畳三畳に、キッチンがついている。
部屋は、男一人で住んでいるにしては片付いていた。
「昨日から、必死で片付けたんだよ」
譲二は、笑いながらいった。
彼は、バースデイケーキと、お寿司を買ってきていた。
「ケーキ、食べようか？」
「じゃ、コーヒー入れるわ」
ミキは、甲斐がいしくキッチンに立った。
「ねえ。コーヒーカップや、お湯のみ、みんな二つず

つあるわ。どうして？　彼女がいるの？」
「そんなことないよ。スペアがあると洗わなくてもすむから便利だし、客がくる時だってあるから」
「だってェ、ピンクの花模様のついたカップなんて、女の好みよ。自分で買う筈ないわ」
　ミキは、こだわった。
「いいじゃないか、そんなこと。女友だちの一人や二人」
「そうね、私だってボーイフレンドいるものね」
　ミキは、負け惜しみでいった。
　ケーキにローソクをたて、火をつけてから、ミキは、持って来た紙のピアノで、ハッピーバースデイをひいた。
「へえ、そんなピアノあるの？」
　譲二が珍しそうにいった。
「今、流行ってるわ。クリスマスカードなどあけると、曲が流れてくるのがあるでしょ。ああいう原理だと思うの」
　二人で、ハッピーバースデイを歌ったあと、譲二がローソクの火を吹き消した。
「はい、ジョージ、プレゼント」
　ミキは、リボンのかかった包みを出した。
「何だろうな」
　彼は、うれしそうにリボンをほどいた。
「あっ、時計だ。すごいな、高いんじゃない？　こんなの」
　彼は、すぐに時計を腕にはめた。ミキは、待っていたように、自分も、少し小さいペアの時計をした腕を出した。
「あれっ、ペアじゃないか。へえ……」
「嫌なの？」
「嫌じゃないさ。でも、何だか恥ずかしくって」
「二人で同じ時計はめていると困るの？」
「困らないさ。同じ大学じゃないし……」
「同じ大学だったら困るのォ？」
「困らないっていってるだろう」

ミキは、なんとなく悲しかった。困らないという消極的な言葉でなく、うれしいとか、なんとかいって欲しかったのだ。

ミキが黙り込んだのを見ると、あわてて、譲二が、肩に手をかけた。

「どうしたの？　元気だして」

「ジョージ、私を愛してる？　それとも、ただ、仲がいいだけ？」

「好きだよ」

「好きって、どんなに？」

彼は、ちょっと、黙っていたが、突然、ぐっと、ミキを抱きしめると、キスをした。

あっという間だった。

「恋人じゃなかったら、僕の部屋に来いなんて言わないよ。わかってるくせに」

「本当？」

「本当だって」

彼は、もう一度、ミキの顔にキスをした。

「うれしいわ。私、ジョージが好きだったから」

ミキが、涙ぐんでいった。

「馬鹿だなあ。さあ、ケーキ食べよう」

「ええ」

ケーキを食べながら、ミキは、彼にきいた。

「ジョージ、血液型、何型？」

「僕？　僕はO型だよ、どうして？」

「占いをしたいから」

といいながら、ミキは、心の中で、

〈まさか、ジョージが、麻里の相手では？〉

と、気になった。

第六章　不倫の家

1

譲二が、麻里の恋人で、彼女の生んだ子供の父親ではないのかという疑いは、ミキを苦しめた。

〈血液型が、O型の男性っていくらでもいるわ〉

と思ってみたが、彼は、麻里が好きだったみたいだし、お正月前後に子供が生まれたとすると、妊娠したのは、春休み頃ということになる。

〈春休みには、麻里は京都に帰っていて、ジョージや私たちと仲よく遊んでいたわ〉

しかし、ミキは、すぐに、その疑いをふり払った。

麻里の母親陽子が秋に上京したとき、麻里の部屋には、男物があったという。つまり、麻里は、男と同棲していたのだ。

譲二は、ずっと京都住いだから、彼の筈がない。

ミキは、やっと、ほっとした。

東京と京都は、新幹線で三時間でいけるから、時々譲二が上京していたということも考えようと思えば考えられたが、今は、思わないことにした。

二、三日して、東京の晴子から手紙が来た。

遅くなってごめんなさい。

血液型、野田くんのはすぐわかりました。

なんと、B型です。

それから大瀬教授は、O型だそうです。わざわざき

きに行ったのです。
だけど、山川不動産社長と、息子のアナウンサー山川邦彦のは、まだわかりません。
今、彼に接近しています。彼はプレイボーイで、たくさん女友だちがいるみたいです。私も、彼を誘ってみたんですが、麻里の友だちということで、警戒してるみたいです。どうしても駄目なら、テレビ局に勤めている先輩を探して、うまくきき出して貰おうと思っています。
全部わからなくてごめんなさい。
野田くんが容疑者の一人ではないかと思ったときから、彼にこだわりを持ってしまって、最近は、あまり話していません。
では

ミキは、手紙を読み終って、微笑んだ。
彼女も、ミキと同じように、自分のボーイフレンドを疑ってみたりしているのだ。

〈麻里、罪なことしないでよ。早く出て来てくれないと、みんな迷惑しちゃうじゃないの〉
ミキは、心の中で、麻里に呼びかけた。それから、すぐ、晴子に、手紙の返事を書いた。

お手紙有難う。
実は、麻里の相手の男性は、B型か、A型かO型であることがわかったの。早く知らせなくてごめんね。
その他、良介氏がAB型、陽子さんがO型なこともわかり、陽子さんに、赤ん坊が麻里の子であることを認めさせました。
O型の大瀬教授は怪しいと思います。
山川親子のも、よろしく。

手紙に封をすると、切手を買うために、自転車で、夏川家の近くまで行った。
桃の花が咲いている家もあって、もうすっかり春だった。母親が、桃の花を買ってくるようにといってい

たのを、ミキは思い出した。
〈そうだわ、ついでに買って来よう〉
何げなく、夏川家の方へ回ると、一人の男性が、夏川家へ入って行くところだった。
ちらっとしか見えなかったが、四十歳ぐらいの色の浅黒いスポーツマンタイプの男だった。
〈一体、誰かしら?〉
夏川家の前まで行くと、ミキは、自転車をとめて中をうかがった。
夏川家には、良介の会社の人も出入りするだろうし、陽子の親戚の人も訪ねるだろう。
男の人が入って行っても、決しておかしい筈はなかったが、なんとなく、その男性が、あたりをうかがっている様子なのが、気になった。
夏川家の中は、しんとしている。
ミキは、再び自転車を走らせて、切手と桃の花を買うと、もう一度、夏川家のところへ戻ってきた。
みると、玄関の横に、お手伝いの良江が手持無沙汰に立っているのが見えた。
「あら、良江さん、どうしたの?」
ミキが、声をかけると、良江は、びっくりしたようにミキを見た。
「今日は、映画を見に行っていいといわれたので、さっき出かけたんですけど、お財布を忘れて来たのに気がついたので、戻って来たのです。でも……」
「でも、どうしたの?」
「庭にまわったら、お客さんが来ておられるようなので、どうしたらいいかと……」
客というのは、さっきの男に違いないと、ミキは思った。
〈客が来ているときに、中に入れないというのは、もしかして……〉
ミキは、胸がどきどきした。
〈あの男は、陽子夫人の恋人ではないだろうか?〉
そこで、ミキは、なにも気づかないふりでいった。
「丁度よかったわ。私、桃の花を持って来たの。呼ん

でみるわ」
「そうですか。よかった」
良江は、ほっとしたようにいった。

2

ミキは、チャイムを鳴らした。
しかし応答はない。もう一度鳴らしたが、同じだった。
「庭にまわってみようかしら？」
しかし、良江は、なぜか困ったような顔をしている。
ミキは、かまわず、どんどん庭にまわり、縁側から声をかけた。
「おばさーん。ミキです」
しかし、中からは、何も音がしない。
縁側の戸をあけると、カギがかけてなくて、するりとあいた。
ミキは、中に入って行った。
赤ん坊が、一人でねむっていて、そばに陽子もさっきの客もいない。
「あの……二階かもしれません」
良江がいった。
「二階って、麻里の部屋と、おばさんたちの寝室でしょう？」
良江は答えず、
「すみません。私の部屋へ行って、お財布とって来ます」
と、奥に入って行った。
ミキは、二階へ上って行った。そして、寝室のドアから中をうかがった。ため息のような声がする。
ミキは、あわてて下へおりた。あまりあわてたので、階段に敷かれた絨緞に足をひっかけて、下までだだっと落ちてしまった。
ものすごい音がした。
良江がとんで来た。
「大丈夫ですか？」

「痛い。痛っ」
ミキは、子供のように叫んだ。
寝室のドアがあいて、ガウン姿の陽子が姿をあらわした。
「あら、どうしたの？」
陽子は、上気した顔でいった。
「桃の花を持って来たんです。声をかけても出て来られないので、階段をのぼろうとしたら、まん中へんからおちてしまって。ああ、痛いっ」
幸い、頭は打たず、痛いのは脚と腰だった。
「良江さん、あなたはどうしたの？　出かけた筈でしょ？」
陽子は、ミキを介抱しないで、良江にきびしくいった。
「はい。映画館の前まで行って、お財布を忘れたことに気がついて、戻って来たんです」
良江は、おどおどしている。
「でも、映画館までは、バスで行かないといけないのに、バス賃を出すときに気がつかなかったの？」
「ポケットの中にあった小銭を出したので、気がつかへんかったんです。すみません」
陽子は、それからやっと、ミキを見て、
「近所に、外科の先生がいらっしゃるから、往診して貰うわ。良江さん、電話しなさい」
と、いった。
十五分ほどして、医者がやって来て、ミキをみた。医者が来たときには、陽子は、きちんと洋服をきていた。
「腰を随分打ってますね。脚も骨折しています。入院しますか？」
「えっ、入院？　痛っ！　そんなに大変なんですか？」
ミキは、顔をしかめた。
「すぐに、入院しましょう。その方がいいわ、費用は、こちらで持ちます」
陽子は、そういうと、タクシーを呼び、ミキを車に運び込んだ。
「一足先に行って頂戴。私は、赤ん坊のことがあるか

ら」
陽子は、良江をタクシーに乗せてついていかせると、入口で手を振った。
〈あの男の人を、帰らせてから、来るんだわ〉
痛みに歯をくいしばりながら、ミキは思った。
もし、誰もいないのなら、良江に赤ん坊の守りをさせて、自分がついてくると思った。

3

手当てが一とおり終って、ミキは、病室に落着いた。
パートに出ている母親には、夕方帰ってから知らせることにして、ミキは、そばに立っている良江にいった。
「どうも有難う。折角、映画に行くところだったのにごめんなさい」
「いいんです。それより……」
「それより何？」
「奥さんが、機嫌を悪くされたんじゃないかと思って」
「私のことで？」
「いいえ。私が戻ったことで」
「どうしてなの？」
「……」
良江は黙っている。
「寝室にいた男の人は誰？」
ミキは、半分体を起こしながらきいた。
「えっ、そんな」
良江は、驚いたように、ミキをみつめた。
「私、知ってるの。私が、家の前を通りかかったとき、その男の人が、中に入って行くのを見たわ。そして、陽子さんが、寝室から、ガウン姿で出て来たということは、二人は、特別な関係にあるというわけでしょう？」
「……」
「一階には、座敷も応接間もあるというのに、夫のい

ない留守に、男性を、寝室にあげるなんて、不倫としか考えられないわ。私、ちらっと見たんだけど、陽子さんは、ガウンの下に何もつけてなかったもの」

良江は、黙ってうなずいた。それから、顔をあげると、

「その男の人というのは、どんな感じの人でしたか？」

と、きいた。カマにひっかからないように警戒している様子だった。

ミキが、ちらっと見た男の風貌をいうと、やっと、良江は、話す気になったようだった。

「森信彦という人です。時々おいでになりますけど、私の留守の時ばかりであまりお会いしてません。でも、旦那さまの方も、女の人がいるらしいし、ほとんど海外生活なので、奥さまもお可哀そうです」

「森信彦というのは、何をしている人？」

「知りません、ただ、奥さまが若いときの恋人だったようです。そんな話をなさってるのをきいたことがあります。でも、その時、もう森さんの方は、結婚していて、奥さんがあったので、別れたみたいです」

良江は、ため息をついた。いつも、一人だけの胸にしまっていて、人には言えず苦しかったらしい。

「でも、黙っていて下さい。私が困りますから」

良江がいい終ったとき、ドアがノックされた。黒のベルベットのスーツを着た陽子が立っていた。

「大丈夫？　心配したわ。今、お医者さまにきいたら、二週間でギプスがとれるというので、ほっとしたけど」

陽子は、いつものやさしい彼女に戻っていた。手には、たくさんの花を持っている。

胡蝶蘭、バラ、シンビジュームなど色とりどりの花束である。

「はい、お見舞い。あ、それから、桃の花持って来てくれて有難う。私、ちょっと気分が悪くて眠っていたの。ごめんなさいね。でも、二階まで上ってくるんですもの、びっくりしたわ」

陽子は、ちらっと皮肉をいった。たしかに、他人の家へ勝手に上って、応答がないのに、二階まで上るというのは、厚かましすぎる。

「すみません。持って来たのが、お花でなかったら、チャイムを鳴らして応答がないと、帰ってしまうんですけど、お花だから、持って帰ると枯れてしまうので、家の中に入れておこうと思ったんです。お手伝いさんでもいたら、お渡ししようと思って。そしたら、二階で人の気配がしたので何となく、麻里がいるような気がしてのぼったんです。麻里がいるときには、いつも二階に上ってたし……」

〈何で、私がこんなにいいわけしないといけないんだろう〉

と思いながら、ミキは、一生懸命にいった。入院費用を陽子に出して貰わなければならないこともあった。ミキの家では、いくら保険がきいても大変なのである。

「あら、上る途中で落ちたの？　一旦上ってから落ちたの？　どっち？」

陽子がさりげなくきいた。

「いえ、中ほどまで上ったところで落ちたのです。お台所から、お手伝いさんが出て来たのに気がついて、ふりかえろうとしたんです」

「そう」

陽子は、謎めいた微笑を浮かべた。

「これが、階段の上に落ちてたわ。あなたのでしょう？」

それは、花のついたヘアーピンだった。

ミキの顔があかくなった。

良江は、花びんを借りに行っていて、いない。

「あなたたちの年頃って、大人のことが気になるらしいわね。麻里もそうだったわ。あの子は、うちに男のお客が来るたびに、ママの恋人？　ってきいたわ。でも、あなたも、大人になったら、大人の社会のいろいろな仕組みがわかると思うわ」

陽子は、しんみりといった。

ミキは、だまってふとんをかぶった。

第七章　密室殺人？

1

入院しているミキの所へ、譲二が見舞いにやって来た。
「やあ、どう？」
「ええ。まあね。でも足は痛いわ」
「大変だったね。一体どうしたの？　事情がよくわからないんだけど。君の家へ電話したら、お母さんが、君が入院してるっていったからとんで来たんだ」
「それが変なことになったの。きいてくれる？」
「ああ」
ミキは、陽子の家へ行って、階段からころげ落ちた話をした。
「へえ、大冒険じゃん」
「そうよ。でも、マズっちゃった」
ミキは、突っ張ってみせた。
「それにしても、夏川家って、家中が不倫やってるんだなあ。夫には愛人がいて、奥さんには恋人がいる。そして、娘は、不倫の子供を生んだ……」
譲二は、ため息をついた。
「麻里だけは真面目だと思ってたのに残念だわ。……ところで、陽子さんの恋人、森信彦というんだけど、何者かしら？」
「調べてみないとわからないね。大人のことだから放っといたらいいんじゃないの。僕たちとは関係ない

よ」
「そうね。でも、麻里は、お父さんのことも、お母さんのことも知ってたのかも知れないわ。だから淋しい思いをしていたのかも。もっと、親身になってあげたらよかったわ」
ミキは、しゅんとしていった。
「元気だせよ。ほら、果物持って来たから」
譲二は、大きな果物籠を出した。
「わァ、有難う、高いんでしょう？」
「ムードこわすこと言うなよ」
譲二は苦笑した。
「あー、退屈だわ。ジョージ毎日来て」
「毎日来れるかな。春休みになったし、アルバイトすることにしたんだけど」
「でも来てー。じゃないと絶交する」
「えっ、絶交ってきびしいな。でも、面会時間に間に合わないかもしれないよ。なるべく毎日来るけど」
「指切り」
「えっ、どうするの」
テレながらも、譲二は、ミキと指をからめた。
「いうの忘れてたけど、東京の人たちの血液型わかったのよ」
ミキは、野田と大瀬教授の血液型の話をした。そして、大瀬があやしいといった。
「僕もO型だけど、僕じゃないよ」
「本当？」
「本当だよ」
「よかった」
二人は顔を見合わせた。
譲二は、ミキの手にキスをした。
ミキは、手なのがちょっと物足りなかったが、それでも一応満足した。
「陽子さんは、その後来てくれる？」
「ええ。毎日。でも、お花をおいてすぐ帰るの。その方が、こっちもいいけど」
ミキは笑った。

譲二が帰ったあと、クラスの友だちが、代る代る見舞いに来てくれた。

そういう女友だちには、まさか、不倫の現場をのぞきに行って墜落したとはいえないので、階段から落ちたのだとだけいった。

「ミッキーは、あわてものだからねえ」

「でも、足でよかったね」

みんなは、心から、ミキを慰めてくれた。

ミキは、病院生活も楽しくなってきた。

毎日、譲二が来てくれるからである。

しかし、ある日、いつもと違って、朝、譲二が病室にやって来たので驚いた。

「あら、どうしたの？　今日お休み？」

ミキは、大喜びで、思わずベッドの上に起き上った。

そして、「あ、痛っ」といった。

2

「今日はもう休むことにしたよ。実はね」

譲二は、ベッドの横に椅子を持って来て座った。

「夏川家のお手伝いさん知ってるだろう？　良江という人」

「ええ、知ってる」

「あの人、死んだんだよ」

「えっ、どうして？」

ミキは、また、ベッドから体を起こして、顔をしかめた。

「毒を飲んで自殺したというんだ。自分の部屋に鍵をかけて」

「へえ、密室殺人じゃないのかしら？　あの人は、陽子さんの不倫の関係も知ってたし、口をふさがれたのでは」

ミキは、眼をきらきらと輝かせた。

「そんなことぐらいで、人殺しはしないと思うよ。だって、夫の方も、浮気してるんだからアイコだよ」
「じゃ、何故死んだの？」
「僕にきいてもわからないよ。ただ、遺書みたいなのはあったらしいよ。
〈私は人生勉強が足りませんでした。恋って苦しいものですね。奥さま　すみません。良江〉
と、書いてあったんだって」
「彼女は、いくつなのかしら？」
ミキは、考えながらいった。
「テレビでは三十三歳だといっていたね。まだ、くわしいことはわからないけど、警察では、失恋自殺だと見てるみたいだよ」
「この部屋にはテレビがないから、残念だわ。それで、どうして今日アルバイト休んだの？　この事件を知らせるため？」
ミキは、今度は、そっと体を起こしていった。
「なんとなく、君のことが心配になったからね。もし、お手伝いさんが、陽子さんの不倫を知ったために殺されたのだとしたら、君もヤバイと思って」
「ほら、やっぱりジョージだって、良江さんは殺されたと思ったんでしょう？　でも、うれしいわ。心配してくれて」
ミキは、感激したが、次の瞬間には、恐ろしくなった。
「本当に私、殺されるのかしら？」
「大丈夫だと思うけどね。でも、出来たら、早く、退院した方がいいよ。それから、陽子さんが持って来た食べものは、捨てた方がいいと思うね。それが言いたかったんだ」
「有難う」
その日は、一日中、譲二は、そばにいてくれた。そして、休憩室まで、テレビを見に行って来て、情報を伝えてくれた。
「警察も、他殺の疑いを持っているみたいだね。陽子さんの不倫については知らないみたいだけど、不審な

点があるというコメントだったよ。死体の状態で何かおかしい点があるんじゃないかな」

さすがに、その日は、陽子は、病院には姿を見せなかったが、翌日にはやって来た。

ミキは、譲二の助言があったので、なるべく他殺と疑っているような言葉はつつしんだ。

「ねえ、ミキさん、うちのお手伝いしていた良江さんが、自殺したの知ってる？」

いつもは、すぐ帰る陽子が、椅子に座って話しかけて来た。

「看護婦さんからきいてびっくりしました。失恋したからみたいですね」

「ええ。私も知らなかったんだけど、彼女は随分悩んでいたのね」

陽子は、ミキの顔色をうかがうようにじっとみつめた。ミキは、わざと明るく、

「相手の人は、一体誰なんですか？　興味がありますわ」

と、いった。

「うちによく来る人だと思うの。でも、その人に迷惑がかかるから、うかつなことはいえないわ。あの人も、三十三歳になって、あせっていたのね」

ミキは、うなずいて、

「三十三歳になって相手がいなかったり、失恋したら、私だって死ぬ程悩むと思いますわ、可哀そうに」

と、いった。陽子がほっとしたように、

「やっぱりそうね。私、去年の夏から、一月まで、あの人を実家に帰したの。結婚相手を探してらっしゃいって。私も、麻里の子供を私が生んだことにしないといけないから、そのカムフラージュもあったのよね。だって、私のお腹は全然大きくならないのに、突然子供が出来たっていっても、信じないと思ったから。休んでいる間も、もちろん、お給料は出したわ。それで、一月になって、話はどうなったかきいたら、きまってないっていうでしょ。それなら、赤ん坊が出来たから手伝いに来てといったら、喜んで来てくれたの」

「そうですか。でも、良江さんは、折角休暇をもらったのに結婚がきまらなくて、あせってたのかも知れませんね」
ミキは、相槌を打った。
「でも、うちで死なれて迷惑したわ。警察は、自殺ではないんじゃないかなどというんですもの」
陽子は、また、ミキの顔をみつめた。
ミキは、あまり相槌ばかり打っていても、かえってミキらしくないと思われると考え、興味を持ったようにいった。
「自殺じゃないというと、何なんですか？　まさか殺されたんじゃ……」
「そうなの、強盗か何か入って、殺されたのかも知れないと思っているようなの。私は、二階にいたからわからなかったけど」
「じゃ、強盗が入って、気がついた良江さんをまず殺し、そのあと、部屋を物色したんでしょうか？　何か盗られてましたか？」
と、ミキは、身を乗り出すふりをした。
「いいえ。よくわからないけど、何も盗られてないみたいなの。だから、わからなくなってしまって……」
〈なるべくなら、自殺ということにしたいので、盗られたものはないといっているのだわ。そのために密室にしたのだから〉
ミキは考えたが、そのことは、おくびにも出さなかった。

3

陽子は、なかなか帰らない。しばらくして、ミキは、手を叩いた。
「わかった！　事件の謎が」
「えっ、どんなこと？」
陽子が、びっくりしたように、眉をぴくりと動かした。
「きっと、強盗ではなくて、良江さんの好きな人が夜

中に来たんです。良江さんが、家に入れたんですわ。その相手の男の人は、良江さんと結婚できない立場にあったから、良江さんに結婚をせがまれて困っていた。それで、一緒に蒸発しようといって、書き置きをかかせ、そのあと殺してしまったんじゃないですか。きっと、そうです」

「あなたって、頭がいいのね。私も、そういうことかも知れないとも思っているの。とにかく、そんなことがあったから、毎日はこれないけど、早くなおってね」

「はい。なるべく早く退院しようと思っています」

ミキは、元気にいった。

しかし、陽子が帰ったあと、急に、深刻な顔になって考え込んだ。

あなたって頭がいいのね、といって、じっとミキを見たときの陽子の顔が気になって仕方がなかった。

〈彼女が私に頭がいいといったのは、私の推理をほめたのではなく、私が、陽子さんを疑っていることをあらわさないように演技していることについて、皮肉ったのではないだろうか？〉

それなら、陽子は、今日は、ミキを試しに来たということになる。もし、ミキが、陽子の不倫を喋るとか、疑っていることがわかったら、ミキも殺されるかもしれないのだ。

ミキは、医者が回診に来たとき、家に帰りたいと申し出て見た。

「ギプスははずさないようにして、じっとしています。駄目でしょうか？」

しかし、医者は、首をふった。

「家では、どうしても無理をしますし、毎日、包帯をとりかえて、ギプスの状態を見ないといけませんからね。それに夏川さんの方から、費用も、全部負担するので、充分に治療してあげて下さいといわれていますから、帰らないで下さい。折角、ここまでうまくいってるのに、失敗すると、また、はじめからということになりますよ」

「わかりました」
その日の夕方、やって来た譲二に、ミキはこのことを訴えた。彼は、黙ってきいていたが、
「仕方がないね。やっぱり、ちゃんと直さないと。あと一週間くらいだから頑張ろう」
と、いった。
ミキは、うなずいてから、陽子が来たときのことを話した。そして、自分の推理を陽子に話したときの様子も伝えた。
「あんまり、無理に話さない方がいいと思うよ。相手は利口な人だからね」
譲二は心配そうだった。
「それに僕は、陽子さんが、良江さんを殺したとしたら、動機がわからないな。陽子夫人の不倫を知ったとしても、前にもいったように、それは、良介氏の方も同じだし、離婚すればおわりだからね」
「でも、離婚するのは嫌だったんじゃない？　それに、夫の浮気についても知らなかったかもしれない」
「そうだね」
譲二は、考え込んだ。ミキも黙っていたが、突然、大声をあげた。
「ねえ、ねえ、こういうことは考えられない？　陽子さんが、麻里を殺してしまって、そのことを、良江さんに感づかれたということは」
「えっ、そんな。二人は、義理の仲だけど、本当の親子より仲がいいといってたじゃないか」
譲二は、驚いていった。
しかし、ミキは夢中でいった。
「麻里が、お正月に子供を生んだとき、陽子さんが、麻里を叱った。麻里は麻里で、陽子さんの不倫をなじった。それで、喧嘩になって、陽子さんは、麻里を殺してしまったんじゃないかしら。そのことを、良江さんに知られたので、仕方なく、良江さんも殺してしまったのでは」
「うーん。重大な発言だね。でも、東京で、麻里くんが殺されたのなら、良江さんが感づく筈はないと思う

んだ。その場合は、麻里くんは、一度、京都へ帰って来たということになるね」
「どっちにしても、麻里は、もう死んでると思うの。でないとこれだけ連絡もなく、姿もみせないというのはおかしいわ。それなのに、陽子さんが警察に届けないのは、自分に覚えがあるからじゃないかしら？」
「……」
譲二は、考え込んでいる。

4

顔をあげた譲二は、
「じゃあ、陽子さんが麻里くんを殺したとしたら、赤ん坊の父親は、誰なんだ？　東京の大瀬教授や、山川親子は、麻里くんがいなくなったことと無関係なんだろうか？　恋人だったら、麻里くんが、突然姿を消したら、おかしいと思って、密かにでも探すんじゃないだろうか？」
と、いった。
「そうねえ……」
ミキも考え込んだ。そして、
「不倫の恋で、赤ん坊まで生まれて困っていたとしたら、彼の方は、麻里がいなくなって、ほっとしたんじゃないかしら？　でも、彼女が死んだということはわからないから、不安な気持になるでしょうね。一体、どうなったのかと思って。でも、大瀬教授も、山川親子も、私たちが探しに行ったとき、あまり動揺してなかったけど、どうしてかしら？」
と、呟いた。
「わからないな」
譲二は、ため息をついた。
「それにしても、本当に陽子さんが、良江さんを殺したのだとしたら、一体どういう風にして密室を作ったのかしら？　同じ家だから、良江さんの部屋の鍵のスペアを持っていたということかしら？」
「いや、良江さんの部屋というのは、数字錠だったと

いうことだよ。プライバシイを守るというか、自分の留守の間に、陽子さんが部屋に入ったりしたら困ると思ったのだろうけど。自分が中にいるときには、中から数字錠を掛け、部屋から出るときには、ドアの外から数字錠をかけていたんだって」

「へえ、数字錠？　数字錠って、これ？」

ミキは、バッグの中から、小さな筒状の錠を出した。三段になっていて、印のしてあるところに、三段とも数字を合わせないとあかない鍵である。

「そうだけど、それ、どこの鍵？」

「大学のクラブの部屋のロッカーの鍵よ。今は何も入ってないので、こうして持ってるの。ほら、１１７とあわせるとあくわ。イイナと覚えておくの」

「良江さんは、部屋の中から、数字錠をかけて死んでいたというんだ。窓には、サッシュの戸が入って、しっかり戸締りがしてあったというから、完全な密室だね。発見したのは、陽子さんで、いくら戸を叩いても応答がないので、窓の外へまわってみたら、カーテンの隙間から、良江さんが倒れているのがみえた。それで警察を呼び、刑事が、窓ガラスを破ってカギをあけ、中へとび込んだということだったよ」

「そう。……それだけ完全な密室なのに、どうして、他殺の疑いもあると、警察はにらんでいるのかしら？」

「それは、わからない。捜査の秘密なんだろうね。それに、警察がいくら調べても、良江さんが失恋した相手というのが出て来ないんだって。警察は、陽子さんの夫良介と不倫の関係があったのじゃないかと調べているみたいだけど、見当違いだよね」

「そうよ、おじさんには、恋人がいるんだもの。ところで、警察が、あの家を調べたら、当然、麻里の行方不明の件が明るみに出るんじゃない？」

ミキは、譲二の顔をみつめた。

「テレビや新聞でみるだけだから、わからないけれど、麻里のことは何も報じられてないね」

「そう」

ミキは、うなずきながらも、目は、数字錠を見ている。
「どうしたの？」
「数字錠というのは、いくら番号がわかっていても、外からはかけられないなあと思って。ただの掛金だったら、推理小説などで、外からかける方法もあるけど、数字錠は、まず、穴のついた掛金をかけて、その中へ数字錠を入れないといけないし、次には、その数字錠の上下をぐっとしめてはめてしまわないといけないから、どうしても外からは操作できないわ。窓ガラスの方からなんとかしたんじゃないかしら？」
「窓はアルミサッシュだときいたけど」
譲二は、病室の窓を見た。そして、金具にさわった。
「あけるんだって随分力がいるよ。外からじゃ閉まらないよ」
「じゃあ、自殺なのかしら？」
ミキは、がっかりしたようにいった。
「この密室の謎が解けない限りはね」
そういうと、譲二は、持って来た紙袋をあけた。
「ほら、駅弁を買って来たんだ。食べる？」
「うん。食べる」
ミキは、にっこりした。

5

ミキが、入院したことを手紙で知らせておいたので、突然、晴子が病院にやって来た。
「わァ、来てくれたの？　悪いわ、京都までわざわざ」
ミキが感激していうと、晴子は、
「京都に一度来て見たかったからいいのよ。何かきっかけがないと来れないから、丁度よかったわ」
と、いった。
二人は、病室で、一日中話をした。ミキの悪いのは脚だけで、病気ではないので、退屈をもてあましている。晴子が来てくれたのは、好都合だった。

ミキは、晴子に陽子のことを何もかも打ちあけた。さすがに、殺人まで起こったときいて、晴子も驚いた様子だった。

「でも、陽子さんが、麻里を殺したなんて、ちょっと推理が飛躍しすぎと違う？　それなら、折角調べているのに、東京の男たちは、何の関係もないのォ？」

晴子は、怒ったようにいった。

「ごめんなさい。色々調べて貰ってるのに。でも、麻里の失踪には関係ないとしても、麻里が子供を生んだことは事実なんだから、その相手を突きとめるということは、重要なことだと思うわ。その相手が特定できたら、麻里のこと、色々わかると思うの。正確には、麻里が、いつからいなくなったのかとか、陽子さんとトラブルがあったかどうかなど、きけるわけだから」

「そうよね」

晴子は、大きくうなずいた。そして、

「私、山川不動産の親子の血液型がどうしてもわからなかったので、捨て身でやってみたの」

と、いった。

「捨て身ってどういうこと？　危ないことなの？」

ミキは、心配そうにいった。

「そうね、スリルがあるわ。私、山川親子の息子さんの方に接近しているの。彼は、よく、『マハラジャ』というディスコに行くことがわかったので、私も、友だちと毎日のように行ってみたの。そして、少しずつ話をするようになったわ。ミキさんは知らないと思うけど、私、ディスコが好きで、踊りには自信があるの。彼とも踊ったわ。むこうも、はじめは、麻里の友だちということで、警戒してたみたいだけど、段々好意を持ってくれるようになったの」

「へえ……」

「私も、あの人は、魅力ある人だと思うようになって来たわ。それで、昨日、さりげなくきいてみたの。血液型、何型ですかって」

「そしたら？」

「O型だって」

「きゃっ！」
「でも、あの人が、麻里をどうかしたとは考えられないわ。とってもいい人なのよ」
晴子は、あわてていった。どうも、大分彼にイカレているようだった。
「大丈夫かな？」
「何が？」
「麻里の二の舞になるんじゃないかと思って」
「そんなことないわ」
「ミイラ取りがミイラになったりして」
「いいかげんにしてよ」
「ごめんね。すると、大瀬教授と、山川さんがO型ということになるわ。あ、山川不動産の社長は何型かしら？」
「A型なんだって」
ミキは、腕を組んだ。
「私は、大瀬教授の方であって欲しいと思うわ。でも……」
「でも、何？」
「山川さんて魅力あるから、彼の方かも知れない」
晴子は、急に沈んだ顔になった。
「でも彼は、独身なんでしょう？　不倫の関係じゃないのに、麻里は、どうして極秘にしたの？」
ミキは、わからないというようにいった。
「きっと、彼をすっごく愛してたからだと思うわ。彼は、赤ん坊を生むことは、絶対反対だったのに、彼女は、強引に生んでしまったんだわ。それでも、彼女は、彼を愛していたから、彼の名前を絶対にいわなかったのよ。その気持わかるような気がするわ」
「……」
ミキは、黙り込んだ。しばらくして、
「それなら、どうして、彼女、それだけ愛して生んだ彼の子供のところへ来ないのかしら？　それに、彼は、毎晩のようにディスコに来ているというけど、麻里とは一緒ではない。……やっぱり、麻里は死んでいると思うわ」

と、いった。

6

「ところで、良江さんって、何を飲んで死んだの？」
持参のババロアを食べながら、晴子がいった。
「ウイスキーよ。良江さんて、仕事が終ってから、自分の部屋で、水割りを飲むのが楽しみだったんだって」
「じゃあ、こういうことは言えないの？　彼女は、自分のウイスキーに毒が入っているのを知らずに、部屋を閉め、ゆっくりと、ウイスキーを飲んだ。そして、死んでしまった。……つまり、密室というのは、自分で閉めたというわけ」
晴子は、勢い込んでいった。
「それが違うのよ。そのウイスキーは、ご主人の良介さんが海外から買って来たもので、今までに、少しずつ飲んでいて何ともなかったものなんだって。そして、現場にあったウイスキーの瓶は、半分ほど減っていたけど、毒は入ってなかったというわ」
「そう。……では、コップとか、氷に毒が入ってたんじゃない？　それなら、やっぱり、陽子さんがあやしいわね」
晴子も考え込んだ。
「良江さんが毎晩部屋でお酒を飲んでいることを知っていたら、冷蔵庫の中に、毒入りの氷を作っておけばいいわけよね。コップのふちに、毒物の粉末を塗っておいてもいいわ。でも、一つまちがうと危ないわ。自分が間違えて使ってしまったら大変だし、赤ん坊もいることだから……」
二人が、話し疲れたとき、病室のドアをノックする音がした。
「はーい、どうぞ」
ミキは、看護婦だと思って気軽にいった。しかし、入って来たのは陽子だった。ミキはびっくりした。
「こんにちは。いかが」

「はい、有難うございます。もう大分いいみたいです。あ、この人は晴子さんです。麻里と仲の良かった東京の……」

ミキは、晴子を紹介した。

「あら、いつもあなたのことは、おききしてましたわ。麻里と仲良くして下さってたそうで有難う」

陽子は、にこにこと挨拶した。

晴子は、堅くなって頭をさげた。

しばらくは、麻里の話が続いた。

「今、誰が麻里さんとつき合っていたのか、一生懸命探しています」

「どうも有難う」

麻里の話が一通り出つくしたところで、今度は、お手伝いの良江が死んだ話になった。

正確にいうと、その話になったというより、晴子が、その話に持って行ったのだ。

晴子は、無邪気な顔で、良江が死んでいたときの様子をきいた。

「そばに、毒の入っていた薬包紙とかあったんですか？」

ミキも、息をのんで返事を待った。

「いいえ、ありません。私のきいたのでは、薬品は、農薬だそうで、部屋の中に、瓶があったということでした」

「では、農薬をウイスキーの中に入れて自殺したんでしょうか？」

晴子がいった。

「刑事さんは、そうおっしゃってました。そして、その農薬は、良江さん自身が薬局で買っていることもわかったんです」

「でもそれは……」

晴子がいいかけてやめた。

「何でしょうか？」

陽子は、じっと晴子をみつめた。

その眼がとても美しかった。

「もし、おばさんが、お花の虫を殺すのに買って来な

さいといったとしたら、良江さんが薬局に買いに行ったかも知れないわ」
「晴子さん、そんな」
ミキが、あわててとめた。晴子は、すぐ東京に帰るからいいが、自分は、ずっとここにいるので、困るのだ。
しかし、陽子は、にっこりしていった。
「そう思われるのは当然だわ。刑事さんからもいわれました。でも、私が、良江さんを殺すのだったら、うちで殺したりはしませんわ。毒の入ったカプセルを飲ませて、彼女を実家に帰すとか、もっと考えますわ、そうでしょう？」
「そうね、それはいえるわ」
晴子が、あっさりとうなずいた。
陽子も、ほっとしたようだった。
「で、赤ちゃんお元気ですか？」
晴子は、話題を変えた。
「ええ。とても」
陽子は、急ににこにこした。
「一度、見たいなあ。私、赤ん坊って好きなの、一人っ子だから。抱かしてくれません？」
「いいですよ、是非うちに来て下さい」
「じゃ、今からでもいい？」
「えっ、今日はちょっと。明日いらっしゃいよ」
「はーい、何時に行ったらいいですか？」
「お昼御飯を一緒に食べましょうか？　ミキさんはまだ外に出られないの？」
「私も行きたーい。今日きいてみます」
ミキは、いそいで答えた。
晴子一人では、なんとなく心配だった。
きっと、晴子は、陽子の家を探偵してまわるに違いないからだ。
陽子が帰ったあと、ミキは、担当医にたのんだが、まだ外出は無理ということだった。
翌日、晴子は、一人で出掛けて行った。

第八章　子供の父親

1

晴子は、無事に帰って来た。当然のことながら、ミキは、ほっとした。晴子は、わざわざ見舞いに来てくれたのに、彼女に何かあっては困るのである。

晴子は、ミキのベッドの横に椅子を持って来て座り、陽子の家に行って来た報告をした。

「陽子さんは、歓待してくれたわ。おすしをとってくれたり、コーヒーやケーキも出してくれて。麻里の東京での大学生活を色々きかせて欲しいといって、私が話すと、すぐに涙ぐむの。私、陽子さんという人を、ちょっと、誤解していたみたいだわ。麻里の継母（ままはは）だというから、麻里と仲が悪かったのだと思ってたけど、本当に仲が良かったんだと思えたわ。麻里が帰って来たら、すぐに着かえられるようにって、春ものの服をハンガーにかけてあったし、机の上の鉛筆までけずってあったの。陰膳（かげぜん）だといって、御飯もそなえて、私に、コーヒーや、おすしを出すたびに、麻里にもそなえてたわ。麻里の小さいときのアルバムも見せてくれた。赤ん坊も可愛がっていて、私と話していても、赤ん坊の方に、いつも注意をしていたわ。あの人っていい人なんだわ」

「確かに、それはその通りだと思うわ」

ミキもうなずいた。

「あなたにそう見せようと思って、今日だけそうやっ

たのではなくて、長い間知っているけど、陽子さんは、麻里を愛してたわ。そして仲が良かったし、麻里も、私が妬けるくらい、ママが、ママがといってたもの。でも彼女は、不倫をしてから、変ってしまったのかも知れないわ。誰でもそうでしょう？　恋すれば変るって」

ミキは、みかんを、晴子に渡しながらいった。

晴子も、皮をむきながら、うなずいた。

「あのね、一つだけおかしいことがあるの。今日、陽子さんが、お茶をいれているとき、私、赤ん坊を抱かせて貰って、玄関の前に立っていたの。そしたら、デパートから、荷物が届いたのよ。私がサインして受け取って、陽子さんに渡したんだけど、中身は、赤ちゃんのパジャマだったの。でも大きさが、全然合わないの。それだけじゃなくて、陽子さん、中身がどんなものか、全然知らなかったみたいなのよ。『赤ん坊に、お洋服よ、いいわね。これから春だから、丁度いいわ』といってあけたんだけど、パジャマで、びっくりしたような顔してたわ」

「それは、仕方がないんじゃない？　人からのプレゼントだったら、洋服だと思い込んでしまうこともあると思うわ」

ミキは、別に、おかしくないというように、晴子にいった。

「違うの、それが。包み紙の上に貼ってあった伝票には、御本人様って差出人のところに書いてあったわ。つまり、自宅送りという品物よ。自分が買った品物なのに中身が何かわからないっておかしいと思わない？」

「そうね、デパートの方で、間違えたんじゃないの」

「いいえ。パジャマが出てくると、彼女は、あわてて、あ、そうだわ、洋服はやめてパジャマにしたんだったわって、とりつくろうの。そして、赤ん坊にきせてみようとしたら、小さくてきられない。これは、いくら考えてもおかしいわ。誰かが送ったのに、自分の名前を書きたくないから、本人て書いたのよ」

「そうね、それはおかしいわ。じゃあ、誰が送ったの？」
「麻里じゃないかしら？」
晴子は、ミキの顔をじっとみた。
「そうだわ、麻里かもしれない。でも、それだったら、陽子夫人が、喜んで、大さわぎする筈だわ」
ミキは、わからないという顔をした。
「それでね。私、今日、これから、デパートに行って、誰があれを送ったのか、売場の人にきいて来ようと思うの」
晴子は、眼をきらきらさせていった。

2

晴子が帰って来たのは、病院の夕食が終ったあとだった。
「どう？　やっぱり麻里だった？」
ミキは、待ち兼ねたようにいった。
「それが違うの。男の人だったって？」
「えっ、男の人」
「そうなの。私、伝票に、取り扱った人の名前が、西岡と書いてあったから、その店員さんにきいたの。二十七、八歳のやさしい感じの人だったわ。その人の話では、四十歳位の人が来て、最初、赤ん坊の洋服が欲しいといったんだって。でも、大きさはよくわからなくて、色々迷った末、その店員が、他の客に、パジャマを売ったのを見て、それにしたいといい、大きさは、この位だと手で恰好をしたというの。そして、伝票を書くとき、お祝いですか、粗品ですかときいたら、いや、うちだからといって、名前を書かなかったらしいわ。そのくせ、自宅の住所を、はっきり覚えていない様子で、番地を、手帳を見てたしかめたというからおかしいわ」
「自宅だ、本人宛だといったのは、自分の名前を書きたくなかったからなのね。名前だったら、偽名も使えるけど、差出人の住所や電話番号まで作るのは、面倒

だというわけなのね」
　ミキは、推理した。
「その男性は、一体、誰なのかしら？」
「麻里の相手の男なのかもしれないわ。麻里に、あなた父親なんだから、一度くらい子供に服でも送ってやってといわれて」
「でも、年齢が四十歳くらいというと、大瀬教授は、五十歳近くに見えるし、山川不動産の社長は、もっと年上にみえるわ。息子さんの方だったら、三十歳くらいだし」
　晴子は、考え込んだ。
「でも、大瀬教授って、四十歳にみえるといえばみえるんじゃない？　男の人の年なんて、私たち若い女性には、見当がつかないでしょ」
　ミキは、教授の顔を思い浮かべた。
　しかし、晴子は、首をふった。
「それが、その男の人は、関西弁だったっていうの。私、講義受けているから知ってるけど、大瀬教授は関西弁じゃないわ。山川さん親子も」
「あ、そうか」
　ミキも、考え込んだ。しばらくたって、ミキは、突然、顔を上げた。
「わかった！　麻里のお父さんよ。良介さんが送ったんじゃない？」
「でも、良介さんは、アフリカかどこかへ行ってる筈でしょう？」
「わからないわ。この間も、そうだと思っていたら、日本にいたし……」
「そうかなあ。私は、麻里が、誰か関西にいる人にたのんだんじゃないかという気がするけど」
　晴子は、賛成しかねる顔だった。
「あ、人に頼んだというと、良介さんが、日本にいる部下の人に頼んだのかもしれないわ。陽子さんの機嫌をとるために、送っておいたということはない？」
　ミキがいったが、晴子は、考えている。
「その場合は、その頼まれた人が、自分の名前を書く

なり、良介さんの名前を書くと思うの。それより私、今、ある人のことを考えたわ。四十歳くらいで、関西弁を使うといえば……」
「誰？」
「ほら、陽子さんの不倫の相手の森信彦とかいう人よ」
「あっ、そうだわ。きっとそうよ。彼は陽子さんが喜ぶと思って、子供の洋服でも贈るといった。だから、陽子さんは、洋服だと思っていたんだわ。でも、伝票に自分の名前を書くのは困るといったら、自宅送りにしたらいいと陽子さんが知恵をつけたのだわ。彼は、男だし、赤ん坊の大きさは、よくわからない。だから、寸法違いのを送って来たんだわ」
「正解だわ。じゃ、謎がなくなってしまったわ。……でも、森という人は、一体、何をしている人かしら？」
「さあ、私も知らないわ。ただ、ハンサムで、身なりのいい男であったことだけは確かね」
二人は、喋りつかれて、また、果物を食べはじめた。
「電話帳で調べたらどうかしら？」
しばらくたって、ミキがいった。
「多分、駄目だと思うわ。森信彦なんて名前、そう珍しくないから、何人もいるはずよ。もし職業がわかっていたら、電話口に出た人に、どこどこへおつとめの森信彦さんですかときけるけど、まさか、陽子さんと不倫してる森さんですかとはきけないでしょう？」
晴子が、笑った。
「そうね。……でも、たとえ、森信彦という人が、どんな職業か、どこに住んでいるかわかっても仕方がないわね。それは、あの人たちのことで、麻里とは、関係ないもの」
「そうね。……いや、関係ないとはいえないんじゃない？」
急に、晴子が、真剣な顔をした。
「どういうこと？」
ミキは、びっくりして晴子を見た。晴子が、これほ

ど、真剣な顔をしたのは、はじめてだった。

3

「あのね。私、とても、とっぴなこと考えたの。笑わないできいてくれる？」
「もちろんよ」
「あのね。私、夏川家にいる子供は、麻里の子供じゃなくて、本当は陽子さんの子供なんじゃないかと思うの」
「えっ、陽子さんが生んだというの？」
さすがに、ミキは驚いた。
「そう、陽子さんは、不倫の相手との間に子供が出来た。しかし、自分には、夫がある。でも、最後のチャンスだから生みたかった。それで、麻里を殺して、麻里が生んだように、自分の夫をごまかしたんじゃないかと思うの」
「そんな……、陽子さんが、麻里を殺してまで、そういうことをするかしら？　それだけ生みたかったのなら、離婚をすればいいじゃないの」
ミキは、反論した。しかし、一方では、その説に同感もしていた。
「でも、相手に妻子があって、不倫の恋だったら、離婚しても、その人の妻になることは出来ないし、子供も、私生児になってしまう。幸い、夫は、アフリカにずっと行っているから、自分が妊娠したことは知らない。そこで、麻里が妊娠して子供がおろせないところまで来てるから、私たちの子供にしましょうと夫に持ちかけるのよ。夫だって、娘の将来がかかっていると思えば、承知するわ。娘からも手紙が来る。でも、その手紙は、ワープロで打たれたもので、陽子さんが書いたものなの」
「ということは、その時点で、麻里は、もう死んでいたの？」
ミキは、頭が混乱してきた。しかし、考えてみると、秋ごろから、麻里の姿が見えなくなり、ワープロで、

手紙だけが来たが、何となく、違和感を覚えたのを思い出した。

「そうよ。麻里は、陽子さんに殺されたんだわ。あなただって、女は、恋をすると、変ってしまうといったでしょう？　陽子さんは、一流商社マンの妻でいたかったし、はじめての自分の子を、法律的に自分の生んだ子として届けて育てたかった。それで、麻里を殺して、死体を隠したんだわ。お手伝いさんを郷里に帰したのも、自分が妊娠したことを悟られたくなかったためだわ。でも、お手伝いさんは、それを知ってしまった。だから、殺されたんだわ」

「怖いっ！」

ミキが、晴子にしがみついた。

「私も怖いわ。もしこの推理が本当なら、私、何も知らずに、あの家へ行って来たんだもの」

「私たち、殺されるのかしら？」

「まさか。そんなことしたら、彼女が疑われるわ」

二人は、ふるえながら顔を見合わせた。

「どうしたら、いいかしら？」

「これ以上、詮索しないで、知らない顔をしているしかないわ。陽子さんが見逃しても、相手の森という人は、不倫の恋と、子供のことがみつかると大変だから、口をふさぎにくるかもしれないわ」

「麻里が殺されたとしても、私は、陽子さんには出来ないと思うわ。森信彦がやったんだわ」

「不倫の現場を見られたのかも知れないわね」

「私、やっぱり、強引に、退院するわ。怖くてここにはいられないわ」

ミキがいった。

「そうね。私も、明日は、東京に帰ってしまうし、ミキさんを守ることは出来ないし」

と、いっている時、ドアのノブが、ぐるっと、まわった。

はっとして二人が、体をかたくしていると、入って来たのは、譲二だった。

「あーよかった。びっくりしたわ」

「はーっ」
二人の様子に、譲二は、どうしたことかときいた。
二人が、交互に、今の推理を話した。さすがに、彼も驚いたらしく、しばらく黙っていたが、
「それはあり得るね。そう考えれば、すべて、話があってくるよ」
と、静かにいった。
「ほんと？　そう思う？　やっぱりね」
ミキは、彼が同意したので、はじめて、推理があっていると確信を持った。
「何回もいうようだけど、これだけ、麻里くんが出て来ないのは、おかしいよ。彼女は、とっくに死んでいると思うよ。そして、そのことを、陽子さんは知ってるんだ。きっと」
譲二は、その端整な顔を曇らせた。
「そういえば……」
ミキが、何か思い出したように、つばを飲み込んだ。
「どうしたの？」
譲二がきく。
「この間、陽子さんの家へ行ったとき、麻里の陰膳のところに、新しい花と、おもちが供えてあったのよ。あれは、十三日だったけど、その前も、十三日には、新しい花が入っていたわ。ひょっとしたら、麻里の命日は、十三日じゃないかしら？」
「なるほどね。それに、よく、旅に出たりした人に、陰膳を供えるとはいうけど、普通は、そんなことしないんじゃないかな。彼女が東京の大学に行っていた間も、陰膳をやっていた？」
譲二がきいた。
「いいえ。やってなかったわ。今までは」
そこで、はじめて晴子が、口をはさんだ。
「もし、陰膳をするのなら、ご主人にも、陰膳を供えるはずよ。遠くに行っていて、心配なんだから」
「そうだね」
三人は、顔をみつめあった。

4

夏川家の赤ん坊は、麻里が生んだのでなくて、陽子の子だと考えると、すべての謎が解けて来る。

「でも、これが本当だとしたら、恐ろしいことね。麻里は、不倫の恋もしてないし、まして妊娠なんて、全然してなかったことになるんだもの」

晴子が、蒼ざめた顔でいった。

「やっぱり彼女は、私たちの知ってたとおりの、清潔でやさしい女の子だったんだわ」

ミキは、麻里の名誉がきずつけられたことに、憤慨しながらいった。

「でも、それだったら、麻里くんは、一体、いつ、どこで死んだんだろうね。東京か、京都か……」

譲二が、外を気にしながら、小声でいった。

「さっきもいったとおり、十三日が命日なのは間違いないと思うわ。多分、九月か十月の」

ミキが考えながらいった。

「だって陽子さんが生んだとしてお腹が大きくなって、隠せなくなるのは、六カ月か七カ月目くらいでしょう？　十二月か一月に生まれたとしたら。九月くらいで、麻里にすりかわらないと仕方がないと思うわ。今考えると、夏休みの終りに、麻里が、浮かぬ顔をしていたの。あれはきっと、陽子さんのお腹が大きいのに、麻里が気がついたんだと思うの。陽子さんは、お風呂に入っている麻里を、電話がかかったので呼びに行って、それで、お腹が大きいのに気がついたといってたけど、それはそっくり、陽子さんのことだったんじゃないかしら？」

「なるほど。すると、やっぱり、九月十三日あたりが正解だね」

譲二がいった。

「じゃあ、場所は京都かしら？　東京だとしたら、その時、陽子さんが、上京していたということになるわ」

晴子が、メモ用紙に九月十三日と書いて疑問符をつけた。
「確か、東京のマンションの管理人が、麻里が東京に帰って来たらしくて、お土産を貰ったのが、九月の十七日だったといってたわ。でも、本人に会ったんじゃなくて、手紙がついて管理人室の窓から入れてあったというのよ。それからあと、管理人は、麻里を見ていないというから、あの土産は、陽子さんが持って行ったものではないかしら？」
「つまり、その時には、もう麻里くんは、京都で死んでいて、そのあと、あわてて陽子さんが、彼女が東京へ帰ったように見せかけたわけだね？」
譲二がいった。
「ええ。だから、麻里が死んだ場所は、やっぱり京都だわ。彼女は、九月十日頃、そろそろ、東京に帰らないとといってたから、その帰る直前に、事件はおこったんだわ」
ミキは、暗い顔でいった。
「東京へ帰る直前に、陽子さんと、いさかいが起こったのね。麻里は、潔癖だから、陽子さんの不倫が許せなかったのだわ。お父さんに、手紙を書くといったのかもしれないわ。陽子さんも、六カ月位になっていて、今さら、中絶するわけにもいかず、とっさに麻里が生んだことにしようと思いついたのだわ」
そういうと晴子は、立って行って、ドアをあけ、人がきいてないか確かめた。
「大丈夫。誰もいないわ」
譲二は、じっと考え込んでいる。
「どうしたの、ジョージ？」
ミキが、彼の手を引っぱった。
「麻里くんの死体は、一体、どこにあるのかと思って……」
死体というなまなましい言葉が出て来たので、一瞬みんなシーンとした。
「あの家の庭かしら？」
しばらくたって、ミキがいった。

「どんな殺し方をしたんだろうね？」
譲二が痛ましそうにいった。
「毒物だと思うわ。だって、お手伝いの良江さんも、毒で死んでるんでしょう？　きっと、同じ方法だと思うわ」
晴子がいった。
「良江さんは、農薬で死んだんだよ。パラコートか何かの。あれは、もだえ苦しんで、なかなか死ねないというから、もしその方法だったら可哀そうだなあ。陽子さんが、そんなに苦しむ彼女を見ていられるかな？　もっと、簡単に死ぬ方法にするんじゃない？」
譲二は、自分が毒を飲み込んだような苦しげな顔でいった。
「例えば、どんな方法？」
「首を締めるとか、花びんで殴り殺すとか……、他に何かあるかな？」
譲二も、そこまでは、考えつかないようだった。

5

時間が遅くなったので、晴子は、別れを告げた。
「東京へ帰るけど、ミッキー、早く元気になってね。それから、殺されないように気をつけて」
さすがに、晴子は、しんみりといった。
「ええ。大丈夫よ。また、手紙書くわ」
ミキは、元気にいった。
晴子が帰ったあと、しばらく譲二は残っていたが、
「ねえ。退院どうする？　明日の昼、退院するんだったら、僕、休んで来るけど」
と、いった。
「そうしたいわ。本当は、今晩にも帰りたいのだけど、そういうわけにもいかないから、今晩は、ここで頑張るわ」
譲二は、ドアのノブのところへ行ってみていたが、
「ここ、鍵がかからないんだね、ヤバいなあ。ちょっ

と待っててよ。戸締り考えるから」
といって出て行った。やがて戻って来た彼は、金槌と、釘と、ロープを持って来た。
「すぐそこの金物屋で買って来たよ」
彼は、ドアの横の柱に、釘を二本打ちつけ、ノブと、釘を、ロープでしばった。
「ほら、こうしたら、外からは、絶対入れないよ。もし、看護婦さんが来たら、誰ときいてから、中に入れる方がいい」
「有難う。ジョージ」
ミキは、彼にとびついて、頬にキスをした。いつもは、そこで、彼の方が逃げ腰になるのだが、今日は違った。彼は、ミキをしっかりと抱きとめ、はじめて、熱のこもったキスを返した。
やがて腕をはなした譲二は、にっこり笑って、
「じゃあ、明日ね」
というと、ドアの外に出た。
ミキは、幸せだった。
〈ジョージは、私を愛してくれているんだわ〉
その夜、十時頃、消灯したミキの部屋のノブが、まわされ、誰かが、ドアを、密かにあけようとする音がした。
「誰？」
しかし、返事はない。
ドアは、強引に押しあけられようとする。
ミキは、そばに行って、もう一度、
「誰ですか？　看護婦さん？」
と、きいた。返事はなかった。第一、この時間に、看護婦がまわってくる筈がない。
ミキは、冷汗が流れた。
「無理にあけないで下さい。看護婦さんを呼びますよ」
すると、外の人物は、あわてて、ノブを放し、立ち去る気配がした。
〈あけてみようか？　でも、姿を見たら、よけい危ない。静かにしておこう〉

好奇心の強いミキにしては珍しく、踏みとどまった。それがよかった。相手は、一旦、立ち去るふりをして、再び、戻って来ていたのだ。

もう大丈夫と、ミキが、ベッドに戻ったとき、ドアのところから、密やかに立ち去る気配がした。

ミキは、急に恐ろしくなった。

〈一体、誰なのだろう？　陽子さんなのかしら〉

ほとんどねむれない一夜があけると、ミキは、すぐに、譲二に電話した。

「お願い！　早く来て。夜、誰か来たのよ。怖いわ」

「わかった。すぐ行く」

朝食のときに、譲二が来てくれた。

「その食事やめておく方がいいよ。廊下においてある時、毒物を入れることは、簡単だから」

「はい。そうします」

ミキは、神妙に答えた。

食事には、一つ一つ名前がついているから、廊下においてあるとき、毒物を入れるのは誰でもできる。

「その代り、いなりずし買って来たから食べる？」

「ええ。うれしいわ」

譲二は、ベッドのテーブルを引き寄せて、その上に、いなりずしを並べてくれた。

「お茶も持って来たよ」

彼は、魔法瓶に入れたお茶を注いでくれた。ミキは、涙が出るほどうれしかった。

彼は、ミキが、食事を終ると、すぐに、医局の方に、退院の手続きに行った。

担当の医者がやって来て、脚を見て、

「まあ、大丈夫でしょう。あまり無理をしないように」

といって、退院の許可が出た。

ミキは、やっと、家に帰ることが出来た。

「ねえ、陽子さんに、電話しといた方がいいよ。入院費は、むこうが払ってくれるんだから」

「はい。そうします」

ミキは、椅子に腰かけて、陽子へ電話した。退院し

たことをいうと、さすがに陽子は、驚いた様子をみせたが、それでも、よかったと、いってくれた。

6

退院してからも家で静養し、すっかりよくなったミキは、また、冒険をすることになった。

陽子が、泊りがけで、良江の実家の方へ行くことがわかったので、その間に、夏川家の庭に、麻里の遺体が埋めてないか、探検しようというのである。

譲二は、反対だったが、ミキが、どうしてもというので、しぶしぶ承知した。

「泊りがけで行くというのは、どうして知ったの？」

「陽子さんがいっていたし、良江さんの家の方にもきあわせたのよ。そしたら、三七日の法要をするということだったわ」

「でも、罠じゃないかな。普通は、忌明けの三十五日とか、四十九日に行くもんだよ。不意に帰って来たらどうする？」

「あなたと一緒だったら、怖くないわ」

「でも、僕だってスーパーマンじゃないからね」

「大丈夫よ。何時までに帰らなかったら、夏川家だから、警察へ連絡してほしいって、書き置きかいてくるから」

そして、その当日になった。

二人は、夏川家の玄関に立って、チャイムを鳴らした。誰も出て来ない。

「それでも、この間のように、中にいる場合もあるから、気をつけよう」

譲二が、ささやいた。

二人は裏へまわって、庭から入って行った。ガラス戸がきちんと閉まって、洗濯物もない。

「大丈夫みたいだわ。どんなところを探したらいいのかしら？　死体を埋めたのが、最近だったら、土が柔らかくて、盛り上っているところを探せばいいんだけど、もう半年も前というと……」

「そうだね、注意深く見て行こう」
庭には、池があり、築山があり、チューリップの花壇がある。
「池の中に入れて、ピラニアか何かに食べさせたのかしら？」
ミキが、こわごわ池の中をのぞき込んだ。
「ピラニアはいないよ。それに、もし毒殺したのだとしたら、そんなことしたら、魚も死んでしまうよ」
「本当だわ」
二人は庭草を踏みわけて、中へ進んだ。
「あっ、あそこじゃない？　土が盛り上ってるーっ」
ミキの指さしたのは、土饅頭になったところだった。
「掘ってみようか。スコップは持って来たんだけど」
譲二が、汐干狩りに使うようなスコップを、二つ出して、一つをミキに渡した。
「随分、大きな音がするわ。大丈夫かしら？」
「もうちょっとだよ」
しかし、中は、燃えないゴミの瓶とか、缶が山のように入っているだけだった。
「なあんだ。ゴミを入れた場所なんだ。ここじゃないよ」
譲二がいったとき、テラスのサッシュ戸が、がらっとあいて、
「おーい。そこで何してるんだ？」
と、いう声がした。
二人は、びくっとした。
庭下駄の音がして、白いセーターの男が近づいてくる。
「逃げようっ。ジョージ」
「逃げられないよ。行きどまりだから」
それでも、二人が、必死で少しだけ逃げたとき、男が追いついた。
「何してるんだ？　人の庭で」
その男の顔を見たミキが叫んだ。
「あっ、森信彦さん！　そうでしょう？」

それは、いつか、この家に来たのを見かけたあの男だった。男の方は、突然、自分の名前をいわれて、うろたえた。
「何だ、君は？」
「知ってる筈だわ。私、この間、ここへ来たとき、ブレスレットを落したんです。それで、チャイムを押したけど、応答がないので、入らせて頂いたんですわ」
「ミキというのは君か？」
「はい。あなたは陽子さんの恋人でしょう？　私、知ってるわ」
譲二が一生懸命、ミキの袖をひっぱったが、ミキは居直ってしまった。
「そんなもんじゃない。陽子に、いや、陽子さんに留守番を頼まれたものだ。この家は留守なんだから、早く帰りなさい。断りなく人の家に入り込むと、家宅侵入罪だよ」
「いいわ、警察よんでも。私は、麻里の親友なんですもの。彼女が生きていた間は、いつも、自由にここに出入りしてたわ。いけないの」
「でも、今は駄目だよ。麻里ちゃんは……」
「死んでしまったから」
男は、ぎくっとした。
「もう帰ろうよ。ブレスレットがあったからいいじゃないか」
いつのまにはずしたのか、譲二は、自分のブレスレットを見せていった。
「早く帰りなさい」
二人は、急いで外へ出た。

第九章　不倫の相手

1

ミキと譲二は、外へ出てから、喫茶店へ入った。
「あー、びっくりしたわ」
「逃げることが出来てよかったね。でも、僕たちが、庭をうろついたことは、すぐに、陽子さんに伝わるだろうね。ひょっとしたら、あの男がいたのだから、陽子さんも、家の中にいたのかもしれないよ。逃げるとき、電気のメーターを見たら、ぐるぐる回っていたもの」
「どうしよう？」
「仕方がないさ。僕たち二人とも殺すのは大変だよ。別々のところにいるんだから。一人が殺されたら、もう一人が喋ると思うから、絶対大丈夫だと思うけどね」
譲二は、たのもしくいった。
「良介おじさんは、何も知らないのかしら？　陽子さんの浮気のこと。彼は、あの赤ん坊が、自分の孫だと思っているから、それを育ててくれている陽子さんを離婚できないのだと思うわ。麻里と二代もお世話になってるのだし」
ミキは、カレーを食べながらいった。
「でも、こっちが、わざわざバラすことないんじゃないかな。良介さんにも、不倫の相手がいる上に、陽子さんに子供を見て貰ってると思うから、遠慮があるんだし、陽子さんは、夫以外の男性がいて子供まで生ん

だことで、ひけ目があるからうまくいってるんだと思うけど。世間には、それでバランスのとれてる夫婦って、結構いるんじゃない？」

譲二は、大人びた言い方をした。

「それだけならいいわ。でも、そのため、二人も人を殺してるのよ。特に、麻里を殺したのは許せないわ」

ミキは、むきになっていった。

「でも、それは証拠のないことだからね、何ともいえないよ。死体が出るとかして、それがはっきりしたら、その時は、警察に言うべきだと思うけど」

譲二は、冷静だった。

「あの森信彦って一体何をしている人なのかしら？」

「わからない。陽子さんの家を出るところをみかけたら、尾けてみるしかないね。それとも、陽子さんにきいてみる？　どんな人ですかって。不倫の証拠があるわけじゃないから、意外と喋るんじゃないかな。恋人のことは話したいものだし……」

「ジョージも私のこと話したい？」

ミキは、譲二の顔をのぞき込んだ。

「ああ、友だちにみんないってるよ。可愛い女の子だって」

譲二は、けろっといった。

「そうね、私だって、晴子さんに、ジョージのことばかり喋るっていわれたもの」

コーヒーを飲んで、二人は、喫茶店においてあるゲームをしてから外へ出た。

「足、大丈夫？」

「ええ。もうすっかりいいわ、走るとちょっと痛いけど」

「あの森信彦って、もう帰ったかな？　僕たちに姿を見られたのでヤバいと思って」

「暗くなってからにするんじゃない？　まだいるかもよ」

「行ってみようか？」

「ええ」

二人は、再び、夏川家の前に行った。

相変らず、家の中はしんとしている。ところが、突然、赤ん坊の泣き声がした。
「やっぱり、陽子さんはいるのよ。赤ん坊を置いて行くはずはないわ」
「森の方は？」
「さあ、まだいるんじゃない？」
二人は、夏川家の向い側の公園に身をひそめた。
「ここだと、むこうからはわからないよ」
二人は、一時間ほど、そこで張り込みを続けた。
二人で喋っているので、待っているのも苦痛ではない。
一時間二十分ほどしたとき、中から森が出て来た。
彼は、あたりを注意深くうかがってから、足早に歩き出した。

2

二人は、一定の距離をおいて、尾けて行く。彼は、大通りへ出ると、タクシーを拾った。二人も、タクシーで追いかける。
「前の車を尾けて」
ミキの言葉に、運転手は、にやにやして、
「興信所の方ですか？」
と、いった。
「いえ、警察よ。私、婦人警官なの」
ミキが、すまして答えた。
「それはどうも」
運転手は、急に真剣な顔になって、前の車を追跡しはじめた。
彼は、四条でおりて、また歩き出した。
二人も、タクシーを捨てて尾けて行った。
途中で、彼は、五十くらいの男とすれちがい、あれっというように立ちどまった。
むこうの男もふりかえり、戻って来た。
「やあ、お久しぶりです」
「元気？」

「はい、先生も？」
「ああ。まあなんとかね。では、がんばってよ」
「また、いつか伺います」
「待ってるよ」
それだけ挨拶すると、二人は別れた。
「あっ、あれは、うちの大学の教授だ」
譲二が、驚いたようにいった。
「教授と顔みしりだとは驚いたな、ちょっときいてみよう」
譲二は、教授のそばへ行って挨拶し、何か喋っている。
ミキは、少しはなれて森が歩いていく先を目で追った。
彼は、デパートに入った。
しばらくすると、譲二が戻って来ていった。
「彼は、教授の教え子で、今、洛北大学の助教授なんだって」
「へえ。そういえば、陽子さんも、洛北大学の研究室に勤めていたことがあるってきいたわ」
「森さんは、どこへ行った？」
「デパートよ。何か買物するんだと思うわ」
「じゃあ、尾けたって仕方がないね。身元がわかったから、すぐに家もわかると思うし」
「彼には、妻子がいるのかしら？」
「さあ。洛北大学に行っている高校時代の友人にきいてみよう」
二人は、そこで別れた。
その夜、譲二からミキに電話がかかった。
「森助教授のことわかったよ。家は堀川三条のマンションで、家には、奥さんと子供が一人いるって。奥さんは、洛北大学の文学部長の石塚教授の娘さんなんだって」
「じゃあ、不倫がバレたら大変ね」
「だから、陽子さんが、必死になってるんだろうね」
譲二は、ため息をついた。
「麻里のお父さんに、手紙書いたらどうかしら？　娘が陽子さんに殺されたのかもしれないというと、やっ

ぱり、あわてるんじゃない？」
「やめた方がいいよ。それより、良介さんの彼女に、このことを教えたら、一生懸命調べるんじゃないかな。うまくいくと、良介さんと陽子さんは離婚して、自分が正式の妻になれるんだから」
「あなたも、意外にワルね」
「アハハ。でも麻里くんさえ死んでなかったら、あの人たちのことどうでもいいけど、やっぱり、麻里くんが殺されたのなら、犯人をつきとめたいからね。僕たちの力だけじゃこれ以上、何も出来ないし、警察だって、死体でも出ない限り、相手にしてくれないと思うんだ」
譲二は、意外に真剣にいった。
「でも、あの女の人、アフリカに行ってるんじゃないかしら？　日本にいるといいけど」
「一度、桃山のマンションを訪ねてみたら？」
「そうするわ」
ミキは、うなずいた。

翌日、ミキが、彼女の住んでいるマンションを訪ねようと、京阪電車を丹波橋でおりて坂を上っていくと、途中で、上からおりてくる女性がいる。みると、それが、彼女だった。
「あら、ミキさんでしょう？　どこへいらっしゃるの？　私、丁度、あなたを訪ねて行こうと思ったところなの」
と彼女はいった。
「私も、あなたを訪ねて来たんです」
「じゃあ、どこかで、お昼を食べましょう」
彼女は、そういうと、もう一度、マンションに戻り、自動車を運転して来た。
「南座のあたりへ行きましょう」
彼女は、巧みに運転して、四条通りへむかった。

3

「日本に帰ってらしたんですか？」

ミキがきくと、彼女は、
「あら、私は、あのあとずっと日本にいます。良介さんに頼まれたことがあるので気になっていたんですけど」
と、いった。
「何ですか？　たのまれたことって？」
「麻里さんのことなの。良介さんは、麻里さんのことが心配で、一体、どうなっているのか調べて欲しい。できればミキさんにも協力していただいてっていって」
「私もそのことで……」
ミキは、ほっとしていた。
車を駐車場へ預けると、二人は、南座のとなりの店へ入り、ちらし寿司をとった。
「良介さんは、麻里さんに手紙を出しても返事が来ないし、アメリカへ行くというワープロの手紙が来たきりなので、外務省にたのんで、調べて貰ったけど、麻里さんは、出国していないことがわかったというの。それで、とても心配して、あと一カ月で、日本に帰国できるように運動してるけど、その前に、少し調べておいてくれないかって」
彼女も、心配で仕方がないというような顔でいった。
〈彼女は良介さんを愛してるんだわ。だから、麻里のことも人ごとのように思えないのだわ〉
ミキは、そこで、今までに、譲二と二人で調べたことを、すべて打ち明けた。
彼女は、言葉も出ないという感じできいていたが、
「いろいろ打ち明けて下さって有難う。私は、はっきりいって、良介さんを愛しているわ。でも、陽子さんをおしのけて結婚したいとは思っていませんでした。彼も、陽子さんには、なさぬ仲の麻里を育てて貰ったし、今度も、麻里の不始末のカバーをして貰って、感謝しているとおっしゃってましたから。でも、麻里さんを殺したのだったら、許せませんわ。良介さんも同じだと思います。それに、赤ん坊が、麻里さんの子供でないとしたら、よけい……」

と、いった。
「でも、このあとどうしたらいいかわからないのです。私たちでは」
ミキは、彼女に、好意を持ちはじめていた。外国で仕事をしていただけあって、さっぱりしているし、知性もある。
「あの、それで、東京の麻里さんのお部屋は、そのままになっているんでしょうか？」
しばらく考えたあと、彼女はきいた。
「多分、そうだと思います。麻里がいないのに引き払ったりしたら、おかしいと思われるから、おいてあるんじゃないでしょうか？」
ミキは、考えながらいった。
「では、私、上京して調べてみますわ。良介さんから、麻里さんの部屋のカギを預かっているのです」
「えっ、カギがあるんですか？」
ミキは、びっくりした。
「ですから、ゆっくりと調べてみたいと思うんです。調べても、何もわからないと思いますけど」
「じゃあ、あの部屋にあるワープロで、陽子さんに手紙を書いたらどうでしょうか？　麻里が、生きて書いているようにみせて。もし、麻里が死んでいることを知っていれば、これは、麻里が書いたのじゃないって思うでしょうし、麻里が生きているのなら、麻里が書いたものだと思うんじゃないでしょうか？」
ミキが思いついていうと、彼女はうれしそうな顔を輝かせた。
「いいアイディアだわ、そうしましょう。でも、私には、麻里さんがどんな手紙を書くかわからないので、ミキさんが、下書きを書いて下さる？」
「ええ、いいですよ」
寿司を食べてから、ミキは、一生懸命、文章を考えた。

ママ　元気ですか？
赤ん坊も大きくなったでしょうね。
三月三十一日の夕方四時に、空港に着きます。そのと

き、赤ん坊を連れて来て下さい。一目見たいのです。家には帰りません。

では

麻里

下書きが出来ると、ミキは、

「でも、ワープロ打てるんですか？」

と、きいた。

「ええ、それは大丈夫。プロに近いと思うわ。でも、みんなくせがあるから、麻里さんの手紙を参考に見せて欲しいの」

と、いった。

ミキは、彼女と連れ立って家に帰り、手紙を見せた。

「わかったわ。じゃ、横書きにしましょう。でも、あなたが書いたと思われないように、京都にいることを印象づけておいてね」

「じゃあ」

二人は、すっかり共犯者になった。

四日後、ミキに、陽子から電話がかかって来た。ミキは、毎日、病院に通い、陽子にも傷の経過を話していた。

「大変よ。ミキさん」

陽子は、息を切らせてかけて来た。

「どうしたんですか？」

「麻里から、手紙が来たの」

「えっ、本当ですか？　何て書いてあったんですか？」

ミキは、驚いてみせた。

陽子が、文面をよみあげた。

「それで、あなたも行って欲しいの。もちろん、私も行くわ」

「でも、私のところには手紙は来ませんでしたけど」

ミキは、わざと不満そうにいった。

「とにかく、おねがいね。明日だから」

陽子は、そそくさと電話を切った。

翌日、ミキは、大阪空港に行った。なんだか本当に、麻里が帰ってくるような気がしていた。

四時になった。

第十章　甘い夜

1

ミキは、じっと到着出口から吐き出されてくる人たちをみつめた。

〈本当に麻里が出て来たらいいのに〉

出てくる筈はないのに、ミキは、奇蹟を信じた。

しかし、当然のことながら奇蹟はおこらなかった。

陽子夫人の方を見ると、彼女は赤ん坊を抱き、すっかり人が出てしまった出口を、のり出すようにして見ている。

〈やっぱり、彼女は、麻里を待っていたのだろうか？〉

もし、陽子が麻里を殺してないのだったら、今日の罠は、罪なことである。

「やっぱり、帰って来なかったですね」

ミキは、陽子にいった。

「帰ってくるような気がしたのに」

陽子は、沈んだ声でいった。目尻に涙がつたわっている。さりげなくそれを手で払いのけると、陽子は、つとめて明るい声でいった。

「どうも有難う。ミキさん、お茶でも飲みましょうか？」

「はい」

二人は、空港二階の喫茶室へ入った。

「フルーツパフェ」

と、年に似合わないものを注文してから、陽子は、ミキと目が合うと、

「麻里が好きだったの。今日帰って来たら、ここで、一緒に食べようと思っていたのだけど」

と、いった。

〈私は、この人を麻里を殺した犯人だと疑っているけど、間違っていたかもしれない。陽子さんは、本当に麻里を愛していたんだわ〉

ミキは、自分もフルーツパフェを注文しながら思った。

「私ね、警察に届けようと思うの。やっぱりこれだけ麻里が帰って来ないのは、単なる恋愛問題だけじゃないと思うのよ。でも、手紙が来たから、もしやと思ってここへ来たのだけど、この手紙は、麻里が書いたんじゃないような気がするの」

陽子は、決心したようにいった。

ミキは、陽子は絶対に警察には届けないだろうと思っていたので、びっくりした。

陽子は続けた。

「この手紙を、警察に届けて誰が書いたのか調べて貰おうと思うの。その人は、きっと麻里がどうしたのか知っている人なんだわ」

「えっ、それは……」

ミキは、言葉につまってしまった。

そんなことをされては困るのだ。手紙は陽子の反応をみるため、東京の麻里の部屋から、良介の恋人の林千絵がワープロで打って送ったものなのである。それを警察に証拠品として出されてしまっては困る。彼女の指紋がついているかも知れないのである。

でも、やめてとはいえない。

「私、本当に麻里から来た手紙かどうか疑っていたから、前に来た手紙と、ワープロの特徴を調べてみたの。そしたら、同じ機種で、同じクセがあることがわかったわ。ということは、これを書いた人は、麻里と違っても、東京の麻里の部屋に出入り出来る人だということになるわ。つまり、カギを持っているということに

なるでしょう？　麻里の部屋のカギは、電子ロックで、複製は出来ないし、持っているのは、私と、麻里と良介の三人なの。管理人も一本持っているけど電話できいたら彼はあけてないといったわ。だから、麻里から手に入れるより仕方がないでしょう？」

「そうですね」

ミキは、上目づかいに陽子を見た。

〈もし陽子さんが麻里を殺したのなら、カギは彼女が二本持っている。すると、あとの一本は、夫の良介さんしか持っていないので、手紙を出したのが、良介さんの恋人ということが見当つくのではないだろうか？〉

手紙を出したのはまずかったと、ミキは不安になって来た。

2

その日の夜、ミキは、林千絵と会っていた。

ミキの話をきき終ると、彼女は、

「大丈夫よ。ずっと手袋をはめていたから、指紋はついてないと思うわ。それに、部屋に入るときは、夜にして、絶対人に見られないように気をつけたから」

と、落着いていった。

なかなかしたたかな女性だと、ミキは彼女を見直す気持になった。

「でも、麻里の部屋でワープロを打っていたときは、あかりをつけて、一時間とか二時間とかいたわけでしょう？　そのとき、誰かがあかりがついているのを見ておかしく思ったんじゃないでしょうか？」

ミキは、アメリカンを注文してからいった。千絵は、にっこり笑った。

「あの部屋でワープロは打たなかったわ」

「えっ」

「あのワープロを持って帰って、ホテルで、ゆっくりと打ったのよ」

「それで、もう一回、返しに行ったんですか？」

「いいえ、京都に持って帰って来たわ」
「えーっ」
ミキは、彼女の大胆さに驚いた。
「でもね、これで陽子さんが、麻里さんが生きているようにはみせられないわ。ワープロを押収してしまったんですもの」
「陽子さんは、警察に調べて貰うといっていましたわ。ワープロがなくなっていたら、大さわぎすると思いますわ」
ミキは、胸がどきどきした。
「いいじゃないの。誰が持っていったかわからないはずだわ。陽子さんが、麻里さんを殺してたら、麻里さん以外の人物が持っていったとわかる筈だけど、そうはいえないでしょう？　一体誰が持って行ったのかと、不安になってくる筈だわ。まず、ミキさん、あなたが疑われるけど、あなたは京都にいたし、そんなことしそうにない。そこで、どんどん、ワープロを使って手紙を送りつけて心理的圧迫を与えるのよ。今度は、この前のような無難な文章じゃなくて、もっと、陽子さんがおびえるような内容を書くの」
彼女は楽しそうにいった。
「でも、そんなことをしたら、しまいに警察にみつかるんじゃないでしょうか？」
ミキは、心配そうにいった。
「わかってもいいわ。だって、私は、麻里さんを殺していないし、カギを盗んだわけでもないからいいんじゃない？　ミキさんは、陽子さんが、麻里さんを可愛がっていたから好感を持っていると思うけど、彼女はしたたかなのよ。もうそろそろ警察に届けないといくらなんでもおかしく思われる。それで、タイミングを狙っていたんだわ。そこへ、手紙が来たので、それを逆手にとって、警察へ届けることにしたんだわ」
ミキは、二人の女の争いのすさまじさに呆然としていた。
「多分、陽子さんは、あなたのことを知っているんですわ」

ミキは、ぽつんといった。彼女は、
「そうかも知れないわね」
といってから、遠くをみつめ、
「でも、私は、良介さんの奥さんになる気はないわ」
と、いった。
二、三日たって、京都府警の刑事が二人、ミキにも話をききにきた。
「届出があったので、夏川麻里さんの居所を調べているのです。ただの家出だったら手がまわらないのですが、死んでいるかもしれないといわれるので放っておくことも出来なくてね」
ミキは、確かに、これだけ消息がつかめないのはおかしいので、自分も、東京まで行って、麻里の友だちにきいてまわったのだといった。
「東京へ行ったんですか？　それはいつです？」
東京ときくと、刑事は顔色を動かした。ミキが、ワープロで手紙を出したのかもしれないと思ったようだった。
ミキは、自分が東京に行ったのは、ずっと前であること。そして、麻里の友人の晴子たちにも協力して貰ったことを話した。
「そのとき、夏川麻里さんの部屋に入ったんですか？」
眼鏡をかけた真面目そうな刑事がいった。
「ええ。そのときは、陽子夫人の了解をもらって、管理人にカギを開けてもらいました。だから、合鍵なんかは作っていません」
ミキは先まわりしていった。
刑事は、そのあとしばらく話をきいて帰って行った。
ミキは、よほど、陽子さんが、麻里を殺したのではないかと思うので調べて欲しいと言おうと思ったが、やめにした。刑事も、義理でききに来ているような感じだったからである。
アフリカにいる良介からは、「色々、夏川家のためにご心配をかけて申しわけないと思っています。ご協力下さって有難う」という意味の絵はがきが送られて

来た。

3

林千絵から電話がかかって来たのは丁度、葉書が来た日だった。

ミキが、葉書のことをいうと、彼女は、

「ああ、彼には手紙を出しといたの」

と、軽くうけながし、

「また、陽子さんに手紙書いて出したのよ。きいてくれる？」

と、いった。

「ええっ、また手紙出したんですかァ？」

ミキは驚いた。

「わざわざ東京から出したのよ。えーとね、

ママへ

私は、京都の家のまわりをさまよっています。淋しくて辛くてたまりません。

ママは私を愛してくれていたと思ったのに、あれは嘘だったのでしょうか。

私の潔白を証明して下さい。

私は、いつもママを見ています。

と書いたのよ。どう？」

「どうって、ユーレイが手紙書くわけないし、変に思うんじゃないでしょうか。陽子さんが麻里を殺したのだとしたら、一笑に付すと思いますわ」

ミキは、その手紙が警察にとどけられると、今度こそ、彼女が捕まるのではないかと心配だった。千絵はミキの心がわかったように、

「陽子さんは、この手紙は届けないと思うわ。警察に届けたのも、仕方なく届けたわけだし、黙殺すると思うの。でも、彼女が殺していたのなら、やっぱり、この手紙は、心理的な効果があると思うわ」

と、いった。

「そうですね」
といったが、ミキは、段々、彼女に同調できなくなっていた。
電話を切ったあと、すぐにまた電話がかかって来た。
「ミッキー、元気？」
それは、譲二だった。ミキは、現金に明るい声を出した。
「どうしてるのォ。そっちこそ」
「アルバイトに忙しかったんだけど、やっと終ったよ。おごるから食事しない」
「わっ、うれしい」
二人は、白川通りで会った。白川通りは、東京の六本木にあたる若者の街である。
「ステーキでも食べようか？」
「ええ、すてき」
「シャレるんじゃないよ」
二人は席に着くと、ゆっくりとメニューを見てから、大きなステーキを注文した。
「焼き具合はどうしましょうか？」
「レア」
ミキはすましていった。本当は、ウエルダンがいいのだが、レアの方がイキだと思ったのだ。
「じゃ、僕も」
二人は、すましてナプキンをとった。
ミキは、幸せだと思った。こうして好きな譲二と一緒だったら、事件のことはもう考えたくないと思ったが、それでも、やっぱり、報告しないではいられなかった。
彼には、今まで、ずっと協力して貰っているのだ。
食事が半分ほどすんだ時、ミキは、陽子と空港に行ったことや、陽子が、警察に届けたこと、そして、林千絵のことを一気に喋った。うなずきながらじっときいていた譲二は、
「良介さんも悩んでいるだろうなあ」
と、いった。
「だって、私たちや、晴子さん、それに、千絵さんが、

これだけ色々しているのに、彼は何もしていないのよ。いい気なものだわ」

ミキは、不満そうにいった。

「だから、よけい辛いんじゃないかな。自分の娘が殺されたらしい、その犯人は妻かもしれない、そして赤ん坊は、誰の子供かわからないのに、自分は遠く離れていて何もすることが出来ないんだから……」

譲二は、ため息をついた。

「でも、良介さんだって浮気をしてるわ」

「しかし、男は、誰だって、浮気ぐらいするんじゃないかな。何年も外国に行っていたら、仕方がないと思うよ」

「嫌よ、そんなの。不潔だわ。ジョージも浮気するのォ？」

ミキは、むきになっていった。

「大きい声出すなよ。ボーイがみてるじゃないか。とにかく、麻里くんがどうしたのかわかればいいんだけどねえ」

デザートが運ばれて来たので、二人は、話をやめた。〈折角、ジョージがアルバイトのお金で食事をおごってくれたのに、変なムードになってしまって……〉

ミキは、心配になってきた。

しかし、譲二の方は、食事がすむと、にこにこして、

「ちょっとだけディスコに行こうよ。今日は遊びたいんだ」

と、いった。

「ええ、私も」

二人は、そのあと、ディスコに行き、すっかり盛り上った。

「ねえ、ミッキー」

「なに」

譲二はそういうと、ミキの唇に素早くキスをした。

「ねえ、僕の部屋来ない？」

「でもォ」

「いいだろう？　恋人なんだから」

「本当？　本当に恋人なの、私たち」

「当り前じゃないか、恋人じゃなくて何なの？」
「友だちだとか」
「友だちでいいの。ミッキーはそういう気なのか」
「違うわ」

ミキはあわてていった。
「出ようか」
ミキは黙って彼のあとに続いた。
二人は、タクシーに乗って譲二の家についた。

第十一章　埋められた死体

1

「あら、いい家具買ったのね」
ミキは、譲二の家に着くと、部屋の中を見まわしていった。
彼の部屋には、彼の誕生日に来て以来だった。白いベッドに水色のベッドカバーがかかり、白いテーブルと椅子二つが、この前来たときから増えていた。
「ああ、アルバイトのお金で買ったんだ。君が来てくれた時にいいと思って」
白いテーブルには、レースが敷いてあって、桜草の鉢植えがおいてある。椅子には、小さなクッションがおいてあった。
「女の子の部屋みたい。このクッションとレースのテーブル掛けもジョージが買ったの？」
「え、ああ……」
譲二は、まばたきをした。
「あ、怪しいっ、女の子に貰ったのでしょう？」
ミキは、胸がかっかとして来た。
「アルバイト先で知り合った女子大生がくれたんだよ」
「そんな。ひどいわ」
「彼女とは何でもないよ」
「でも、その女の子は、きっと、ジョージが好きなんだわ。何という名前？」

「えーと、恵子だったかな」
譲二は、困ったようにいった。
「あっ、このレースに、ジョージのJと恵子のKが編み込んであるわ。クッションにも、JとKの刺繍があるわ」
ミキは、腹が立って来た。
譲二は、本当に気がつかなかったらしく、そばへ来て見て、
「あ、ほんとだ」
といい、テーブル掛けと、クッションを、押入れにしまい込んだ。
「ミッキー、僕が好きなのは君だけなんだから機嫌直してよ、ね？」
「本当に彼女と何でもないの？」
「なんでもないって。キスしただけ」
「えっ、キスしたのォ」
「嘘だよ。ミッキーの怒る顔が可愛いから、からかったんだ」
「ジョージのバカ！」
ミキは、譲二を叩きに行った。その手を譲二が引っぱってひき寄せ、キスをした。
「ミッキー、好きだよ」
譲二は、唇をはなすと、ミキを抱きしめ、ベッドの上まで運んだ。
「イヤー」
ミキはあばれたが、譲二におさえ込まれてしまった。ベッドの上で、長いキスが続いた。ミキは、恵子という見たことのない女にヤキモチをやいていた。ヘジョージを私だけのものにしたい〉
と激しく思っていたので、譲二がセーターをたくしあげた時も、さからわずにじっとしていた。乳房があらわになり、彼は、その乳房へ顔を埋め、唇をつけた。
ミキの軀に電流が走った。
「ああっ」
その声をきくと、譲二が上衣をぬぎ捨て、ミキにしがみついて来た。ミキのセーターとブラジャーがベッ

ドの下にとび、上半身あらわになった。二人は、激しく抱き合い、キスが続いた。譲二の唇が、ミキの首すじや背骨を這う。スカートの下から譲二の長い指が入り込んできた。

やがて、ミキも譲二も、生まれたままの姿で抱き合っていた。

ミキははじめての経験で、彼がどう動いているのかよくわからなかったが、やがて、譲二が、激しい勢いで押し入って来た時、思わず「きゃっ」と悲鳴をあげた。

譲二が驚いて中断したが、すぐに強引にミキをおさえつけ、もう一度トライした。

ミキは、首をふってあばれた。あまりの苦痛に、譲二が何か間違っているのではないかと思ったりもした。

ミキは、心では譲二と一体になろうとしながらも、腕で譲二の腕をおしのけ、上へ上へと這い上って行った。

「いやっ、やめてっ」

といった時、譲二が急にぐったりした。

彼だけ登りつめてしまったのだった。

やがて彼は、軀をおこし、今度はゆっくりとミキを抱きしめると、

「ごめんね」

と、いった。

シャワーを浴びて服をきたあと、ミキはためらいがちに譲二にきいた。

「あの、結局どうだったの？　私わからなかった」

譲二は、にっこりして、

「完全にはうまくいかなかったね、ミッキーが逃げてばかりいるから。でも、ミッキーは僕のものになったんだよ」

と、いった。

「そう、わかったわ」

ミキは、ほっとしていった。

2

そのまま、譲二といたかったが、親がうるさいので、ミキは家に帰って来た。友だちからきいてはいたが、初体験というのは意外にむつかしいんだなというのがミキの感想だった。

〈でもよかった。一番好きな彼に、私の最初のものをあげることができて……〉

さすがに、その夜はすぐには眠ることが出来なかった。ふと、

〈麻里は、誰ともこういうことをせずに死んだのかしら？〉

と、思った。

翌日、ミキは、母親に顔を見られたくなくて遅く起きた。

鏡の前で顔を写してみたが、別に変ったところはなく、ほんの少し目もとが赤みを帯びているだけだった。

春休みももう一日しかない。そろそろ、新学期の用意とか勉強をしないといけないと思いながらも、何も手につかなかった。

〈そうだわ、レース編みの材料を買って来よう。それから、クッションの布も〉

ミキは、思いつくと、すぐに、外に出た。

途中、夏川家の前を通ったが、中は静まりかえっている。

〈陽子さんはどうしているのかしら？〉

夏川家から、四軒先の空地に、コンクリートミキサーやショベルカーが入って、土を掘り返していた。

〈豪邸が建つんだわ〉

ミキはしばらく前に立って眺めた。

彼女は、建売り住宅のパンフレットを見るのが好きだった。

〈結婚したら、こんな家に住みたいな。ここにピアノがあって、ここにベッドを置いて……〉

と想像するのが楽しいのである。

〈どんな人が住むのだろうか〉
と思って見ていると、突然、工事をしていた男たちが、さわぎ出した。
〈どうしたのかしら?〉
人々の視線は、ショベルカーが持ち上げた土くれを見つめている。
「人だ!」
「死体だ。女だ!」
男たちは、大声で叫びながら、ショベルカーにかけ寄って行く。
ガーッと音をさせておりて来たショベルカーから、人間の脚と手が出ていた。
やがて、ショベルカーは、地面に、土と一緒にその死体を吐き出した。
死体は、腐敗し、一部は白骨化していた。
しかし、その洋服に、ミキは見覚えがあった。
「あっ! 麻里。麻里だわ!」
ミキは、そばに駈け寄った。それは、麻里が高校時代から着ていたワンピースだった。その端布で、ミキにお揃いのポシェットを作ってくれたのでよく覚えている。
工事現場の人が知らせたらしく、やがて、パトカーや、鑑識車が静かな邸宅街にかけつけて来た。
まっ先に、パトカーから飛びおりて来たのは、夏川家のお手伝いの良江が亡くなったことで、ミキも一度会ったことのある京都府警捜査一課の狩矢警部だった。
彼は、まっすぐに、死体のそばに駈け寄り、土をはらって、死体をみつめた。
検視官がやって来て、死体のそばにひざまずく。
「死後半年ほど経っていますね、若い女性のようです」
ミキは、息を呑んだ。
検視官が、白い手袋をはめて検死にかかると、狩矢が、ミキのところへやって来た。
「死体に心あたりがあるというのは……あなたでしたか」

狩矢は、ちょっと驚いたように、ミキをみた。
「はい、顔がはっきりわからないのですけど、夏川麻里さんだと思います」
ミキは、麻里が、去年の夏から見えないこと、ワープロで手紙が来たが信じられないことを話した。もちろん、ポシェットの柄のこともつけ加えた。
「ほう、あの夏川さんところのね」
狩矢は、四軒先の夏川家の方をちらっと見た。
「ちょっと顔を見て頂けますか？」
「はい」
ミキは、恐ろしかったが、それより、麻里が本当に死んだのかどうか知りたくて、死体のそばに歩み寄った。
死体の顔は無惨だった。
まっ黒な土がついているのは仕方がないとしても、目のあった場所が、二つの空洞となり、鼻も消失して骨だけがあった。不思議なことに、髪の毛だけは、ふさふさしている。
「どうですか？」
「わかりません。でも、ひどい！」
ミキは泣き出した。
「これじゃわからないでしょうねえ」
狩矢が、うなずいた。
「でも、多分、彼女だと思います。どうして死んだんですか？」
「さあ、まだわかりませんね。もう少し、詳しく話をしてくれますか」
狩矢はしゃくり上げているミキを、横へ連れて行った。

3

ミキは、麻里が子供を生み、その子供を陽子が引きとったときいたが、彼女が、半年前の秋に死んでいたとしたら、子供を生んでいる筈がないと、自分の推理を話した。無惨な死体を見た途端に、麻里が可哀そう

で、陽子に対する憎しみが燃え上ってきた。それで、陽子が不倫の恋をし、子供がお腹に出来たので、それを麻里が生んだことにするため、麻里を殺したのだといった。

狩矢は、じっときいていたが、部下の刑事に、陽子を呼んでくるようにといった。

やがて、着物姿の陽子が、刑事と一緒にやって来た。死体を見ると、はっとしたように立ちどまり、死体に抱きつくようにして、

「麻里、麻里なの？　どうして」

といった。

「麻里さんですか？」

狩矢が、しばらく様子を見てからいった。

「洋服の柄が同じのを持っています。たしか、東京へ持って行った筈ですけど。でも、本当に麻里でしょうか？」

陽子は、信じられないというような顔で、みつめた。

「麻里さんに最後に会ったのはいつですか？」

狩矢がきいた。

「去年の秋です」

「あらっ、お正月に、麻里と会って赤ん坊を受け取ったのでしょう？」

横からミキが叫んだ。はじめてミキに気づいた陽子は、美しい眉を少しひそめて、

「いえ、秋ですわ。私が、東京の麻里の部屋へ行って、男物の品をみつけた時ですわ。赤ん坊は私の子供です。私が生んだんです」

と、いった。

「嘘だわ。あなたが彼女を殺したんだわ」

ミキは興奮して叫んだ。

狩矢が、陽子とミキを引き離し、ミキを、橋口警部補にあずけて、陽子と、反対側へ行った。

ミキは、橋口に、

「陽子さんの相手は、森信彦という洛北大学の助教授です。良介おじさんは、一年以上日本に帰って来てませんでしたから、良介さんの子供が出来るはずがない

んです。ですから、麻里が子供を生んだということにして、麻里を殺したんですわ」
「まあまあ、落着いて下さい。これが、麻里さんの死体だということは、まだ、確定できていませんから」
橋口は、ミキの肩を叩いた。
「どうしてですか？　あれは、麻里の着ていた服ですわ」
ミキは、むきになっていった。
「服だけではわかりませんからね。別人にその服を着せて、麻里さんだと思わす場合もありますから」
「どんな場合ですか？」
ミキは、涙を拭きながらきいた。
「本人が、自分を抹殺してしまいたい場合や、死体が発見されないと保険金がとれないとか、離婚できない場合、他人の死体に、服をきせてでも、その人物が死んだように見せるということもありますね」
「でも、今回は、死体がみつからない方がよかった筈だわ。だから、これは、麻里の死体だわ」
ミキは、言い張った。
「でも、死体が見つからない方がいい場合は、普通、衣服をぬがせて、裸にして埋めるんですがね」
橋口がつぶやいた。
ふと気がつくと、狩矢と鑑識員が、陽子と連れ立って、夏川家の方に行くのが見えた。
「どうしたんでしょうか？」
ミキがきくと、橋口は、
「ああ、死体の指紋と、家の中にある指紋を照合するために、行くんだと思いますよ」
と、いった。
〈これで、はっきりするわ。死体が麻里だとわかれば、陽子さんは、何と申し開きするのかしら？〉
ミキは、そのあと、所轄署に呼ばれて、色々と麻里についてきかれたあと、家に帰って来た。
そこで、早速、譲二と、千絵に、この事件のことを報告した。
「君が通りかかった時、死体がみつかったというのは、

麻里くんが、君を呼んだのかも知れないね」
譲二は、しんみりといった。
千絵は、さすがに驚いて、
「このことを、すぐに国際電話で良介さんに知らせるわ」
と、いった。
しかし、翌日、テレビのニュースを見たミキは、びっくりした。
夏川家の麻里の部屋の指紋と照合したところ、死体は、麻里でないことがわかったというのである。
〈一体、あの死体は誰なのだろうか？〉
ミキは、一心に考え続けた。

4

死体の年齢は二十歳前後、身長一六〇センチ、体重四十五キロくらい、黒く長い髪というのは、夏川麻里と一致している。
〈でも、若い女性なら、大体同じくらいの体型だわ〉
ミキは思った。
ミキ自身も、髪の毛はショートだが、あとはほとんど同じである。
死因は、外傷があり、交通事故に会ったのではないかということだった。
でも、指紋が違う。
〈一体、あの女性は誰なのだろうか？〉
でも、おかしいのは、死体の女性が、麻里の洋服を着ていたことである。腕時計と、靴も、麻里のと似ていた。
一番自然な推理は、麻里が、自分は死んだと思わせたいため、よく似た背恰好の女性を殺して、自分の服を着せたということである。いや、殺したのではなくて、轢き逃げされた死体をみつけて、とっさに、自分の服を着せたのかもしれない。
〈でも、おかしいわ。それなら、埋めたりしないで、路上に放り出しておく筈だわ〉

埋めたのでは、いつまでたっても発見されないかも知れないのである。

〈いや、そのときすぐに発見されたのでは、顔から、彼女でないことがわかる。だから、埋めたのだろうか？〉

しかし、ミキには、麻里が、そんな恐ろしいことをするとは、どうしても考えられなかった。

〈誰かが、彼女を、死んだことにしたかったのだ〉

それは誰か？

保険金をとりたくて、陽子が、他人の娘に麻里の服を着せたのだろうか？

陽子なら、麻里の服も靴も家にあるから、他人の死体に麻里の服を着せて埋めることは、可能である。

でも、その場合は、麻里が死んでいないと困るのだ。麻里が生きていれば、死んだことにしても、彼女があらわれるとバレてしまう。

しかし、麻里が死んでいるのなら、わざわざ他人を麻里にしたてなくても、麻里の死体をそのまま出せばいいわけである。

ミキは、わからなくなってしまった。

それに、陽子は、麻里が生きているように思わせたい筈である。

ミキが考えあぐねてぼんやりしている時に、電話がかかって来た。

それは、良介の恋人千絵からだった。

「麻里さんの死体が出たのだと思ったけど、違ったのね？」

千絵は何も気づかないように明るい声でいった。

「ええ。でも、どうして麻里の洋服着てたんでしょうか？」

ミキは、いくら考えてもわからない疑問を千絵にぶつけてみた。

「そうね。誰かが麻里さんが死んだと思わせたいので、彼女の洋服を着せて埋めたんじゃない？」

〈やっぱり、彼女も、同じことを考えてるんだわ〉

「陽子さんがですか？　でも……」

と、いいかけると、千絵は、
「陽子さんは、麻里さんが生きているように見せたかったはずだわ。だから、たとえば、麻里さんに恋人がいて、その人が、麻里さんとトラブルをおこして彼女を東京で殺してしまった。でも、いつまでも彼女を探されると困るから、京都で死んだことにしたかったというのはどう？」
と、いった。
ミキは、あっと思った。
麻里は子供は生んでないにしても、恋人ぐらいいたかもしれないのである。
〈私だって、ジョージと初体験したのだから、麻里だって、年ごろだし恋人がいたはずだわ〉
その恋人は、東京で麻里を殺してしまい、どこかへ死体を隠した。でも、生きているようにみせたくて、盛んに、ワープロでミキや陽子に手紙を書いた。
しかし、いつまでもそうしてつなげるわけはないので、麻里の服や靴を持って京都に来て、同じ背恰好の女性を車で轢き、服をきせて埋めた。
こうしておけば、死体が発見されれば、麻里が京都で死んだということになる。
東京にいる彼は安全だ。
彼の計算では、死体は、もっと遅く発見され、顔も指紋もわからなくなるだろうと思ったに違いない。

5

「でも、陽子さんは、麻里が死んだことを知っていたような気がするんです。でないと、自分の生んだ不倫の子を、麻里が生んだように夫に言えないと思うんですけど」
ミキがいうと、千絵は、
「陽子さんと麻里さんは仲が良かったし、しょっちゅう連絡をとり合っていたから、麻里さんが死んだことが、本能的にわかったんじゃないかしら？　カンもいい人みたいだし。東京へ行って色々調べたあと、死ん

だに違いないと思ったからこそ、これを利用しようと考えたんだわ」

と、いった。

「そうかも知れません。だから、麻里のらしい死体が、家の近くから出て来たとき、陽子さんは、息のとまるほどびっくりしたと思います。それで、秋からあと会ってないといったんだと思います。麻里でないと知ってたら、お正月まで麻里は生きてましたというはずです」

「そうね。陽子さんは、死体が麻里さんじゃなくてほっとしたでしょうね。そして、しまったと思ったかもしれないわ」

「ということは、陽子さんは、麻里の死体がどこにあるか知らなかった。つまり、麻里を殺してないということですね」

「だと思うわ。麻里さんに恋人がいたとしたら、一体誰かしら？」

「えーと、大学の教授や、家庭教師に行っていた家の山川不動産社長とその息子、それから同級の大学生のうちの誰かなんですけどわかりません。東京の晴子さんに、調べて貰うことにします」

「お願いね。それから、良介さんには、このことを知らせるわ」

千絵は、電話を切った。

〈良介さんと陽子さんは、離婚するのだろうか……〉

電話を切ったあと、ミキは考え込んだ。

陽子は、夫には、麻里がお正月に赤ん坊を生んだので、夫婦の子供として届けたいといったに違いない。良介は、感謝しながら承知しただろう。ところが、死後半年もたった死体が出て来たとき、陽子は、麻里の死体だと思って、あわてて、麻里とは、秋以来会ってないといった。死体は、麻里ではなかったが、この言葉は、取り消すことは出来ない。

良介は、そうでなくても、陽子のことを怪しんで、千絵に調べるようにいっていた。

二人の離婚は決定的だろう。良介には、千絵という

恋人がいるし、陽子にも、森信彦という不倫の相手がいるのだ。

〈でも、子供はどうなるのだろうか？〉

ミキには、法律上のことはよくわからない。だが、一旦、夫婦の子として届けたからには、良介が、自分の子かどうか赤ん坊の鑑定を依頼して父親でないと証明しないと、籍から抜くことが出来ないに違いない。

二人の話し合いで、良介は、そこまでせず、自分の子だが、離婚して妻が子供を引き取ったということにするかもしれない。

どっちにしても、陽子は、赤ん坊を引き取って別れることになるのだろう。

〈大人って怖い〉

と、ミキは思った。

しばらくして、ミキは、晴子に電話をかけた。晴子からは、京都に来たあと手紙が来て、それに返事を出したきりになっている。

晴子は、幸い家にいた。

ミキの話をきくと、彼女は息を呑んできいていたが、

「あーびっくりしたわ。麻里の死体が出たのかと思った」

と、いった。ミキは、東京の麻里の恋人が犯人かも知れないと話した。

「それで、もう一度、誰が、麻里の恋人だったのか調べて欲しいの」

ミキは、晴子が二つ返事で承知してくれるものだと思っていた。それなのに、晴子は、黙りこくっている。

「どうしたの晴子さん」

「前にも調べたけど、結局わからなかったわ。それに、私、山川邦彦さんと今、愛し合っているの。だから、彼でないことだけは、確かだと思うけど」

晴子は、やっと答えた。

「えっ、山川さんて、あのテレビ局に勤めている息子さんの方？」

「ええ」

今度は、ミキが黙る番だった。

晴子は、山川を愛しているので、彼が犯人だとは思いたくないし、その関係から父親の方でも困るのだ。
「でも、山川さんは、麻里の大切にしていたキーホルダー持ってたでしょう？　あれは、どうしたのかしら？」
「彼は、麻里が忘れていったのだといってたわ。でも彼は、麻里の恋人でもなかったし、犯人でもないわ」
ミキは、しばらくしてから、やっといった。
「では、あとの二人についてだけ調べてくれない？　お願い」
「わかったわ」
晴子は、気のない返事をして電話を切った。

6

ミキは、晴子が人が変ったように冷たいのが悲しかった。
晴子は、今、恋愛で夢中になっていて、死んだかも知れない友だちのことなど、忘れてしまっているのだ。それに、調べていって、自分の恋人が、麻里と関係があったことがわかるのをおそれている。
〈やっぱり、麻里は、山川邦彦を愛していたのだ。だから、大切なキーホルダーをプレゼントしたんだわ。でも、そこに、晴子があらわれて、三角関係になったのではないだろうか？〉
三角関係のもつれから、麻里を殺したのは、晴子かもしれないと思った途端に、ミキは、背すじが寒くなった。
今まで信じていて、何もかも打ちあけていた晴子が、犯人だとしたら、こんな恐ろしいことはない。
〈もし、そうなら、晴子は、麻里をどこで殺したのだろう？〉
多分、東京で殺して水に沈めるか、土に埋めたのだろう。行方不明ということで、事件はウヤムヤになってほしかったが、心配なので京都に来た。
夜、夏川家の様子をうかがっているとき、たまたま

近所で、轢き逃げされた女性をみつけた。それで、その死体に持っていた麻里の服をきせ、靴をはかせて、埋めたのではないか。

〈私は、陽子さんにこだわりすぎたみたいだわ〉

ミキは、どうしても、自分の推理が合っているかどうか確かめなくてはいられない気持になって来た。

今は、四月のはじめだが、死体は、大ざっぱに、半年ほど前に、死亡したと発表された。しかし、それは厳密なものではないだろう。

麻里が死んだのは、九月十三日前後と思われるが、この死体は、それから大分たってから埋められたのではないか。もしかしたら、ミキが調べはじめてからかもしれない。

ミキは、京都府警本部に行き、狩矢警部に会って、出て来た死体の死亡推定日時をきいた。

「どうしてですか？」

狩矢は、にこやかにきいた。

ミキは、晴子のことは伏せて、自分の推理を話した。

麻里は東京で、恋人と恋愛のもつれで殺され、ミキたちがしつこく調べはじめたので、犯人が、あわてて、別の女性を京都で殺して埋めたのではないかという推理である。

狩矢は熱心にきいていたが、傍の解剖所見をとり上げて、いった。

「解剖結果、死亡日時は、大体、九月半ばということになっていますね。それに、轢かれたとき週刊誌を手に持っていたのか、道に落ちていたのか、その断片が、死体の衣服にくっついてまして、それを調べたところ、週刊M誌の九月半ばに発売されていたものであることがわかりましたので、間違いないと思います」

「すると、多分、麻里が、いや麻里さんが死んだのと同じ頃ということになるんですね」

ミキは、自分の推理がはずれたので、がっかりしながらいった。

「夏川麻里さんだったら、一番自然なんですがね」

狩矢も、考え込んだ。

「ところで、夏川麻里さんの恋人だったかも知れない人の名前を教えてくれませんか。それから、東京へ行って、あなたが調べたとき協力してくれたという女性の名前も」
ミキは、四人の男と晴子の名前を書いた。
「一度調べてみましょう。それから、この中で、あなたが、麻里さんの恋人だったのではないかと思っているのはどの人ですか？」
狩矢は、じっと、ミキの顔を見た。
ミキは、黙って、山川邦彦の名前を指した。
「どういう理由でですか？」
「彼が、麻里の、いや麻里さんが大切にしていて、お母さんの陽子さんにもあげなかったキーホルダーを持っているということをきいたからです」
「なるほど」
狩矢は、うなずいた。
「その人には、今、恋人はいないんですか？」
ミキは、目を伏せた。
狩矢は、しばらくその様子を見ていたが、
「こちらで調べてみましょう。失踪届けが出ただけでは、それほど時間をかけて捜査することは出来ないんですが、今度、死体が出て来たこと、そして、その死体が、麻里さんの服を着ていたことから、麻里さんも、死んでいるか、事件にまき込まれた可能性があると思われるので、本腰を入れてやってみましょう」
と、いった。
ミキは、一応、満足して家に帰って来た。
〈あとは、警部さんに任そう。彼が、東京関係を調べれば、きっと、色々わかるに違いないわ〉
翌日は、大学へ行って、ミキは遅く帰って来た。
〈ジョージも大学へ行ったのかしら？〉
家に帰って電話をかけようと思ったとき、チャイムが鳴った。
〈ジョージかな〉
胸をはずませて出て行ったミキは、玄関に立っている人物を見て、ぎくっとした。

第十二章　指紋の謎

1

玄関に立っていたのは晴子だった。
「あっ、晴子さん」
ミキは、顔から血の気がひいていった。
今の今まで麻里を殺した犯人ではないかと思っていた晴子が、目の前にあらわれたのだから驚くのはあたり前だった。
「どうしたの？　そんなにびっくりした顔をして」
晴子は、いつものにこやかな顔でミキを見た。
「あがっていい？」
「ええ、……どうぞ」
「どうしたの？　元気がないわ、ジョージ君と喧嘩でもしたの？」
「まあね」
ミキは、怖くてたまらなかった。もし、彼女が本当に麻里を殺したのだとしたら、それをミキが感づいたと思って、殺しに来たのかも知れないからだ。
家には、今、誰もいない。
晴子は、さっさとキッチンに入ると、椅子に腰がけた。
「どうして急に来たの？」
ミキも、仕方なく向い合って座りながらいった。
「山川邦彦さんは、麻里の恋人でもなかったし、彼女を殺してもいないわ。それをいいに来たの」

晴子は、決然としていった。
それは、ミキがはじめて見る晴子だった。
〈彼女は、山川邦彦を愛しているんだわ〉
ミキは、晴子をみつめた。
「彼の日記を見たわ。彼はずっと何年も日記をつけているの。彼は、麻里については、大した関心を持ってなかったみたいよ。キーホルダーは、家庭教師のお礼に、山川家が、お中元として麻里にハンドバッグを渡した日、彼女が忘れて行ったんだって。そのうち、返そうと思って持っていたというの」
「でも、キーホルダーを忘れて行ったら、カギがついていて、麻里は、部屋に入れなかったんじゃないかしら？」
ミキは、信じられないというようにいった。
「あら、ブランドもののハンドバッグの中には、お財布とキーホルダーが入っていて、麻里は、そのキーホルダーにカギをつけかえて喜んでいたんだって。それで、前のキーホルダーを忘れて行ったんだわ」
「あ、そう」
「だから、麻里が東京で恋愛関係にあったのは、教授じゃないかと思うの」
晴子は、山川親子に嫌疑がかからないようにするため必死のようだった。
「山川さんの日記というのは、彼が見せてくれたの？それとも、盗み見したの？」
ミキは、意地悪くきいてみた。
「彼が見せてくれたのよ」
晴子は、得意そうにいった。
「じゃあ、書きかえているということもあるんじゃない？　晴子の気に入るように、麻里のところははぶいて」
「そんなことはないわ。彼は、そんな小細工する人じゃないもの」
「そう」
ミキは、お茶も出さずに、じっとしていた。しばらくして、

「京都府警の狩矢警部が、麻里の東京での交友関係を調べたいって言ってたけど」
と、いった。
「本当？　じゃあ、私、行ってくるわ。東京に来て貰っても、結局、私から話をきくしかないんだもの」
晴子は、ミキの態度がおかしいのを感じたらしく、立ち上った。
「ねえ、ミッキー、あなた、私を疑ってるんじゃない？　まさか、私が麻里を殺したと思ってるんじゃないでしょうね？」
ミキは、びくっとした。しかし、つとめてそれをおしかくして、
「そんなこと思ってないわ。でも、どうしても、麻里の服を着た死体が埋められていたかがわからないの」
と、いった。
「本当に、私もそれはよくわからないわ。麻里は一体どうしたのかしら？」
晴子は、椅子に座り直した。

2

一時間後、ミキは、晴子と連れ立って、府警本部にいた。
狩矢は、晴子が来たことをとても喜んで、東京での麻里について、色々話をきいた。
その中には、ミキもまだきいてなかったこともあった。
一通り話が終ると、晴子は、山川邦彦は、麻里の恋人でもなく、犯人でもないということを、もう一度強調した。
二人が帰ろうとすると、狩矢は、それぞれの指紋をとらせて欲しいといった。
「どうしてですか？　私、疑われているんですか？」
ミキは、気色ばんできいた。
「いいえ。そういうわけではありません。夏川麻里さんが行方不明になっているので、色々な場所とか、物

とかの指紋をとっているんですが、あなたたちの指紋は除外しようと思うんです。ですから、どうか協力して下さい」

二人は、うなずいて指紋をとることを承知した。

拇印を押すときのように、印肉をつけて、ぽんと紙につくのかと思ったら、全然違っていた。

黒いスミをつけて、ローラーのようなもので指のまわりをぐるっとまわして指紋をとるのである。それも、両手の指十本とも丁寧にとるので、時間がかかる。

やっととり終って、二人は、手を洗いに洗面所に入った。

「なかなかスミがとれないわ」

「でも、指紋をとるなんて変な気持ね」

晴子は、そういいながら、石鹸をつけてごしごしこすっている。

ついでに化粧もなおして出てくると、狩矢が、緊張した顔をしていた。

「ちょっと来て下さい。重要なことがわかりました」

「なんでしょうか？」

二人がそばへ行くと、狩矢が、二つの指紋を見くらべていた。

「今、採取した晴子さんの指紋なんですが、おかしなことに、夏川家にあった麻里さんの指紋と同じなんです。彼女の部屋のあちこちから検出されたものと同じなんです。これは一体、どういうことなんですか？」

「えっ、私の指紋が？　どうしてかしら」

指さされた晴子が悲鳴のような声をあげた。狩矢は、じっと晴子をみつめた。

「夏川家の近くの空地で、麻里さんの服を着た死体が見つかった時、それが、麻里さんかどうか確かめるために、夏川家の麻里さんの部屋の指紋を採ったんです。一番たくさん検出された指紋が麻里さんのだと思って、それと死体と照合したところ、違っていたので、死体は、麻里さんじゃないということになったのです。しかし、部屋にあったのが、麻里さんの指紋でなくて、晴子さん、あなたの指紋だとすると、話がかわって来

ます。一体どういうことなんですか？」
ミキも、息をのんで晴子をみた。
「わかりません。私の指紋がそんなにたくさんあったなんて」
晴子は、激しく首をふったが、
「あ、そうだわ。私の指紋があったのは、この前、京都に来た時、陽子さんが、うちにいらっしゃいといわれて、行ったからなんです。あの時、麻里の部屋を見せて貰って、色々さわったので、指紋が残ったのです」
と、いった。
「しかし、そのぐらいだったら、麻里さんの指紋の方がたくさん出ると思うんだがなあ」
狩矢は、考え込んでいる。
「麻里は、ずっと東京の大学へ行ってましたし、帰って来るのは、夏休みとか冬休みだけです。その間には、拭き掃除もするので、彼女の指紋は、ほとんど残ってなかったのではないでしょうか？」
ミキがいうと、晴子も、
「そうよ。きっとそうだわ」
と、ほっとしたようにいった。
「すると、改めて麻里さんの指紋を検出したいんですが、ミキさん、何かありませんでしょうか？」
狩矢が、ミキにいった。
「私のうちに来て下さい。高校の時、麻里と交換日記をつけたことがあります。麻里から貰った人形や時計もあるので、指紋が出るかどうか調べて下さい。それから、東京の麻里の部屋も、陽子さんにカギをかりて調べたらどうですか？」
ミキは、一生懸命にいった。
すぐに、狩矢は、鑑識員と一緒に、ミキの家に来て、麻里に関係あると思われるものを持ち去った。

3

ミキは、翌日、譲二と、御所の近くの喫茶店で会っ

ていた。近くには、京都放送局や、平安女学院、私学会館などがある。静かな街なみである。

ミキの話をきくと、さすがに、譲二は、驚いたようだった。

しばらく考えてから、譲二は、

「いくらなんでも、あの家は、麻里くんがずっと育った家なのに、彼女の指紋がそんなに出て来ないというのはおかしいな。晴子くんが、すべての指紋を消し去ってから、自分の指紋をつけたんじゃないだろうか？」

と、いった。

「えっ、本当かしら？」

ミキも考える眼になった。

「そうかも知れないわ。じゃあ、あの死体は、やっぱり麻里……」

「のような気がするな。そして、殺したのは、晴子くんかも知れないね。彼女は、三角関係のもつれから、麻里くんを京都まで追って来て殺した。それで、空地に埋めたけど、いつ見つかるかと心配だった。それで、麻里くんのことを君が探しはじめたとき、京都へ来て、夏川家へ行き、麻里くんの部屋の指紋をすべて拭き去って、自分の指紋をつけたんじゃないかな。そうしておけば、警察は、まず、夏川家の麻里くんの部屋の指紋を調べるから、死体は、彼女でないことになる」

ミキは、大きくうなずいた。

「でも、それなら、どうして、死体から麻里の服をはぎとっておかなかったのかしら？　そうすれば、他人だと思われたかもしれないのに」

「それは、彼女を殺した時には、動転してしまって、それだけの余裕がなかったんじゃないかな。あとで、そうしたらよかったと気がついても、死体を掘り起こして、衣類や靴をはぎとる勇気はないし、そんなことをしていて見つかるおそれもある。それで、指紋の工作をしたんだと思うね」

「きっとそうよ。怖いわ。でも、警察が東京の麻里の部屋の指紋をとれば、わかってしまうのに」

ミキは、譲二の顔をみつめた。
「麻里くんを殺したのが彼女だったとしたら、彼女のマンションのカギを持っているわけだから、東京の部屋へはすぐに行って、指紋を消し去ったと思うな。だから、残っているのは、そのあと部屋を調べに行った君の指紋ということになる」
「きゃっ、怖い！」
「君の持っていたものから、果して彼女の指紋が出るかな？　また、出たとしても、警察が、それを、麻里くんの指紋と信じるだろうか？」
譲二が、コーヒーを飲みながらいった。
「そうね、心配だわ。麻里って可哀そうに、指紋まで抹殺されてしまったのね」
ミキは、遠くをみるような顔をした。
「さあ、このことは、警察にまかすことにして、出ようか？」
譲二は、立ち上った。
外へ出ると、タクシーを拾って、二人は乗り込んだ。
「うちへ来る？」
「え？　どうしようかな」
「ファミコン買ったんだよ。しに来ない？」
「本当？　じゃ行く」
譲二の部屋に着くと、二人は、すぐ、『ポートピア殺人事件』というファミコンに夢中になった。
「駄目ね、どうしてもこのゲームの犯人がわからないわ」
一時間ほどして、ミキが口惜しそうにいった。
「紅茶いれてくれないかなあ」
「いいわ」
ミキは、気軽に立ち上って、ティーバッグで紅茶を入れた。
「でも、ファミコン、どうして買ったの？　高かったでしょう？」
紅茶に砂糖を入れながら、ミキがいった。
「この前のアルバイトのお金で買ったんだ。君を、うちにおびき寄せるためにね」

「えっ、嘘っ」
ミキは、カップを下においた。
「嘘だよ。でも、君と一緒に遊びたかったのは事実だよ。だってミッキーは、誕生日だとか、ファミコンだとか、何か口実をつくらないと家に来てくれないじゃないか」
「そんなこと……」
ないわといいかけたミキの唇は、譲二の唇でふさがれてしまった。
譲二の薄く冷たい唇を、ミキは好きだった。彼女は下唇がやや厚く、それが情熱的にみえて、男には魅力的なのだが、ミキは、気にしていた。
激しいキスがおわると、譲二は、ミキを抱きあげてベッドへ運んだ。
そして、
「脱げよ」
と、いい、自分も素早く裸になった。
ミキが、シャツとスカートだけぬいだところで、譲二がとびかかって来て、下着をはぎとった。
彼は、ミキのふっくらとした乳房に口づけしてから、突然、押し入ってきた。
「待ってェ」
ミキは、あばれたが、彼は、激しく動いて、すぐに果ててしまった。
「ごめんね。君が好きだからだよ」
彼は、顔をおこすと、そういって、裸のミキに、自分の軀をぴったりと密着させた。
「いいのよ」
ミキは、小さくうなずいたが、なんとなく物たりなかった。
やがて、交互に、シャワーを浴びて服を着ると、ミキは、髪をとき、化粧をした。
「泊って行かない？」
「駄目よ。うちはうるさいんだから」
「じゃあ、送って行くよ」
彼は、タクシーで、ミキを家の近くまで送り、最後

にキスをした。
ミキが、家の方へ歩き出したとき、うしろから声をかけられた。
「ミキさん」

4

闇の中から声をかけたのは、陽子だった。
ミキは、びっくりしたが、うしろに、譲二がいるので、いざとなれば、彼が助けてくれると思い、怖くはなかった。
「あなたを待っていたの。実は、昨日、街で、あなたと晴子さんをみかけたので、ついて行って声をかけようとしたら、府警本部へ入って行ってしまったでしょう？　待っていたかったけど、赤ん坊を連れていたので、家に帰ったの。晴子さん、何か、麻里についての情報を持って来てくれたのかしら？」
陽子は、真剣な顔できいた。
〈陽子さんは、やっぱり、麻里のことを心配しているんだわ。それなのに、彼女が麻里を殺したのじゃないかと疑って申しわけなかったわ〉
ミキは、そう思ったので、譲二と別れ、陽子を家の中に案内した。
「遅かったねえ。どこへ行ってたの？」
と、いいながら出て来た母親は、陽子の顔を見ると、驚いて挨拶した。
「ちょっとお話があるの」
ミキは、そういうと、陽子を、二階の自分の部屋に案内した。
母親が、お茶を運んだあと行ってしまうと、ミキは、陽子に、昨日のことをすべて話した。
「晴子さんは、私が東京に行ったときも、とても親切でいい人でした。でも、昨日のことを考えると、彼女が麻里を殺した犯人じゃないかと思えてきて、悲しくてたまらないのです」
ミキは、沈んだ声でいった。

「そうですか……。麻里の行方がわかったのかと思ったんですけど、違ったのね。では、あの死体が、麻里なのでしょうか？」
陽子は、ハンカチを眼にあてながらいった。
「わかりません。それで、私の家にあった、麻里の指紋のついていそうなものを、狩矢さんたちに渡したんです」
「あれが、麻里だとわかっていたら、もっとよく見ておくのだったわ。可哀そうに。でも、晴子さんが、そんなことするなんて信じられないわ。相手の山川邦彦という人に、私、会いたい。そして、麻里と最後に会った時のこときたいわ」
陽子に泣かれて、ミキは、彼女に同情した。
「じゃあ、私もそのとき一緒に行きます。でも、当分は、学校へ行かないといけないので、そのうちに」
「有難う。おねがいします」
「ところで、陽子さんが、麻里に会った最後はいつなんですか？」
ミキは、じっと陽子を見た。
「……夏休みに、うちを出たときよ」
「じゃあ、そのあと、麻里に会ってないんですか？」
「ええ」
「では、秋に麻里の部屋に行ったとき、男の人の持ちものがあって、麻里と喧嘩になったといったのは、嘘だったんですか？」
ミキは、また、陽子を疑う目になってきた。
「本当よ。でもそれは、もっと前のことなの。だから東京へ帰った麻里から連絡がなくなったとき、あ、あの男のところへ行ったんだと思ったのよ」
「では、赤ちゃんは、一体、誰が生んだのですか」
ミキは、この際、はっきりしておこうと思った。
「あれは、私の子供です。私が生んだんです。それがどうしたの？」
陽子は、ちょっと怒ったようにいった。
「でも、良介さんは、一年以上帰って来ていないんでしょう？　それに、良介さんには麻里が子供を生んだ

ので、夫婦の籍に入れましょうといったんでしょう？」

「私たちのプライバシイに立ち入って欲しくないわ」

陽子は、強い口調でいった。

「じゃあ、麻里のことも、勝手に探して下さい。私、立ち入りたくありませんから」

今度は、ミキがふくれていった。

5

「ごめんなさい。本当に、子供は、私が生んだんですの。以前は、あなたに麻里の子供だといったけど、あの時には色々なことがあって、本当のことを話せなかったの。いずれ全てご説明できる時が来ると思うけど、今はこれしか言えないわ。私、良介に、千絵という女性がいるの知ってますわ。あの人は、どうしても、良介の奥さんになりたくて、私たち二人の仲を裂こうとして動いているの。このことは、いずれわかるわ。良介は、あと一週間で、日本に帰ってくるのよ」

「そうですか」

ミキは、千絵については半信半疑でいった。

「あなたが、千絵さんのことを知っているのなら、言わないでおこうと思ったことをお話ししますわ。実は、千絵さんのことは、うちの麻里も知っていて、夏休みに帰った時に、何回か千絵さんに、別れて欲しいと言いに行っていたの。夏休みがおわって九月十三日に東京へ帰った日も、行きがけに、もう一度千絵さんと会ってから帰るといってました。だから、もし、麻里が殺されたのなら、殺したのは千絵さんじゃないかと思うの。二人は口論になって、麻里は殺されたんじゃないでしょうか？　良介は、千絵さんと恋愛関係になったのだけど、麻里がいることで、私と別れなかったの。ですから、麻里が死んでしまったら、多分、良介は、私と別れて、千絵さんと結婚すると思います。赤ん坊は、千絵さんが、私の不倫の子供だと良介にしきりに吹き込んでいるので、良介も、可愛く思わないような

のです」
陽子は、ぽつりぽつりと話した。
ミキは、驚きで声も出なかった。
そういえば、千絵は、車の運転がうまいが、陽子は、車の運転が出来ないし、車も持っていない。
〈あの死体は確か、車に轢かれて死んだときいた。陽子さんには、出来ないのではないだろうか？〉
晴子も、車の運転は出来ない筈である。
〈やっぱり、千絵さんが殺したのだろうか？〉
ミキは、陽子の話を、半分信じる気持になっていた。
「あなた、千絵さんという人に会ったことあるんじゃない？」
陽子は、ミキが、千絵の名前に驚かないことから、感じたらしく、突然きいた。
「ええ、会いました。いつとはいえませんけど、偶然、良介さんと一緒のところをみつけたので、問いつめたのです」
ミキは、千絵を裏切ってはいけないと思い、少し脚色していった。
「そうなの。それで、彼女は、何といってたの？」
陽子の眼が光った。
「私は、良介さんと結婚したいとは思っていない、といってました」
「それは嘘よ。あなたみたいな若い人は、潔癖だから、嫌われないようにそういってるんだわ」
「私は、あの人が、そう悪い人には思えなかったので、ただ、話をきいていただけなのです。あの人も、麻里の行方を探したいと一生懸命いっていたし……」
ミキは、あたらずさわらずのことをいった。
「ねえ、ミキさん。あなた、あの人に会って、九月十三日に、麻里に会ったかどうかきいてくれない？　私からきいたといわずに。麻里に会って、どんな話になったか、何時頃帰ったか、私知りたいの」
陽子が、ミキの顔をのぞき込みながらいった。
「きいてみます、あなたに頼まれなくても。私は、多分、麻里は死んでいて、死んだのは、九月十三日だと、

前から思っているんです。ですから、その日、千絵さんに会っているのなら、どうしても話をききたいし、会ったことがわかったら、そのことを警察にいいたいと思っています」

ミキは、はっきりといった。

「有難う、ミキさん。私は、麻里を愛していたし、良介とうまくいかなくなっても、麻里だけは、味方だと思っていたの。だから、麻里がどうしているのか？もし、あの死体が麻里なら、誰に轢き殺されたのか知りたいの。一週間後に、良介が帰って来たら、私たちは、離婚するかもしれない。でも、私は、それでいいの。赤ん坊は、私が育てていくわ」

「あの……、森信彦という人は、運転出来ますか？」

「森さん？　ええ、運転出来るわ。でも、あの人が、麻里を殺したりはしないわ。麻里を殺しても何の得もないのだから」

「そうでしょうか」

ミキは、そうとは思わなかった。

もし、赤ん坊が、森という男との不倫から生まれたものだとして、子供を生んだことのない陽子が、どうしても生みたい、最後のチャンスだと思い、おろす時期を失ってしまったとしたら、森が、麻里を殺す動機はあるのだ。

麻里を殺して埋め、子供は、麻里が生んだことにして、夫婦の子として届ける。

そうすれば、不倫が表沙汰にならないですむからである。

しかし、今は、千絵の方が怪しいと思えてきた。信じていただけに、かえって、そうかもしれないという気がしてくる。

ミキは、陽子が帰ったあとも、ずっと、自分の部屋で考え込んだ。

6

晴子

陽子
千絵

ミキは、三人の名前を、ノートに書いた。
この三人のうち、誰が麻里を殺してもおかしくないのである。
ただし、陽子や晴子の場合は、車の運転が出来ないから、直接手を下したのは、その恋人ということになる。
陽子の場合は、森信彦。
晴子の場合は、山川邦彦である。
〈でも、山川邦彦が、晴子と一緒になって、麻里を轢き殺すというのは、ちょっと無理があるような気がするわ。彼は、独身だし、麻里が嫌いになったら、殺さなくても別れることは出来た筈なのだ〉
と、ミキは考えた。
しかし、指紋のことがある。
もし、なにかの事情で、二人が麻里を殺したとしたら、京都で殺せば、東京にいる自分たちには、疑いがかからないと計算したのだろう。
翌日、ミキは、千絵に会ってみることにした。
千絵は、快く会ってくれた。彼女の顔をみると、ミキは、どうしても、彼女が犯人とは思えなかったが、晴子の指紋の話もした上で、麻里と、九月十三日に会ったかどうかときいた。
「いいえ。私、麻里さんとは、一度も会ったことはありませんわ。麻里さんは、私のことを知らない筈だわ」
千絵は、にこやかにいった。
「でも、陽子さんは、麻里は、あなたに何度も良介さんと別れるようにいいにいって、九月十三日にも、あなたに会ってから東京へ帰るといっていたというんです」
ミキは陽子に、名前は出さないでくれといわれていたが、この際だからと思っていった。
「それは嘘よ」

千絵は、あっさりといった。
それが、本当なのかどうか、ミキにはわからなかった。
「陽子さんは、私を犯人にしたてようとしているのよ。でも、私は、麻里さんと会ったことはないわ。その頃、日本にいたのは事実だけど」
千絵は、そういうと、コーヒーをゆっくりと飲んだ。
「三日したら、良介が帰ってくるわ。そうしたら、彼も、真剣に色々なこと調べると思うわ」
「えっ、三日後ですか？　陽子さんは、一週間後といってましたけど」
ミキは、驚いていった。
「四日間サバをよんで私と過すことにしてるの。彼女には、一週間後の飛行機を教えて、空港で、彼が、先に待っていて、飛行機がふりかえになったというつもりなの」
千絵は、笑った。
「大人って怖い！」
ミキは、千絵が嫌いになった。
「そういう小細工はするけど、麻里さんを殺したりはしないわ」
彼女は、悠々としていた。
千絵と別れると、ミキは、京都府警本部へ行った。
もし、九月の十三日に、麻里が、千絵に会いに行かなかったのが事実としても、千絵が犯人かもしれないと考えた。
千絵は、良介を愛し、どうしても、彼の奥さんになりたかった。それで、陽子を轢き殺そうとして、夜、夏川家の近くで待っていた。そして、門から出て来た麻里を、陽子と間違って轢き殺し、近くの空地に埋めた。そのときには、轢いたのは、陽子でなく、麻里であることに気がついたが、それならそれでいいと思ったのではないか。
疑いは、陽子にかかるからである。
ミキは、狩矢警部に会い、話をしようとしたが、狩矢は、

「ちょっと待って下さい。お知らせすることがあります。そこへ座って下さい」
と、いった。
ミキが、緊張した顔で、椅子に腰かけると狩矢は、静かにいった。
「この間の死体は、夏川麻里さんであることが、今、わかりました」
「えっ、やっぱり……」
あとは、声にならず、ミキは、しゃくりあげた。大体予想していたことだけど、本当に、この世から、麻里が消えてしまったのだと思うと、悲しくて、泣いてしまった。
「あなたから、お借りした品物にも、死体と同じ指紋がありましたし、東京の歯科医からの報告で、歯型もわかったのです。この前には、京都の彼女のかかりつけの歯科医の歯型を取って調べたのですが、合わなかったのです。麻里さんは、東京の大学へ行っている二年間に、随分歯をなおしたんですね。それで、東京で調べて貰ってわかったんです。東京の彼女の部屋からも、少しだけ指紋が出ました」
しばらく泣いたあと、ミキは、顔をあげた。
「それで、死体には、轢き逃げした車の塗料とか、タイヤの跡はついてなかったんですか？」
「土に埋められて半年たっているので、はっきり出て来ないのです。でも、大体、車種はわかっています」
「どうか、麻里を殺した犯人を捕えて下さい。おねがいします」
ミキは、泣きながら頭をさげた。

第十三章　通　夜

1

夏川家の近くの空地に埋められていた死体はやっぱり、麻里だった。

死後約半年で、死亡推定日時は、九月半ばだという。

死体は、すでに火葬にされていたので、そのお骨を引き取って、夏川家では、通夜が行われることになった。

麻里の父親、夏川良介も、急遽、アフリカから帰国してきた。

ミキも、譲二と一緒に、通夜に行くことにした。

夏川家の前には、黒と白の幕がはりめぐらされ、ずらりと、シキビが並んでいた。

「実感がなかったけど、こうやってみると、やっぱり、麻里は死んだのね」

黒い服を着たミキが、沈んだ声でいった。

「そうだね。彼女は、自分の家の近くで半年も土に埋もれて、眠っていたんだね」

譲二も、目をしばたたいた。

家の中に入ると、座敷の二部屋をぶち抜いて、幕が張られ、祭壇がつくられていた。

喪服を着た人たちがつめかけ、線香の煙と、読経の声が、部屋にみちている。

中央には、高校時代の麻里の写真が飾られていた。

明るい笑顔だった。

それを見て、ミキは、また、涙を流した。
焼香をすませて気がつくと、柩の横に良介と陽子が、並んで座っていた。
良介が、ミキに気づいて目礼した。陽子は、うつむいて、ハンカチで、目をおさえている。
〈二人は、このあと、どんな話し合いをするのだろう？〉
ミキは、心の中で思った。
二人が帰ろうとしたとき、玄関から入って来た女性がいた。それは、千絵だった。
良介が、はっとしたように彼女を見た。陽子も、気配を感じて顔をあげた。
女二人の目と目が合って火花が散った。
ミキは、息をつめて、女たちをみつめた。
しかし、それは一瞬で、陽子は、何もなかったように頭をさげ、千絵は、祭壇にすすんで、ゆっくりと、焼香をした。
そして、あっという間に、外に出て行ってしまった。
翌日、葬儀のあと、ミキは、良介と会っていた。
彼は、ひどく憔悴していた。
彼にとって、麻里は、最愛の娘であり、一番近い肉親だったのだ。
彼は、ミキをみると、気弱なほほ笑みを浮かべた。
「このたびは、どうも……」
ミキは、頭をさげた。しかし、そういう他人行儀な言葉に、そらぞらしさを感じていた。少くとも、遠くにいて何もしなかった良介より、自分の方が、麻里に近い関係にあったという気持がしていた。
「誰を信じたらいいのかわからなくなった」
良介が、ぽつりといった。
ミキは、顔をあげて良介を見た。
「一体、誰が麻里を殺したのだろうか？　陽子は、千絵が、麻里を殺したのだというし、千絵は、陽子が殺したのだという。……ミキさん教えてくれないか？」
ミキは、黙って首をふった。
「私にもわかりませんわ。でも、どちらが殺したとし

ても、責任は、あなたにあるんじゃないですか？」
　ミキは、大人みんなにあたりちらしたかった。大人たちのエゴで、麻里のような美しくていい娘が死んだのだと思った。
「それはそうかも知れない。私が単身赴任して、麻里を陽子にあずけっ放しにしていたこと。単身赴任の寂しさから、アフリカにやって来た千絵と深い関係になってしまったこと。そのため、陽子も、なぐさめてくれる人が欲しくなったこと。すべて私の不徳のいたすところだ。だから、これだけの悲しみを受けても、それは、自業自得だと思う。しかし、麻里が、誰に殺されたのかということは、どうしても知りたい。麻里自身だって、それがわからなければ、浮かばれないと思う。ミキさん、考えていることを言ってくれないか？公正な立場にいて、麻里を愛してくれた君の意見がききたいのだ」
　良介は、目にいっぱい涙を浮かべていた。
「でも、犯人がわかっても、麻里はかえって来ません」
　ミキは、かたくなにいった。

2

「君が大人たちに対して怒っているのはわかる。でも、どうしても犯人を知りたいんだ。ミキさん、お願いだ。教えて欲しい」
　良介は、熱心にくどいた。
「それがわかったら、犯人でない方の女性と愛し合うんですか？」
　ミキは、良介の顔を見た。
　大人は勝手だという気がした。
「それはしない。男の勝手だと思うだろうけど、事件が解決したら陽子とも、千絵とも別れるつもりだ。陽子は、麻里が子供を生んだので、夫婦の籍に入れたいといったけど、麻里が、半年前に死んでいるのなら、麻里の子供ではない。私は、陽子が、麻里を汚したこ

とが許せないんだ。陽子が、他の男の子供を生んだことよりも、死んだ麻里の名誉を傷つけたことに、激しく怒っているんだ」

良介は、ぎゅっと手をにぎりしめた。

「千絵さんは、運転できるけど、陽子さんは出来ませんね。麻里は、轢き殺されたんです」

ミキは、良介が、陽子だけ責めるのがしゃくにさわったので、千絵のことをいった。

「千絵の車は、ここ一年買いかえてないし、修理もしていない。十月の一日に、車検があった時にも、異常がなかったことは、警察も調べている」

〈やっぱり、良介さんは、千絵さんの肩を持っている〉

と、ミキは思った。それで、

「でも、そのときだけレンタカーを借りることも出来ますわ」

と、いった。

「警察では、すべてのレンタカー会社を調べたが、彼女は、借り出してないことがわかったそうだよ」

「キーのついていた他人の車を、勝手に使うことも出来るわ」

ミキは、いいつのった。しばらく黙っていた良介は、

「君は、千絵が犯人だと思っているの？」

と、きいた。

「そうは思ってませんけど、千絵さんにだって動機はありますわ」

ミキは、千絵が陽子を轢き殺そうとして、門から出て来た麻里を、間違えて轢いたこともありえるという推理を話した。

良介は、じっときいていた。その顔は、苦しげにゆがんでいた。もし、千絵が、麻里を殺したのなら、それは、すべて、良介が、彼女と浮気したことが原因だからである。

ミキは、重苦しい空気を破るように、口調を変えた。

「もちろん陽子さんの浮気の相手、森信彦という人が、自分たちの不倫をかくすため、麻里を轢いたというこ

とも考えられますわ」
「しかし、警察の調べでは、彼は、その時、東京の学会に出張していたそうだ」
彼は、口惜しそうにいった。
「東京なら、京都には三時間でかえって来れますわ。車でもかえってこれます。麻里が死んだ時刻はわからないのだから、アリバイ工作は出来ますわ」
ミキがいうと、良介は、首を振った。
「麻里が死んだ時刻は、大体わかってるんだ。昨日、警察できいたんだけど、麻里は、服の下に、時計のペンダントをしていて、それが、十四日の日付けで、八時三十七分でとまっていたというんだ」
「えっ、十四日の朝ですか？　それとも夜なんでしょうか？」
「十四日の朝か夜かはわからない。しかし、十四日の朝九時から彼は学会に出て、夜の九時は、何人かと飲みに出ているから、アリバイはあるんだ」
「でも、時計は、偽装工作できると思うわ。それに、麻里が死んでからも、少しは動いていると思うし……」
ミキは、疑わしそうな目をした。
「しかし、警察の調べで、それはないことがわかったんだ。麻里の致命傷となった胸部のタイヤ跡と、時計の表面についたタイヤ跡は一致するし、時計のガラスがとび散ってその破片が肉に食い込んでいるので、この時刻には、間違いないといっている。警察も、この時計については慎重に調べて、今日はじめて発表したんだそうだけど」
「時計がこわれたあと、時間を変えることは出来なかったんでしょうか？」
「文字盤は、ガラスの破片がつまって、針が動かせない状態だったということだ」
「すると、一体、誰が、麻里を轢き殺したのでしょうか？　森信彦という人の車は、傷んでないんですか？」
ミキは、まだ、森に執着していた。

「彼は、東京に行ってる間、友人に車を貸していたということなので自分の車に乗っていなかったことは確かだし、車も傷んでないそうだよ」

良介は、ため息をついた。それから、

「警察では、もう一人、麻里の友だちの晴子という女性を調べているらしいけど、彼女は、どんな人なの？」

と、きいた。

ミキは、晴子が山川不動産の社長の息子、邦彦と愛し合っていて、麻里と三角関係になったのかもしれないということと、指紋のことを話した。

「でも、彼女はいい人だし、私が東京へ麻里のこと相談に行ったとき、本当に親切にしてくれたんです。それに……」

ミキは、そこで、急に何かを思いついたような表情をした。

「今、気がついたんですけど、晴子さんと、山川邦彦さんが恋愛関係になったのは、麻里がいなくなって、私が東京へ探しに行ってからのような気がするんです。麻里が家庭教師をしていたというので、山川家にたずねて行ったとき、晴子さんも一緒だったけど、彼女は、その時が、邦彦さんと初対面だったような気がするんです。だから、麻里を殺すはずがないと思うんです」

「しかし、そういう風に装ったのかもしれないし、指紋のこともある」

良介は、自分に関係のある女性でなくて、晴子が犯人だったらいいと思っているのがみえみえだった。

ミキは、また、さからいたくなった。それで、

「指紋は、晴子さんが偽装のためにつけたのではなくて、陽子さんが意図したものじゃないでしょうか？」

と、いった。

「陽子が？　どういう風に？」

良介は、顔色を変えた。

「陽子さんは、いずれ、麻里の死体がみつかると思っていたので、その時、必ず、指紋照合があると思って、家中の麻里の指紋をすべて消し、晴子さんを家に呼んで、指紋をつけさせたのじゃないかと思うんです」

「うーん。なぜ、そんなことを陽子がしたんですか？」
「だって、死体が麻里だとわかったら、半年も前に死んだ麻里が、子供を生んでないことが一ぺんにわかるからですわ。子供はお正月に生まれたんですから」
「……」
良介は、黙って考えている。ちょっと、ショックを受けたらしかった。
「陽子は、麻里を殺したのは自分ではないけど、四十九日が過ぎたら、離婚したいといっているんだ」
「それで、離婚するんですか？」
「多分ね。彼女が、僕以外の男性の子供を生んだのは事実なんだから。麻里は、解剖の結果、妊娠したことも、赤ん坊を生んだこともなく、男性の経験もない軀だったと、京都府警の狩矢警部が教えてくれたよ」
良介は、鼻をつまらせた。
「そうですか……」
ミキも、感動した。
〈やっぱり、麻里は、私の思っていた通りの清純で、潔癖な女の子だったのだわ〉
「でも、陽子さんは、一年以上、良介さんは日本に帰って来なかったけど、間で自分の方から、アフリカに訪ねて行ったといったんです。それは、嘘だったんですね？」
ミキは、じっと良介を見た。
「いや、彼女が、アフリカに来たのは事実だ。しかし、その時、僕は、彼女を抱いてない」
良介の言葉があまりあらわだったので、ミキは、顔をあからめた。
「あ、ごめん。でも、本当のことだから仕方がないよ」
良介は、あわてていった。
「離婚して、千絵さんと結婚しないのですか？」
ミキは、大人は信用できないというような顔をした。
「しないよ。千絵は、僕がするといっても、断ると思うね。彼女は、そういう女なんだ」

「それは、わからないわ。今、そういってるだけで、女だったら、誰でも、愛する人と結婚したいと思うんじゃないですか？」

ミキは、譲二を思い浮かべながらいった。

「とにかく、麻里のために、結婚はしないで、彼女の霊と、水いらずで暮らしてやりたいと、今は考えているんだ。千絵は、ヨーロッパに一年間行くことをきめたみたいだ」

良介は、遠くをみるような目をした。

「逃亡じゃないんですか？」

ミキは、意地悪くいった。

「え？」

「本当は、千絵さんが麻里を殺していて、そのため、逃げるんじゃないんですか？」

「そんな……」

と、良介は、絶句した。

彼にも、千絵が、殺してないという確信はないのだろう。

「それで、おじさんは、もう、ずっと日本にいらっしゃるんですか？」

最後にミキはきいた。

「ああ、もう日本を出ない。ずっとあの家で、麻里の魂と一緒にいるつもりだ」

ミキは、何もいわず、立ち上って、頭をさげ、外に出た。

そのあと、譲二と会うつもりだった。

〈ジョージでも、結婚してから、浮気なんかするのかしら？〉

バスを待ちながら、ミキは考えた。

もし、結婚してから、譲二が、他の女と愛し合っていることがわかったら、自分は、どうするだろうかとも考えた。

バスが来ないので、ミキは歩き出した。

〈もし、ジョージが、私以外の人と結婚したら、私は、その女を殺したいと思うだろうか？〉

とうとう一駅歩いて、ミキは、空を見上げた。

第十四章　密室の謎

1

ミキは、パブで譲二と会って話していた。
「そういうわけで、良介さんは、麻里のことで相当ショックを受けて、二人の女性のどちらとも別れるといってたわ。それをきいて、少しはほっとしたけど、千絵さんと、本当に別れるかどうかわからないわ」
ミキは、ストロベリークレープを食べながらいった。
「彼と、陽子さんとの愛は、完全に冷めてるんだね」
譲二も同じように、クレープをすくいながらいった。
「男と女って、愛が冷めたら完全に他人になってしまうのね。怖いわ」
ミキが大人びた顔でいった。
「他人になるだけならいいけど、敵になることもあるからね」
譲二が呟いた。
「千絵さんて一体、何を考えているのかしら？　良介さんは、随分信じているみたいだけど」
「結婚したいにきまってるさ。愛してればだけど。結婚できるときになって、私は結婚しません、ヨーロッパに行きますなんていう女、嫌いだな。それは、映画かドラマの中だけだよ」
「……」
「ねえ、どうしたの？」
譲二は、ミキがのって来ないので、顔をのぞき込ん

だ。
「私、今、思い出したんだけど、通夜の時、夏川家にやって来た千絵さんて、お腹が大きかったと思わない？」
「えっ、本当？　気がつかなかったなあ」
譲二は、びっくりして食べていた手をとめた。
「私、女だからわかるの。あの女は、絶対妊娠してるわ」
いってから、ミキは顔をあからめた。
「うーん。それが本当なら、動機があるんじゃないかな。彼女は、陽子さんをおとし入れて、離婚させ、良介さんと結婚したいと思ったんじゃないかな。また、結婚する場合、義理の娘というのは、うっとうしい存在だからね」
「良介さんは、千絵さんが妊娠してるのを知ってるのかしら？」
ミキは、譲二の顔を見た。
「知ってたら、彼女とは、結婚しないときっぱりいわないと思うけどなあ」
譲二は、コーヒーを飲みながら言った。
「あの人が麻里を殺したのなら、絶対、良介さんと結婚させないわ」
ミキが決然といった。
「僕は、反対だな。ミキがいくら頑張っても、二人の結婚をやめさせることは出来ないし、そのまま放っておいて、あとで、良介さんが、千絵さんが麻里を殺したことを知って悩めばいいと思うけど」
「そうね」
ミキは、黙り込んだ。
しばらく、二人はコーヒーを飲み、クレープを食べていたが、譲二が、
「この前、夏川家で、お手伝いさんが死んだ事件、あれは、まだ、解決してなかったよね」
と、いった。
「そうよ。それがどうかしたの？」
「あの事件、何故おこったんだろう？　誰が犯人なの

かと、ふと思ったんだ」
「麻里を殺した犯人と同じ人物にきまってるわ」
「だったら、千絵さんではないということになるんじゃないかな。彼女は、あのお手伝いさんには、何の恨みもないだろうし、面識もないんじゃないの？」
「そうね。その点からいえば、晴子さんも、関係ないことになるわ。やっぱり、陽子さんが、一番動機があるといえるけど」
「あのお手伝いさんは同じ家にいたわけだから、麻里が突然いなくなったことについても、何か気がついたかもしれないよ。それに陽子さんが、赤ん坊を、麻里の子供だといって育ててたけど、本当は、陽子さんが生んだということもうすうす知ってたと思うんだ」
二人は、深刻な顔になった。

2

「でも、こういうことも考えられるわ。犯人が千絵さんか晴子さんだった場合、麻里を轢いて埋めているところを、あのお手伝いさんが通りかかって見てしまったため、殺さなければいけなかったとか……」
考えた末にミキが、いった。
「しかし、それなら、すぐに殺さないと意味がないんじゃないかな。何カ月もたって殺しても、喋ってしまったあとじゃ仕方がないと思うけど」
「だから、埋めているところじゃなくて、犯人が空地から出て来たところかもしれないでしょう？　そのときは、お互い知らない同士だから、すれ違っただけだったけど、あとで、それが、麻里の家のお手伝いさんだと気がついた。すると、空地から麻里の死体が出たとき、お手伝いさんにいわれるかもしれない。それだったら、チャンスを狙って殺そうということになったのとちがうかしら？」
ミキは、自分の推理に酔いながらいった。
「そうかもしれないね」
譲二は、腕を組んだ。

「きっとそうよ。それに、夏川家で、殺人がおこったら、犯人は家の者だと思われ、陽子さんが疑われるわ。それで、お手伝いさんを家で殺したのだわ」
「しかし、それなら、密室にする必要はないんじゃないかな。自殺にみせかけなくてもいいんだったらね」
「でも、殺した人物にとっては、やはり、殺人事件として、警察が調べることは、怖かったんだわ。自殺ですめば、それに越したことはないし」
「なるほどね。いよいよわからなくなって来たね。しかし、千絵さんや晴子さんは、お手伝いさんが殺される以前には、一度も夏川家には入ったことがないはずだから、部屋の様子もわからないし、殺したあと密室にするのはむつかしいんじゃないかな」
譲二は、おだやかにいった。
「でも、千絵さんは、良介さんから、家の間取りや、カギのことなど、きくことが出来るわ。さりげなく、時々きいていれば、良介さんだって気がつかないと思うわ。晴子さんだって、二年間、麻里から家のことをきいていれば、大体、見当がつくと思うわ。要は、カギの種類と、かけ方だけなんだもの」
「どっちにしても、密室の謎が解ければ、犯人も見当つくかも知れないね」
二人は、もう少し話したかったが店が混んで来たので、外へ出た。
「ところで、良介さんは、今、陽子さんと一緒に住んでるのかな？　それとも、千絵さんといるのかな？」
譲二がいった。
「そうねえ、どっちかしら？　でも、今はまだ夫婦なんだから、陽子さんと一緒にいると思うわ。いくら冷え切っていても、麻里のお骨もあるんだもの」
「そうだね。長い間一緒にいなかったけど、久しぶりに同じ家にいれば、情も移ってくるんじゃないかな」
「それはないと思うわ。ちょっと浮気をしたというのでなくて、不倫の相手の子供を生んでるんだもの。その赤ん坊を見るたびに、腹が立って気持が冷めてくると思うわ。同じ家にいても、口一つきかないんじゃな

いかしら」
「大変だね。花でも持って明日でもたずねてみようか？　本当は、お手伝いさんが死んだ部屋を見たいんだけど。見れば、密室の謎も解けるかもしれない」
譲二の言葉に、ミキもうなずいた。
「私も、同じことを考えていたの。あの部屋を是非見たいわ。今なら、良介さんもいるし、麻里のお葬式もあったところだから、たずねる口実があるわ」
二人は、翌日、夏川家を訪ねることを約束した。
「ねえ。ファミコンだけど、この間のポートピア殺人事件、もう犯人わかった？」
ミキがきいた。
「あと一息なんだけど、大体、見当がついてるんだ。うちへ来てやってみる？」
「ええ、やりたいわ。うちも買うつもりなんだけど、テレビを一台買って占領しないとつまらないから、まだ買えないの」
ミキが、残念そうにいった。
二人は、譲二の家に行き、ミキが、ファミコンの前に座った。
時々、譲二がヒントを与えてくれるので、ゲームは、どんどんすすむ。
一時間ほどして譲二が、紅茶をいれてくれたので、ミキは休憩した。
「面白いわ、このゲーム。場所を移動して、京都へ行って、まわりの人にきくと、京都弁で答えるんだもの。捜査本部へ女性を呼んで、『たたけ』と指示すると、刑事がフェミニストで、『僕には、女性は叩けません』というし、うまく出来てるわ」
ミキは、興奮していた。
「迷路が解けたし、電話番号もわかったし、あと少しだよ」
譲二は、先輩顔をしていった。
そのあと、また三十分ほど、続きをしたが、犯人は、とうとうわからなかった。
「今日はここまでにするわ。疲れちゃった」

と、ゲームを放りだしたミキの唇に、譲二の唇が重なった。

3

翌日、ミキは、譲二と誘い合って夏川家を訪ねた。
「あら、ミキさん」
陽子は、驚いたような顔をしたが、すぐに二人を応接間に入れた。
「あの、これ、麻里の好きだったバラの花です」
ミキは、花束をさし出した。
「有難う。麻里も喜ぶと思いますわ」
陽子は、涙ぐんでいった。
彼女が花びんをとりに行っている間に、良介が出て来た。
「やあ、どうも」
良介は、元気のない声でいった。
「あなた、ミキさんたちが、麻里の好きなバラを持って来て下さったんですよ」
その時入って来た陽子が、良介にいった。
「それはどうも有難う。座敷の方に、位牌が置いてあるから、よかったら、拝んでやってくれないか」
「はい」
ミキは、良介について、座敷に行った。その時、わざと応接間に財布を忘れておいた。あとで、戻ってくるためである。
座敷には、白木の机があって、そこに、麻里の写真が飾られ、花と線香がたむけられていた。
ミキと譲二は、代るがわる机の前にすすんで、手をあわせた。
二階で赤ん坊の泣き声がしたので、陽子が上って行き、良介は、庭に出て温室に入ると、麻里が高校の時から育てていた蘭の鉢植えを、二人に見せた。
「よかったら、一鉢ずつ持って帰ってくれないか。麻里の形見に」
と、良介がいった。

「有難うございます。大切にします」
といってから、急に、ミキは、バッグをあけて応接間に財布を落して来たらしいといった。
「すみません。すぐとって来ます」
ミキは、予定通り、家の中に入り、応接間までの間にあるお手伝いの部屋を見に行った。数字錠がひっかけてあったが、カギはかかっていないので、すぐあいた。六畳の畳の間で、押入れがついている。ドアの反対側には、ガラスの入った窓があった。
その錠を調べているとき、突然、入口から、陽子が顔を出した。
「ミキさん、どうしたの？」
ミキは息がつまる位、驚いたが、
「応接間に、忘れたお財布をとりに行くところだったんですけど、ここを通りかかったら、お手伝いさんの部屋だと気がついたので入って見たんです。出来れば、密室の謎を解きたいと思って」
と、わざと明るくいった。
「そう。それで、解けましたの？　密室の謎は？」
陽子は、かすかに微笑した。
「いいえ。全然駄目です。警察が調べてわからないものが、わかる筈ないんですよね」
ミキは、そういうと、部屋から出て、応接間にむかった。
陽子もついてくる。
ミキは、ソファの上の財布をとり上げると、ハンドバッグにしまい込んだ。
「じゃあ、また、来ます」
そういって、庭にいる譲二を呼んだ。
良介と譲二は、気が合ったらしく、楽しそうに話している。
やがて、二人は、鉢植えをかかえて、夏川家を出た。
「あー、重い。どこかで休みたいわ」
「じゃあ、そこの喫茶店に入ろうか？」
二人は、喫茶店に入った。
「例の部屋見た？」

「ええ。でも、陽子さんにみつかっちゃった」
「ええっ！　それはまずいよ」
譲二は、心配そうにいった。
「陽子さんのことだから、今日たずねて行った目的はわかったと思うわ。でも、仕方がないわ」
ミキは、微笑んだ。
コーヒーを注文してから、彼女は、紙にお手伝いの良江の部屋の図を書いた。



「ドアの数字錠をすりかえて来たわ。三種類ほど持って行ったら、丁度、同じ型のがあったから」
ミキは、ポケットから、数字錠を出した。
「えっ。盗んで来たのォ？」
譲二は、びっくりして、数字錠をみつめた。
「人ぎきの悪いことといわないで。代りはおいて来たわ」
ミキは、平気だった。
「多分、陽子さんのことだから、この数字錠の番号を知っていただろうから、良江さんが、これをかけて外出しても、中に入れたと思うわ。私だって、目の前に、数字錠があったら、どんな番号か、知りたいと思うもの」
「でも、数字錠の番号がわかっても、何にもならないんじゃないか。これは、内側からかけてあったんだろう？」
譲二が、数字錠にさわりながらいった。
「ええ、そうよ。だから、犯人は、内側からこれをかけて、ガラス戸の方から逃げたと思うんだけど、もし、番号がわかって、自由にあけ閉め出来たら、なにかわかるかもしれないと思って」
ミキがいったとき、譲二が、あっといった。
「ごめん、さわっているうちに、閉まってしまった！」

第十五章　アリバイトリック

1

「ミッキー、明日は君の誕生日だね。何をプレゼントしようか？」

突然、譲二にいわれて、ミキは、うれしくなった。

譲二の誕生日には、プレゼントをしたし、彼の部屋へ行ってバースディケーキも切ったのだが、譲二が、誕生日を覚えていてくれるとは思わなかったのだ。

彼は、割とそういうことに気がつかない方なのである。

「覚えていてくれただけでもうれしいわ」

ミキは、彼をみつめた。

確実に愛が育っているという感じがした。

「君の家ではお祝いするの？」

「ええ。ささやかだけど、母が食事を作ってくれて、バースデイケーキを切るの」

「じゃあ、今日、二人で前夜祭をしようか？　明日は、家の人に悪いから」

「いいのよ、うちへ招ぶわ。母にいってみる」

とはいったものの、母親が気持よく彼を迎えてくれるかどうか心配だった。

その気配を察したらしく、譲二は、

「無理するなよ。卒業したら、君がイヤだといっても、君の家へ押しかけていくから」

「何といって？」

「お嬢さんを下さい、かな」
「本当？　うれしい！」
ミキは、すっかり楽しくなって来た。
「じゃあ、今日、二人だけのバースデイパーティーをしましょう。私が、お食事を招待するわ」
ミキは、もっといい服を着てくればよかったと心の中で思った。
「じゃあ、これから、買物に行こうか？　どこがいい？」
譲二は、ミキの顔をのぞき込んだ。
「そうね。デパートがいいわ」
「デパート？」
「だって、何がいいかわからないから、色々見てみたいの」
「子供みたいだなあ」
譲二は笑いながら承知した。
ミキが、高級婦人服店の名前や、宝石店をいわないのが可愛く思えた。
二人は、四条河原町角にある高島屋へ出かけた。
「わあ、すてきなアクセサリー」
「じゃあ、これにしようか？」
「いや、もっと見てからにするわ」
ミキは、何を見ても、歓声をあげるが、譲二が買おうかというと、いいという。
「どうしたの？　一体何が欲しいの？」
たまりかねて譲二がいった。
何回も店員に断って出るのは恥ずかしかったのだ。
でも、ミキは、平気だった。
「こうしてジョージと見てあるいてるのが楽しいの。もっと、この時間を長く保ちたいわ」
「何だよ、それ。英語の訳みたいなこといって」
苦笑しながらも、彼も結構楽しそうだった。
二人は、洋服を見たりカメラを見たり、帽子を見て歩いた。
「まだ、きまらないの？」
「さっきの洋服にしようかなと思うけど、折角だから、

時計売場も見たいわ」
「そろそろきめないと、食事する時間がなくなるよ」
二人は、つれだって時計売場へやってきた。最近は、時計も安くなって、ファッショナブルなものが、いっぱい置いてある。

2

指輪になっているものや、ペンダントウオッチもあり、ミキは、一つ一つに、また、派手な声をあげながら見ていった。
一般むきの時計の横には、ブランドものの時計もある。
「ねえ、ねえ、麻里がしてた時計あれね？」
ミキが、その一つを指した。
「お父さんが、一番はじめに外国へ行った時、お土産に買って来たという時計だね」
譲二がいうと、ミキが、
「そうよ。死んだときしてた時計よ」
と、大きな声でいった。
係員が、びっくりしたような目でみている。
譲二は、早く、ミキを引っぱって行こうとしたが、彼女は、興味を持ったらしく動かない。
係員に、時計のあわせ方や、日付けの直し方をきいている。
「竜頭がすぐ持ち上る時計もありますが、これは、反対に二、三度まいて頂くと、このようにパシッと出て来ます」
係員の説明をききながら、ミキは、一つの時計を指さした。
「これ、時間は合ってるけど、日付けが違っているわ」
「ああ、それは、こういう風にいたしますと、すぐなおります」
係員は、竜頭をまわして、日付けだけ変えた。
「あらっ、日付けだけ変るのォ？」

ミキが、大きな声を出した。
「これは、クオーツではありませんので、使ってないとすぐとまってしまいます。その時、一番簡単なのは、針がとまっている時刻になるまで待って、日付けだけなおすといいのです」
係員は、たくさんの時計の中から、時刻が五時になっているのをみつけて来て、パチッと日付けを直した。
「わァ、本当だわ」
ミキが素直に感嘆したので、最初は、ヒヤカシの客だと思ってそこそこに応対していた係員も、好感を持って、色々と説明してくれた。
「ただ、日付けをなおすときに、お気をつけて頂きたいのは、時計が、夜の九時でとまっているのか、朝の九時でとまっているのか、知っていないと、半日狂ってしまいますよ。例えば、朝の九時でとまっていたのに、夜の九時に、ああ丁度いいと、日付けだけお直しになっても、翌日、まだ前日の日付けになったままになります。ハイ」
そのとき、ミキの目が急に大きくなった。
「そうなの、わかったわ。でも、この時計は、あと、二年ほどお金をためないと買えないわ。絶対、買いに来るから、ごめんなさいね」
ミキは、あやまった。
「結構でございます。どうぞよろしく」
係員は、笑いながら頭をさげた。
「ちょっと、ちょっと、ジョージ」
ミキは、譲二を引っぱって、エスカレーターのところまで来ると、
「今のきいた？　日付けのこと」
と、いった。
「ああ、僕も気がついたよ。麻里のペンダント時計の日付けの謎が解けたね」
さすがに、彼も興奮していた。
「これから府警本部へ行って、狩矢警部に話したいわ」
ミキは、真剣な顔になっていった。

「えっ、今から？　じゃあ、プレゼントはどうなるの、それから、食事は」
譲二は、驚いていった。

3

「プレゼントには、今の売場の隣にあったグッチの腕時計を買ってくれない？　時計のまわりが、赤とか白とかに変えられるの。あれが、前から欲しかったの」
「さっきの洋服は？」
「今、時計売場でお世話になったんだし、あの時計がいいわ」
ミキは、きかなかった。
二人は、戻って、その時計を買うといった。しかし、さっきの係員は、にこにこしているだけで、包装は、他の店員がしている。
「どうしたのォ、親切にしてくれたから買ったのにィ。あなたが、包んでくれないの？」
ミキがいうと、さっきの男は、
「すみません。これは、私の取り扱っている商品ではなくて、隣のです。でも、どうも有難うございました」
と、いった。
デパートなどでは、メーカーごとに、店員が出向しているらしい。
ミキは、がっかりしたような顔をした。
でも、きれいな包装紙で包んでリボンをかけて貰うと、ミキは、うれしそうに、それを抱きしめた。
「ジョージ、有難う。こんなに高いもの買ってくれて」
「いいんだよ、さっきの洋服より安いんだから」
ミキは、公衆電話で、京都府警本部へ電話をかけた。
しかし、狩矢警部は、出かけていて、あと、一時間半ほどしないと戻って来ないということだった。
「じゃあ、一時間半したら、そっちへ行きますから待ってて下さいと伝えて下さい。事件をとく重要な鍵が

わかったんです」
ミキは、すましていった。
「よかったわ。その間に食事しましょう」
二人は、河原町のロイヤルホテルに行き、定食をとった。
「おめでとう！　乾杯」
「有難う。ジョージ」
二人は、ビールで乾杯した。
「さっきの話だけど、麻里のしていた時計は、たしか十四日の八時三十七分を指していたのね」
「だから九月の十四日の朝か晩だということだったけど、十三日の夜の八時三十七分だったのかもしれないね。最初は、十三日に死んだんだと思っていたんだから」
「時間の方は、ガラスの粉がつまっていて針を動かすことが出来ないけど、日付けの方は、別のガラスがもう一枚入っているし、時間と関係なく、動かすことが出来るのね」
ミキは、スープをすくう手をとめていった。
「麻里は、十三日の夕方まで家にいたんだから、死んだのは、十三日の夜八時三十七分なんだよ。犯人は、日付けだけかえて、彼女を埋めてしまった。そして、あわてて東京へ行って、翌朝八時三十七分のアリバイを作ったんだ」
「犯人は、森信彦ね」
ミキは、譲二と目を見合わせた。
「そうだ。彼が、麻里くんを轢き殺したんだ。そして、アリバイを偽装したんだ」
「このこと、陽子さんは知ってるのかしら？」
「当然、知ってると思うよ。だから、子供を、麻里が生んだことにしようとしたんだ。東京から、ワープロで手紙を打ったりして、彼女が生きているように見せかけたのは、陽子さんなんだ」
「可哀そうな麻里」
二人は、食事をおえると、コーヒーを飲んでから、府警本部へ行った。

狩矢警部は、もう戻ってきていた。
二人が、かわるがわる話すのをきいて、狩矢は、緊張した顔になった。
「それは、いいことに気づいてくれました。ちょっと待って下さい」
狩矢は、橋口に、問題の時計を持って来させた。
ビニールの袋に入った時計は、無残にもこわれてとまっていた。

4

「十四日の日付けになっている写真はとってあるな」
狩矢は、念を押してから、手袋をはめた手で、時計をとり出した。
そして、ミキの説明をきいて、日付けのスイッチをおした。ピッと音がして、日付けは、十五日になった。
「やっぱり動きますね」
狩矢は、感動したように眺めてから、
「この上ぶたをはずしてみよう」
と、いった。橋口が、代りに、器用な手つきでふたをはずした。
「中のガラスの粉を全部とり去れ」
橋口が、時計を傾けて、中の粉をすべて外へ出した。
そして、チリ紙で、そっとぬぐった。
「針を動かして見て下さい。午後八時三十七分が本当なら、あと三時間半で十二時になったとき、日付けはかわるはずです」
譲二がいった。
みんなの見守る中で、針がまわされた。
十二時になったとき、ピッと音がして、日付けが十六日になった。
「やったァ！」
ミキが叫んだ。
「三時間半で日付けが変るということは、この時計は、夜の八時三十七分を指してたんですよ」
譲二が落着いていった。

「なるほど」
狩矢が念のため、ずっと針を動かしたが、日付けは変らなかった。
「こういう細工をしたということは、十四日の朝八時三十七分には、アリバイがなかったものということになるな」
「森信彦ですね。しかし、彼の車は、破損していませんでしたが。それに、その日は、友人に車を貸していたということでした」
橋口が困惑したように狩矢を見た。
「何かあるんだ、調べてみろ」
「はい」
橋口が走って行ったあと、狩矢は、二人に椅子をすすめた。
「多分、何かわかるでしょう。今まではアリバイをきき、車をざっと見ただけですが、これときまれば、詳しい調べが出来ます」
「では、森信彦と陽子さんの共犯ということになるんですね？」
ミキが、念を押した。
「いや、たとえ、彼の車が轢いたとわかっても、共犯かどうかは、証明できませんね。証拠がないので」
「でも……」
と、ミキはいいかけたが、考えると、確かに共犯という証拠はなかった。
「しかし、彼女は事情を知っていたから、いつかは、死体が出るかもしれないと思って、麻里くんの部屋の指紋をすべて消し、晴子さんを呼んでさわらせたと考えることは出来ますね」
譲二がいった。
「そうですね。たまたま、晴子という人がこちらへ来てくれて指紋がとれたからわかったけど、そうでなければ、東京にいる彼女の指紋とは、気づきませんからね。我々も指紋がちがうので、あの死体が麻里さんとは、思っていませんでしたよ」

「じゃあ、晴子さんは、事件に関係ないんですね？」
ミキが、うれしそうにいった。
「多分、そうだと思いますよ。事件が解決しないと、はっきりしたことはいえませんけどね」
二人は、府警本部を出た。
「今日、早速、晴子さんに電話をかけるわ。疑って申しわけなかったって」
「それがいいね。それにしても、麻里は可哀そうだね。母親とその不倫の相手に殺されるなんて」
譲二が、ため息をついた。
「本当は、今日、食事のあと僕の部屋に来て貰おうと思ったんだけど、殺風景な話になってしまったね」
「今度にするわ。今日は有難う」
ミキは、包みをしっかりと握りしめた。

5

京都府警本部で、森信彦についての調べがはじまった。
彼は夏川麻里の死んだ九月十三日より三カ月前の六月十五日に、新車を買い、乗っていたが、その車は、九月十二日から、友人に貸していたことがわかっている。
友人は、その車で福井へ三泊四日の家族旅行をし、写真もたくさんとって来ているが、写真に写っている車には、人を轢き殺した痕跡はなかった。
念のため、彼等が旅行した先の旅館などをきいて歩いたが、車には、かすり傷もなかったということだった。
友人は、その車を九月十五日に、森に返している。
狩矢たちが念のため、その車を調べたが、死体から、かすかに検出された塗料や、タイヤ跡とは違うものだった。
「森はシロなんでしょうか？」
橋口が、自信をなくしたように、狩矢にいった。
「わざと自分の車は、友人にあずけてアリバイをつく

り、自分は、他人の車に乗って麻里さんを轢き殺したのかもしれない」
「すると、犯行に使われたのは、盗難車ですか」
「その可能性もあるな。彼が、十三日の夜の八時三十七分に、京都で夏川麻里を轢き殺したとしたら、八時五十分の最終の『ひかり』には乗れない。それなのに、彼は翌日、九時には東京にいて、学会に出た。ということは、犯行後、死体を埋めて、車で、東京に向ったということになる。どっちにしても、友人に貸した以外にもう一台の車がいるんだよ」
狩矢は、いらいらしたようにいった。
「では、もう一度、調べて来ます」
橋口が、外へかけ出していった。
半日して戻って来た橋口は、勢い込んでいった。
「森は、今までに、車を三回買いかえています。そのときのセールスマンに、もう一度色々きいたところ、一台目の車は、二台目のを買うとき、下取りしたそうですが、三台目のを買うときには、二台目のを下取りしなかったことがわかりました」
「それは、なんでだ？」
「車検まで、あと三カ月しかないし、電柱に当って少し痛んでもいたので、三万円でしか引きとれないといったからだそうです。森は、三万円なら、車検が切れるまで乗って捨てるといったというのです」
「その車はどうなったんだ？」
「九月十五日になって、セールスマンが、廃車手続きをして車を捨てようと、引きとりに行ったところ、彼は、もう乗り捨てて来たといったそうです」
「すると、その車が問題になってくるな。彼は、放置してあったその車で、夏川麻里を轢き殺し、埋めて、そのまま、東京まで乗って行ったのではないかな」
狩矢が乗り出した。
「多分、そうだと思います。森を呼びますか？」
「そうしよう」
すぐに、森が呼ばれ、きびしい調べを受けた。
彼は、絶対に、麻里を轢いてないといい張ったが、

時計のトリックを示され、下取りしなかった車の行方をきかれると、動揺してきた。
「あれは、車検が切れたので捨てました」
「どこに？」
「滋賀県の方です」
「場所を書いて下さい。それから、捨てた日付けは、いつですか？」
狩矢がやつぎばやにきいた。
「えーと、九月の十五日だったと思います。十五日で車検が切れたので」
「九月十五日の何時頃ですか？」
「昼から、ぶらりと滋賀県に行って、琵琶湖の近くで乗り捨てました」
「では、帰りは、何で帰ったんですか？」
「電車です」
「どの駅から？」
「いや、通りかかったタクシーに乗って大津まで行き、そこから京津線で京阪三条まで出て戻って来ました」
「間違いありませんか？」
「はい」
「おかしいですね。九月十五日は、東京から帰って来られたあとで、夕方まで、大学で授業をしているじゃありませんか？」
狩矢が、手帳を見ていった。
森は、はっとしたように顔をあげた。
「あっ、その翌日でした」
「翌日？　すると、十六日ですか？」
「間違いありません。その日は、授業も昼からはありませんでしたし……」
「それじゃあ、あなたは、車検の切れた車で、琵琶湖の近くまで、捨てに行かれたわけですか？」
森は、ぐっとつまった。

6

「それに、車のセールスマンが、車検が切れる九月十

五日に、引き取りに行ったら、もう捨ててしまったといったそうじゃありませんか。なぜそれを断って、わざわざ、車検の切れた車を、琵琶湖という遠くまで捨てに行ったんですか？」

森は、しばらく考えてから、

「やっぱり、東京へ行く前の十二日くらいだったのかもしれません。最後にドライブして、ついでに捨てて来ようと思ったんです」

と、いった。

「それはおかしいですよ。あなたの友人が、十二日に車をかりに行ったとき、夜だったのに、もう一つの車は、ガレージにあったそうですよ」

狩矢は、色々と問いつめ、森を追い込んで行った。

「それに、あなたの捨てた車の色とタイヤの種類は、麻里さんを轢いた車に一致するんですがねえ」

一時間後、とうとう森は、夏川麻里を、去年の九月十三日の夜、八時三十七分に轢いたことを認めた。

「でも、わざとじゃありません。信じて下さい。あの日は、最終の新幹線で、東京に行くことになっていたのですが、友人に車を貸してしまい、駅まで行くのにタクシーがなかなか来なくて遅れそうになってしまいました。仕方なく、ガレージから、古い車を出して、京都駅まで行こうと思いました。京都駅の駐車場におき去りにしておこうと思ったのです。ところが急いでいたため、人を轢いてしまったのです。そこは、夏川家の前で、陽子さんが表へ出て私の通るのを待っている筈だったので、私は、陽子さんを轢いてしまったと思って、『陽子、陽子』と叫び抱きおこしました。しかし、それは陽子さんではありませんでした。そこへ、陽子さんが駈けて来て、死体を見て、『麻里、麻里ちゃん！』と、取り乱して泣きました。私は、はじめてそれが麻里さんだと気がつきました。私は、彼女と会ったことはありませんでしたから、しばらく呆然としていましたが、陽子さんが、泣きはらした顔でいいました」

「なんていったんですか？」

狩矢が鋭い目できいた。
「彼女は、『あなたでなくて、他の人が轢いたのなら、私は、すぐに、警察に通報するし、その人を殺すかもしれないくらい憎い。でも、あなたが轢いたことは、絶対いえないわ。麻里を埋めましょう』といったんです」
「そして、時計の日付けを動かすトリックを、考えたんですね？」
「そうです。彼女を埋めたあと、私に、今からすぐに、東京へむかうようにいいました。麻里は、まだ、しばらく生きていたことにしようといって」
森は、話しはじめると、すべてを話した。
東京まで乗って行った車は、東京で捨て、新幹線で帰って来たという。
「陽子さんの生んだ子供は、あなたの子供ですね？」
彼は、しばらく黙っていたが、うなずいた。
「夏川さんの家のお手伝いさんが死んだのは、麻里さんのことを気づかれたので、殺したんですね？」
狩矢がきいたが、森は、そのことについては、絶対に知らないと言い張った。
轢き逃げと死体遺棄だけならとにかく、お手伝いを殺したとなると、大変な罪になるから喋らないのかもしれなかった。
森の取調べのあと、狩矢は、陽子を呼んで事情をきいた。
森が自白したというと、彼女も、麻里の件はみとめた。しかし、お手伝いの死んだことについては、森と同じく、絶対認めなかった。
「あなたたち以外に、お手伝いさんを殺したい動機を持っている人はいませんよ。あなたは、お手伝いさんに、森さんとの不倫や彼の子供を生んだこと、それから、ひょっとしたら、麻里さんのことを感づかれて殺したんじゃありませんか？」
狩矢と橋口は、かわるがわる彼女に迫ったが、彼女は、どうしても、口を割らなかった。彼女をさがらせたあと、橋口は狩矢にいった。

「あの事件が、陽子または、陽子と森の殺人ということが立証されないと、彼女は、死体を埋めるのを手伝ったという罪だけになりますよ」
「森の方は、お手伝いの殺人には、関係していないのかも知れないな。手を下したのは、陽子一人ということで」
狩矢も考え込んだ。

7

ミキは、麻里の事件が解決したので、譲二と会った。
「よかったね。これで、麻里もやっと、安らかに眠れるね」
「麻里を、陽子さんたちが殺したのでなく、事故だったというのは、ほっとしたけど、本当かしら？　森という人が、わざと轢き殺したんじゃない？」
ミキは、疑い深そうな顔でいった。
「あの森というのは、小心な男だと思うよ。とても、麻里を殺したとは思えないなあ。それに、陽子さんも、麻里を殺すようには、僕は思えない」
「私も、そうだとは思うけど」
ミキは、アイスクリームをスプーンですくいながらいった。
「問題は、夏川家のお手伝いさんが死んだ事件だね。誰が、どんな方法でやったかがわからなければ、すっきりしないね」
「警察では、陽子さんがやったと思っているのね？」
「らしいね。でも、陽子さんは、絶対してないと言い張っているらしい」
「下手すると、あのお手伝いさんは、自殺ということで片付いてしまうわ」
「密室だからね。もし、他殺だとしたら、どういう風にして、殺したあと密室にしたかが解けないと駄目だね」
譲二が、コーヒーを口に運んだ。
うなずきながら、考えていたミキが、突然、

「ねえ、お手伝いさんを、千絵さんが殺したということはない？」
と、いった。
「えっ、千絵さんが？　どうして彼女がよその家のお手伝いさんを殺すの？」
「千絵さんは、あのお手伝いさんを夏川家の情報をきくため、手なずけていたんじゃないかしら？　陽子さんの不倫のことを探っていたのよ。麻里がいなくなったことも調べていたのかもしれないわ。陽子さんのことを、あまりよく思っていなかったお手伝いさんは、千絵さんに情報をもらしていた」
「その味方をなぜ殺すんだ？」
譲二が、わからないというような顔をした。
「そのうち、陽子さんが、弱味もあって、お手伝いさんの待遇をよくしたので、お手伝いさんは、陽子さんに千絵さんのことを喋ろうと思うようになった。それを感じて、千絵さんが殺してしまったんじゃないかしら？　夏川家で殺人がおこれば、犯人は陽子さんと思われるだろうし、その際に、彼女の不倫もあばかれると思って」
ミキは、熱っぽくいったが、譲二は、首をひねっている。
「千絵さんが、お手伝いさんを殺す動機がどうもわからないね。陽子さんの方が、動機があるよ」
二人は、その日は、それだけで別れた。
家に帰ると、ミキ宛の葉書が来ていた。
それは、良介の移転通知だった。
彼は、祇園に近いマンションに、転居したということで、新しい住所と電話番号が書いてあった。
〈良介さんは、陽子さんと離婚したのかしら？〉
ミキは、すぐに、新しい電話番号に電話をかけてみた。
「もしもし」
「あ、良介おじさん？　私、ミキです」
「ああ、ミキちゃん。どうしたの？」
良介は、葉書を出しておきながら、意外そうにいった。

「転居案内をいただいたので、びっくりしたのです」
「ああ、家を出ることにしたんだ」
「離婚なさったんですか？」
「まだだけど、そのうち、別れることになると思う」
「そうですか……」
ミキは、千絵さんと結婚するのかときたかったが、その言葉をのみ込んだ。
「あの家は、麻里との思い出があるので、出たくなかったけど、どうしても耐え切れなくてこっちが出てしまったんだ。陽子は、今、警察だけど」
「一度、遊びに行ってもいいですか？」
ミキは、きいてみた。
「いつでも来ていいよ。君に、話したいこともあるし……」
「それは、千絵さんが妊娠したということですか？」
ミキは、思わずいってしまった。
「えっ、君、知ってたの？　僕は知らなかったんだけど……」
良介は、そこで言葉を切った。
千絵とは、絶対結婚しないといっていた彼だが、千絵が妊娠したことで、その決心がぐらついているのだろう。
ミキは、人が来たからと嘘をいって電話を切った。
夜、夏川家のことを色々考えていると、東京の晴子から電話がかかって来た。
彼女とは、最近、何度も話をして、友情が復活している。
「ねえ、お願いがあるの」
晴子は、明るくいった。
「とうとう結婚式の日どりがきまったの。式に来てくれる？」
「えっ、山川さんと？　おめでとうございます。是非出席したいわ」
ミキは、快くいった。
「学生結婚になるけど、家の人が許してくれたの」
晴子は、うれしそうだった。

第十六章　密室トリックの解明

1

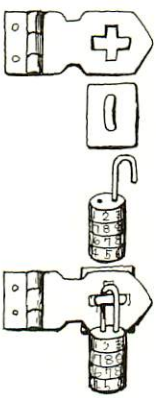
授業がすんでから、ミキは、譲二のところへ新しいファミコンのソフトを持って遊びに行った。
最近では、合鍵を一本預かっているので、留守でも入れる。
譲二は、まだ帰っていなかった。
ミキは、部屋を掃除し、シチューを作ってから、ファミコンで遊びはじめた。
彼女は最近、『ツインビー』にこっている。
バックに流れる音楽が楽しいし、空をぐんぐん飛んで敵をやっつけるのが気持よかった。『ステージ3』まですましたとき、譲二が帰って来た。
「あ、おかえりなさーい。ちょっと待ってね」
ミキは、折角いいところまで来たので、夢中でゲームを続けた。
譲二は、しばらく見ていたが、やがて、キッチンの方へ行って、インスタントラーメンを作りはじめた。
「あーあ、とうとう駄目だったわ」
と、キッチンにやって来たミキは、譲二が、ラーメンを食べているのを見て、大声をあげた。
「やめてっ！　折角シチューを作ったのに」
譲二は驚いて箸をおいた。
ミキは、いそいでシチューを器に入れた。
「もう、お腹ふくれちゃったよ」

「駄目！　絶対、食べて！　ジョージのために作ったんだもの」
「強引なんだなあ。わかったよ。食べるよ」
譲二は、苦笑しながら、シチューを食べはじめた。
「おいしい？　ジョージ」
「ああ」
「気のない言い方ね」
「とってもおいしいよ」
「本当？」
やっとミキも笑顔になった。
食べはじめると、若い譲二は、一皿をぺろりと食べてしまった。
「おいしかったよ。ミキ」
譲二は、お茶を飲むと、ミキにキスをした。
「まだ、ファミコンするの？」
「ううん、もういいわ」
「そう。じゃあ……」
と、譲二が、手をのばしかけた時、ミキが思い出したように、
「そうだわ、密室の謎を解こうと思って来たの」
と、いった。
「えっ、どうして」
譲二は、ムードをこわされてがっかりしながらきいた。
ミキは、良介が家を出たことを報告し、彼が、千絵が妊娠したことを知って、動揺していることを話した。
「もし、陽子さんが、お手伝いさんを殺したのならいいけど、千絵さんが殺したのなら、良介さんと結婚してはいけないわ。だから、お手伝いさんの事件、はっきりさせたいの」
「でも、警察が調べてわからなかったのだから、僕たちにわかる筈ないじゃないか。それに、良介さんが彼女と結婚したって仕方がないよ」
譲二は、座りなおしていった。
「お願い！　もう一回だけ一緒に考えて。そしたら、このことをすべて忘れるわ」

ミキは、真剣にいった。
「仕方がないなあ。折角、二人っきりでいるのに」
譲二は、煙草を出して火をつけた。

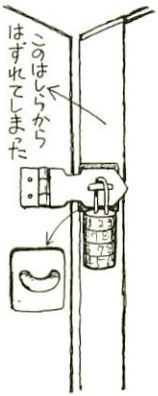
2

「お手伝いさんの死んだ部屋の出入口は二つしかないね」
煙草を吸い終ると、譲二がいった。本気で、密室の謎を考えてくれる気だと、ミキは、うれしくなった。
「そうよ。サッシュの窓と、内側からかけられた数字錠よ。数字錠は、お手伝いさんが、留守をしたり、家の中で仕事をしているときは、外から掛け、部屋の中にいるときには、中からかけていたんだって。外から、かけてあったんだったら、数字を密かに知っていたとか、知ってる番号のとつけかえたといえるけど、内側には、部屋を閉めてから、数字錠をかけることは出来ないわ」
「そうだね。やっぱり、サッシュの錠の方だな」
譲二がいった。
「でも、サッシュの鍵も、内側からしめてあるわ。やっぱり外から閉めるのは無理ね」
ミキが、しばらく考えたあとでいった。
「いつも、そこでとまっちゃうんだよ。だから考えるのをやめにしようというんだけど」
譲二は、メモに、数字錠の絵を書いた。



「ねえ、この部屋にどこか、数字錠つけていい？」
「いいけど、カギがないよ」
「新しい数字錠を買って来たの。このキッチンと、座敷の間のドアにつけていい？」
「いいよ」

ミキは、用意して来た数字錠を出して、部屋の中のドアにつけはじめた。
「金槌ない？」
「ないけど、大きなペンチがあるから、あれで叩いたらどうかな？」
二人は、協力してやっと数字錠をつけ終った。
「やっぱり、こうして実物をみるとよくわかるわ」
「暗号数字は何？」
「３３０４よ」
ミキは、満足そうに錠をみつめた。
二人で引っぱったり、鍵をかけたりしているうちに、しっかりついてなかったらしく、小さな方の金具が数字錠をつけたままで、柱からはずれてしまった。



「あらっ、はずれたわ」
ミキが、そばへ行ったが、突然、はっとしたように柱をみつめた。
「ジョージ！　これよ。これだわ」
「何？」
譲二もそばにやって来た。
「ほら、これ、鍵がついたままはずれてしまったわ。ということは、この状態にして、あとから柱に接着剤でくっつけてもいいということだわ」
「そうだね。しかし、外からひっつくかな！」
「柱の方と、カギの方に、接着剤をつけておいて、ピシャンとしめれば、くっつく場合があると思うわ。やってみましょうか？」
ミキは、譲二の引出しから接着剤を出して貰って、一生懸命やってみた。
「そうだわ。糸をひっかけて外までひっぱっておいて、くっつければいいんだわ。接着剤より、両面テープの方がいいかもしれない。それから、死体を、この柱に

もたれかけさせて、閉めるといいかもしれないわ」
ミキは、夢中になっている。
金具は、ぴったりとついて、ミキは、キッチンへ閉め出されてしまった。
「あけて！　閉め出されてしまったわ」
ミキが、大声をあげた。
「こっちは死体になってるんだからあかないよ」
譲二が笑いながらいった。
「ジョージの意地悪。早くあけて」
譲二が数字をあわせてあけると、ミキが、とびついてきた。
「やったわ」
「そうだね。こういう方法でもやれるんだね。でも、犯人は誰？」
「さあ、やっぱり陽子さんだと思うわ。千絵さんでは、これだけ、部屋や鍵の構造がわからないし、夜中にごそごそしてたら、陽子さんに見つかってしまうわ」
「そうだね。この話をして、警察に考えて貰おう」
話が一段落すると、ミキは冷蔵庫から、ビールを出した。
「あれっ、ビールあったの？」
譲二がうれしそうにいった。
「持って来たのよ。晩御飯の時出そうと思って」
「うれしいな」
二人は、缶ビールを一本ずつ飲んだ。
「ねえ、ミッキー」
「何？」
ミキが、そばへ行った。
譲二が、その手を引っぱった。ミキが倒れ込んで来た。
二人は唇をあわせ、そのあと、激しく愛しあった。
一時間後、シャワーを浴びて服をつけたミキは、髪をとかしながらいった。
「遅くなったので、また叱られるわ。母に、ジョージのこと、打ちあけていい？」
「いいよ。いや、それより、一度、君のところに行っ

て、正式に挨拶しようかな」
「えっ、何といって？」
「お嬢さん下さいって」
「うれしい！　本当？」
「うん。やっぱり、そうした方がいいと思う。来年は卒業だから、すぐに結婚しようよ。いいね」
「うん」
ミキは、はにかんでいった。

3

翌日、二人は、京都府警本部へ行って、狩矢警部に、密室の謎を解いた話をした。
「なるほど、あの時、死体は、どういうわけか、ドアによりかかっていましてね。カギをあけて外へ出ようとして力尽きたのではないかと話していたものです。早速調べてみましょう。我々は、廊下へ出たあと、部屋の内側から、数字錠をかけることは、不可能だと思い、専ら、サッシュ窓の方ばかり検討していたのです」
話の途中ですぐに、夏川家へ橋口警部補たちがとんで行った。
「それから、数字錠をかけるときには、どうしても細かい仕事ですから、手袋をはずしたんじゃないかと思うんです。お手伝いさん以外の指紋がないか調べて下さい。数字の上に、指紋があるかもしれません」
ミキが、ポケットからすりかえた数字錠を出して言うと、狩矢は、一瞬おどろいてミキの顔をみた。
「錠は鑑識にまわして我々は夏川家にいってみましょう」
狩矢がいって、二人は、一緒にパトカーに乗り込んだ。パトカーは走り出した。
「ワア！　パトカーに乗るってはじめてだわ。すてき」
ミキは、大よろこびだった。
夏川家に着くと、橋口がとび出して来た。

「やっぱり、接着剤ではりつけてありました。今、周辺の指紋を調べています」

その間に、狩矢とミキは、事件のおさらいをした。

「もし犯人が陽子なら、廊下からお手伝いを呼び、話があるといって、数字錠をはずさせて中に入る。そして、わざと自分の不倫の恋について打ちあけ、味方になってくれるようにたのむ。そして、口外しないように約束してくれといって遺書になった文章を書かせる。そのあと乾杯して、毒殺する。そして、数字錠のトリックをつかって廊下に出て、戸をしめ、密室にする。こうですね、ミキさん」

「もし、千絵さんだったら、サッシュ窓の方へ出るトリックを考えると思うのです。廊下へ出てしまったら陽子さんに見つかる心配もあるし、玄関をあけて出たら、あとしめることが出来ませんから」

「なるほどね。しかし、陽子さんの話では、玄関のカギはあいていたそうです」

「本当かどうかわからないわ。外から、人が入ったように思わすために、嘘をいったのかもしれないし……」

ミキは、うたぐり深い目をした。

そこに鑑識から、数字錠の数字のところから指紋がいくつか採れたという連絡があり、現場での指紋とあわせて照合しなければならないので、全員で本部へ戻った。

一時間後、狩矢は、ミキと譲二に、おごそかにいった。

「犯人は夏川陽子でした。接着剤のついた手でさわったらしい指紋が、ドアの外から発見されましたから。今、本人に話をきいています」

「やっぱり、陽子さんだったのね」

ミキは、譲二と顔を見合わせた。

「夏川家からは、千絵さんの指紋は一つも発見されず、お手伝いさんとの接触もないことがわかりました。それに、その夜、千絵さんは、東京で明方まで、良介さんの会社の人と飲んでいたことがわかったのです」

ミキたちは、府警本部をあとにした。
数日後、夏川陽子の自白によって、すべての事件が解明された。
お手伝いは、突然、麻里がいなくなったことに不審感を抱いていたところへ、陽子がミキに出すためにワープロで打った手紙の下書きを、屑かごから発見して、陽子にききただしたのだという。
その時は、なんとか説得したが、やがて、陽子の不倫を知り、良介に手紙を出したことがわかったので、殺すことにしたのだという。
麻里は、殺されたのでなく、事故死であり、陽子は、麻里を深く愛していたが、自分の不倫の相手が轢き殺したとはどうしてもいえず、埋めたという。そして、どうせ死んでしまったのなら、生まれてくる赤ん坊のために、これを利用しようと考えたといった。
「私は、年齢的に、子供を生む最後のチャンスだと思ったので、妊娠したとわかったとき、どうしても子供が生みたかった。良介は、麻里がいるからと、どうしても、私に子供を生むことを許してくれなかったのです」
と、陽子は泣き伏したという。
事件が解決してから数日後、ミキは、千絵に呼び出された。
〈多分、良介さんと結婚するという話だわ〉
ミキが、堅い表情で待ち合わせの喫茶店へ行くと、千絵が、青白い顔でほほえんだ。
「ミキさん、このたびは、色々有難う」
「いいえ。でも私、千絵さんを最後まで疑っていたのです」
「いいのよ、警察も疑ってたもの。私一つだけあなたに報告したいの」
「何ですか？」
「私、陽子さんの気持を思って、やはり、子供は生まないことにしたの」
「え？」
「昨日、病院に行って来たわ」

4

千絵は、子供を堕ろしたという。

「私、子供を生んで、のっぴきならないようにして、男の人に結婚を迫るというのは嫌いなの。私、良介さんを愛しているわ。でも、ここで、強引に子供を生んだら、愛が死んでしまうような気がするの。彼とのことは、事件が一段落してから考えるつもりよ」

千絵は、にっこり笑った。でも、それは、淋しいほほ笑みだった。

ミキは、うれしくなった。

「千絵さん、有難う。私、最初に会ったときから、あなたが好きだったの。でも、途中では、あなたが、麻里を殺したのではないかと疑ったし、妊娠のことを知ったときには、あなたが嫌いになったわ。ごめんなさい。でも、今は違うの。あなたが好きよ」

「有難う」

千絵は、子供を生むことを断念し、陽子は、子供を生んでしまった。両方とも、不倫の子供である。

しかしそこに、二人の女の違いがあった。

一体、どっちがいいのかはミキにはわからなかった。愛する男の子を生まずにはいられなかった女と、生まずに踏みとどまった女のどちらが、人間的で、女らしいかといえば、陽子の方だろう。しかし、千絵には、知性と意志の強さがあった。

「森さんと陽子さんは法律的には罰せられるけど、私も、結局、子供が犠牲になったわ。不倫というのは、やはり罪なのね」

千絵が、はじめて気弱そうな表情をした。

「ヨーロッパへ行くって本当ですか？」

ミキがきいた。

「ええ。一年間行ってくるわ。ミキさん、良介さんと、たまには会ってあげてね」

千絵はそういうと、立ち上り、足早やに去って行った。

数日後の日曜日、ミキは、良介のマンションを訪ねた。

良介は、あの精悍な面影は消えて、疲れた中年男の顔をしていた。

「やあ、ミキちゃん、よく来てくれたね」

彼は、喜んで、ココアを出してくれた。

「ミキちゃんは、卒業したら、どんなところへ就職するの？」

「私、マスコミ関係につとめたいって思ってたんですけど、やめて、学校の先生になろうかと考えているんです。教職課程の単位は取ったんですけど、今までは先生にはなるつもりはなかったんです。でも、……子供は可愛いし、純粋なところがあるから」

「そう。……それは、大人の世界の汚さを見てしまったからかな。それなら申しわけないね」

良介は、まぶしそうにミキを見た。

「そんなんじゃないんです」

ミキは、一応否定した。確かに、良介のいう通りだったが、それ以外にも、学校の教師が、自分に向いているような気がしたからである。彼女は、社会に出て活躍するより、譲二と平和な家庭を持ちたいと思っていた。

それには、生徒相手の教師が合っているように思えた。

「君は、自分の子供も生むだろうし、先生になって、たくさんの子供に囲まれるなんていいなあ。僕は、結局この年になって、自分の子供は一人もいないのだ」

良介は、淋しそうにいった。

「麻里が生きていればよかったのに……」

ミキがいうと、良介は、首を振った。

「今回のことで、一番悪いのは自分だということが、はじめてわかったよ。結婚するとき、陽子が、麻里ちゃんがいるから、私の子供はいらないといってくれたのをいいことにして、彼女に、子供を生ませなかったんだから。最初はそのつもりでも、彼女も女だ。やっぱり、自分の子供が欲しかったんだね。冗談ぼく、

『私が子供生んだら、麻里は意外に喜んでくれるんじゃないかしら？』といったことがあったよ」

良介は、沈んだ声でいった。

〈彼も、罰を受けたんだわ。彼女に子供を生ませなかったために、今は、自分の子供を持てないという……〉

ミキは、顔をあげた。

「陽子さんは、あの赤ちゃんをどうしてるんでしょうか？」

「さあ、どこかにあずけたんだろうな」

良介はいった。

「千絵さんとは結婚しないんですか？」

「彼女は、考えたいといって昨日、ヨーロッパに行ってしまったからね」

「私、陽子さんが本当に、愛してるのは良介さんだと思いますわ。森さんとは、淋しかったのと、子供が欲しかっただけだと思うんです。私が家へ行ったとき、陽子さんは、良介さんの服にブラシをかけ、その背広に、頬を寄せるようにしているのを見たことがあります」

ミキがいうと、良介は、びっくりしたように、彼女を見た。

5

東京から、晴子が山川邦彦を連れて、京都に遊びに来たので、ミキは、譲二と一緒に会うことにした。

晴子は、アイドルタレントのようなワンピースを着て、幸せ一杯という顔をしていた。

「秋に結婚式を挙げる筈だったけど、式場のいい日があいてなくて、春になったの。その方が、勉強もゆっくりできていいと思うし」

晴子は、ミキにいった。

山川は、最初の時と違って、愛想がよかった。

テレビ局に勤めているだけあって、話もうまいし、気もよくついた。

京都の寺を案内し、食事を一緒にしている間に、四人は、前からの知り合いのように親しくなった。
「ミキちゃんたちのお式はいつ？」
晴子がにこにこしながらきいた。
「まだ、わからないわ。ねえ」
ミキははにかみながら譲二の方を見た。
「僕はいつでもいいんだけど、ミッキーのご両親にもまだ、正式に挨拶してないから、卒業してからきめることにしようと思ってるんです」
譲二が、真面目な顔でいった。
「陽子さんと森さんは、どんな罪になるのかしら？」
デザートを食べながら、晴子がいった。
「森さんは、轢き逃げと死体遺棄かしら？　陽子さんは、計画的な殺人と死体遺棄だから、陽子さんの方が、罪が重いんじゃないかしら？」
ミキがいった。
「赤ちゃんがいるのに大変ね」
晴子が、痛ましそうにいった。
「私もそう思ったので、調べてみたの。赤ん坊は、施設にあずけられていたわ」
「そう……。陽子さんは、子供を生んだことを後悔しているかしら？」
「そうは思わないわ。夫も恋人も、名誉も、家庭もすべてを失った陽子さんにとって、唯一の生き甲斐は、子供だと思うわ。刑期を終えて出て来て、子供をひきとるのを楽しみに、生きていると思うの」
晴子は、うなずいた。
「でも、そのときには、大きくなっている子供が、犯罪人の母親を受け入れるかどうかはわからないわ」
ミキは、ため息をついた。
晴子が、良介と千絵のことをきいたので、ミキは、千絵が子供を堕ろしてヨーロッパへ行ったことを話した。
「私だったら、子供を生んで結婚してしまうわ。ミキはどう？」
晴子が顔をのぞき込んだ。

「私は、まだ、不倫の恋というのがわからないわ。相手に奥さんがいたら、はじめから、恋をしないと思うの。経験不足かしら？」
ミキがいった。
「私はわかるわ。彼に、恋人がいるんじゃないかと随分悩んだもの。それでも、彼を独占したいと思ったわ」
晴子は、熱っぽくいった。
女たちの話を、男二人は、何もいわないできいていたが、突然、譲二が、ミキにいった。
「本当のことというと、僕は、君以外に好きな女性がいるんだ」
と、いった。
「えっ、そんなのォ。誰なの？　それ。私、殺してやるっ」
ミキが、声をあげた。
譲二が、あわてていった。
「冗談だったら。君があんまり、いい恰好するからだよ」
「ひどいわ、ジョージ。びっくりしたわ」
ミキは、半泣きになっていった。
「ごめん」
「でも、不倫の気持が、ちょっとわかったわ」
ミキは、泣き笑いした。
その顔が可憐だった。

6

麻里が死んで、はじめてのお盆が来た。
良介から、お墓を建てたから行ってやって欲しいという連絡があったので、ミキは、譲二と出かけた。
東山の山ふところに、お墓は立っていた。
戒名の書かれた石の前に立つと、ミキは、改めて涙が流れて来た。
花を供え、線香をたてているところへ、狩矢警部と橋口警部補もやって来た。

彼等も黙々として、墓石に水をかけている。拝み終ったとき、狩矢が呟いた。
「これで、彼女も、やっと成仏できるだろう」
墓のかこいの外へ出ると、狩矢が改まった調子で、
「あなた方には、協力していただいて有難うございます。これは、我々からのささやかなお礼です」
といって、包みを渡した。
「えっ、何ですか？　これ？」
思いがけないことに、ミキが、とまどうと、
「ファミコンの機械です。ディスクの方も入っています。ソフトは、なるべく新しいものにしました」
と、いった。
「えっ、うれしい！　私、欲しかったんです」
ミキは、素直に喜んだ。
山道を歩きながら、自然に事件のことや、裁判の話になった。
「森信彦は、大学をクビになりましたよ。それから、夏川良介さんが、陽子さんに会いに、時々来ています」
「本当ですか？」
ミキは、驚いた。
〈夫婦って、そういうものなのだろうか？〉
「陽子さんのたのみで、良介さんは、もとの家に戻ったみたいですね。彼は、麻里さんの部屋をのぞいては、涙を流しているそうです。お手伝いさんのいた部屋は、こわされて、庭になっていますよ」
橋口がいった。
秋頃、求刑が行われるだろうということだった。
狩矢たちと別れた二人は、小さなテレビを買い、ミキの家に行った。ファミコンをとりつけるためである。
二階にあがり、テレビにとりつけて、二人で、夢中になっているところへ、母親が帰って来た。
譲二が、緊張して挨拶をした。
母親は、別に何もいわず下におりて行ったが、やがて、下から、ジュースと、西瓜を皿に入れて持って来た。

「ジョージさんは、西瓜がお好きやそうですね」
「はい、有難うございます」
母親が、譲二のことを気にかけていてくれたことが、ミキには、うれしかった。
「よかったら、今日は、夕食を食べていって下さい。すき焼きにしますから」
母親は、にこにこしていった。
「ジョージ。折角、母が、ああいってるから」
「では、御馳走になります」
母親が、下におりていくと、ミキは、譲二にとびついた。
「よかったァ。私たちのこと許してくれたんだわ」
「そうかな？」
「そうよ。うちの母は、あんなこと普段いわないもの」
「それならうれしいけど」
譲二は、考え込んでいる。
「どうしたの？　イヤなの？」
ミキが心配そうにいった。
「違うよ。折角のチャンスだから、今日申し込もうかと思って」
「本当？　うれしいっ」
ミキは、とび上った。しかし、次の瞬間、心配そうにいった。
「うまくやってね。母はいいけど、父はうるさいから」
「うん、がんばるよ」
やがて、夕食の時間になった。
ミキは、珍しく無口で、母親の手伝いをしている。
父親も帰って来て、席についた。
ミキは、譲二を紹介し、そのあと、狩矢警部から、ファミコン一式をもらったので、設置に来て貰ったのだといった。
譲二は、緊張しているので、ほとんど食べない。
父親は、譲二に、将来何になるのかとか、運動は何が好きなのかなどときいた。

食事が終りそうになったとき、ミキに突っつかれて、譲二は、膝を正した。
「あの……、実は、お嬢さんを頂きたいのですが……」
一瞬、沈黙が流れた。
耐え切れなくなって、ミキが何かいおうとしたとき、父親がゆっくりといった。
「ファミコンは、二台もいらなくなったね」
ミキの目から、涙があふれた。

初出誌　週刊明星　1985年10月17日号～1986年4月24日号

不倫家族殺人事件

一九八六年 七 月二五日 第一刷発行

定 価 六八〇円

著 者 山村美紗

発行者 堀内末男

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二―五―一〇

郵便番号 一〇一

出版部 (〇三) 二三八―二八四二

電話 販売部 (〇三) 二三〇―六一七一

製作課 (〇三) 二三八―二九六四

印刷所 凸版印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本が万一ございましたら小社製作課宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

本書の内容の一部または全部を無断で複写、複製、転載することを禁じます。

©1986 M.YAMAMURA, Printed in Japan

ISBN4―08―772568―5 C0093